

聖域・街道・地割 Ⅲ

— 古代ローマと日本をつなぐ —

Le Sanctuaire, la Voie et le Cadastre Ⅲ

Comparaison entre le Japon et l'Antiquité romaine



BEPPU UNIVERSITY REPORT OF RESEARCH GOOD PRACTICE

Rédaction : IINUMA Kenji *directeur*

YAMAMOTO Haruki *rédacteur en chef*

IISAKA Koji *rédacteur*

Publication : BEPPU UNIVERSITY

82 Kitaishigaki 874-8501 Beppu JAPAN

Impression : CREATES co.,Ltd

20-4 Kamegawa-higashimachi 874-0022 Beppu JAPAN

2018

まえがき

本学とフランス・モンペリエ第三大学との共同制作による研究報告書も今回で三冊目を数えることとなった。

今回は1昨年(2017)10月本学において、そして昨年(2018)10月モンペリエ第三大学においてそれぞれ開催された二つの研究集会での報告を掲載した。前者は2017年10月26日に、本学大学院文学研究科創設20周年記念事業の一環で開催された研究集会「聖域・街道・地割—古代ローマと日本をつなぐ—」の際に発表された、モンペリエ第三大学准教授アントワヌ・ペレス氏(第4論文)と同マルティヌ・アセナ氏(第5論文)とエリザベト・アストゥリック氏(モンペリエ第三大学・非常勤、第6論文)のフランス語論文とその日本語訳である。後者は、当初、2018年の3月27日にモンペリエ第三大学で計画された研究集会で報告する予定であったが、エールフランスのストライキのため、渡航できず中止となった。その後、同年10月9日にモンペリエ第三大学、同大人文・社会科学学際研究センター(CRISE)およびフランス南部・人間科学館(MSHSud)共催で開催されたシンポジウム『中津条里III』で発表された飯沼賢司本学教授(第1論文)、小柳和宏大分県立歴史博物館館長(第2論文)、山本晴樹本学名誉教授(第3論文)の日本語論文とそのフランス語訳である。

この共同研究も次第にテーマが絞られてきており、まずわれわれが確認したのは、フランス南部の古代ローマ都市(ナルボンヌ、ニーム)における聖域とそれに連なる街道(ドミティウス街道)およびその街道を基準線としてとりこむ農村部の方格子地割(ケントゥーリア地割)が歴史地理学的な研究対象であるばかりでなく、政治権力(皇帝)および祭祀(皇帝礼拝)と密接に関係していることであった。それを踏まえて、われわれは東九州における条里制遺構(中津条里・宇佐条里)とその基準線としての官道(勅使街道)の建設が政治権力(天皇)の介入と祭祀空間(宇佐八幡宮)の成立とに密接に関係する可能性を指摘した。

今後はこれまでの成果を下に、宇佐八幡宮とそれに至る勅使街道およびその街道を基準にする条里制を一体としてとらえ、東九州における聖域・街道・地割の総合調査を現地において行うことになる。因みに本年4月には、モンペリエ第三大学の共同研究者4名が来日し、現地調査を行う予定であり、それを踏まえて本年12月には彼らと本学の共同研究者とを交えたシンポジウムを大分県立歴史博物館、宇佐市、中津市の協力を得て、本学において開催することを計画している。

2019(平成31)年2月28日

研究代表者 飯沼 賢司(別府大学)

フランス側研究代表者 アントワヌ・ペレス(モンペリエ第三大学)

目 次

まえがき

飯沼 賢司 (別府大学)

1. 国境の祭祀と官道と条里—宇佐とオランジュの比較を通して— …………… 1

飯沼 賢司 (別府大学)

2. 発掘成果にみる古道と条里 …………… 19

小柳 和宏 (大分県立歴史博物館)

3. ナルボンスの属州聖域と宇佐の条里制 …………… 33

山本 晴樹 (別府大学)

4. 地割—ローマ皇帝の権威の表現— …………… 41

アントワヌ・ペレス (モンペリエ第三大学)

山本 晴樹 訳 (別府大学)

5. ニーム、プリンケプスとケントゥリア地割 …………… 56

マルティヌス・アセナ (モンペリエ第三大学)

坂井利佐子 訳 (別府大学)

6. 中津から宇佐にいたる勅使街道沿道の寺社、条里の永続化の要因か? …………… 72

エリザベト・アストリュック (モンペリエ第三大学)

飯坂 晃治 訳 (別府大学)

TABLE DES MATIERES

- 1, Le culte frontière, le Kandô et le Jôri : comparaison entre Usa et Orange 12
IINUMA Kenji (Beppu University)
Traduction par H. Yamamoto
- 2, Sur la relation entre la route ancienne et le Jôri d'après des résultats des fouilles à Usa (Japon) 28
KOYANAGI Kazuhiro (Musée départemental de l'Histoire à Oita (Japon))
Traduction par H. Yamamoto
3. Le sanctuaire provincial de Narbonne et le Jôri d'Usa 38
YAMAMOTO Haruki (Beppu University)
4. Le cadastre, expression de l'autorité impériale romaine 51
Antoine Pérez (Université de Montpellier III)
5. Nîmes, le Prince et la centuriation 64
Martine Assénat (Université de Montpellier III)
6. Les temples le long de la Voie Impériale de Nakatsu à Usa, éléments de pérennisation du Jôri ? 79
Elisabeth Astruc (Université de Montpellier III)

国境の祭祀と官道と条里

—宇佐とオランジュの比較を通して—

飯 沼 賢 司 (別府大学)

はじめに

昨年3月、私は、播磨陽子さんの車でオランジュに出かけました。高速道路に乗り1時間15分ほどで到着。オランジュの古代劇場の駐車場で先発していたペレス、アセナさんの車と会いました。これまで、2回のモンペリエ訪問で、訪ねることができなかった場所であり、劇場と凱旋門、そして、ペレス先生の報告ではじめて知ったケントゥリアの地割を刻んだ石板が見られるということでワクワクしていました。駐車場から山側に100mほど歩くと、巨大な壁のような建物が目に入ってきました。オランジュの古代劇場です (fig.1)。中へ入り、裏へ回ると、山の斜面を削り、観客席にした巨大劇場が目の前に見えました。劇場の舞台の裏中央には、カエサルの後継者となったアウグストス (オクタビアヌス) の像が建っていました (fig.2)。ここを皮切りに、凱旋門、博物館の壁に貼られたケントゥリアの地割の石板を見学しました。このオランジュの見学が宇佐とオランジュを比較するという今回の報告を思いつくきっかけとなりました。

1 オランジュのローマ遺跡と宇佐

オランジュは紀元前36年ころ、カエサルの亡くなった後、その將軍アウグストス (オクタビアヌス) によって造られた都市です。このとき、凱旋門、劇場などの施設ができました。ローマ遺跡として最もよい残りを示すものといわれています。オランジュの古代劇場の舞台の裏中央には、カエサルの後継者となったアウグストスの像が建っています。劇場建設当初から、この位置にアウグストス像が造られたとすれば、それはのちの礼拝の祭祀神殿につながる始原とも考えられるのではないのでしょうか。

この古代劇場の北西には、凱旋門が建っています (fig.3)。ガリアを征服したローマの兵士たちがここから入場しました。正面の壁画には、ガリアの象徴である「猪」が彫られ、その戦いの様子が描かれています。両サイドの壁には、戦利品のガリアの楽器、武器の楯、鎧が描かれ、その下には捕虜となったガリアの人々が描かれています (fig.4)。この凱旋門から入った中央ラインの道は、劇場の壁端の道と直行するものとなっています (fig.5)。都市オランジュは、ガリアと接する辺境の城塞都市であり、この凱旋より中が神聖な都市空間でした。凱旋という特別なとき以外は、武器や戦利品はこの中には持ち込まれませんでした。また、都市空間内には、墓は造れませんでした。日本の古代都市とも共通する側面をもっています。辺境の宗教的都市空間としては、辺境の祭祀都市としての宇佐とも共通する面をもっています。

1. 天皇霊を祀る祭祀神殿宇佐八幡宮 (fig.6)

宇佐八幡宮は応神天皇霊を祀る神社です。しかし、当初は軍(いくさ)の幡(はた)を祀る軍神であり、東大寺大仏建立を契機に仏教の国家的守護神となりました。やがて、この八幡神を国家神に祀り上げ

た聖武天皇の霊と一体化し、9世紀はじめには、応神天皇霊へと変化してゆきます。

注目すべきは、自らをはじめ「皇帝」と称した聖武天皇が軍神八幡神を国家神と昇格させ、娘の称徳女帝が父の聖武天皇霊を重ね合わされたことです。これは、初代アウグストスを神格化し、祭祀神殿を創設した、ローマの皇帝礼拝とも共通性をもっています。

現在も派遣される勅使

日本の朝廷は、古代日本の西の国境を守る境界神である宇佐八幡宮を、天皇霊を祀る祭祀神殿と位置づけて、天皇の代替わりごとに、または特別な祭祀の際に、天皇の使者（勅使）を派遣し続けました（fig.7）。現在も10年に一度、または遷宮祭などの特別な儀式には、勅使が派遣されます（fig.8）。

宇佐八幡宮の社殿は、九州南部にいた隼人とよばれる民族を意識し、対隼人神として南向きに造られています。宇佐八幡宮の聖域空間は、駅館川（やかんがわ・かつては宇佐川と呼んだ）を境として、その東側のほとりに最初の八幡宮である鷹居社（たかいしゃ）が建っています。ここが中世までは、宇佐宮の清浄な空間とされ、この空間で死者を葬ることを認めませんでした。

西参道と社頭松隈

鷹居社から1キロ弱東に直線道路を東に進むと「社頭」（しゃとう）「松隈」（まつくま）と呼ばれる、広義での神社の入口に達します。ここから台地を降りた下の谷には、宇佐町と呼ばれる都市的空間が広がり、その中心に宇佐八幡宮の境内があります（fig.9）。この空間をかつては宮中（ぐうちゅう）と呼び、宇佐宮の関係者以外は居住できない特別な場所でした。社頭松隈には、720年に反乱し平定された隼人の首塚といわれる「凶首塚」や隼人の霊を鎮める百体社（百大夫社）や平定した隼人の霊を鎮める祭礼である放生会の際、そこに参加する傀儡の化粧を行った化粧水と呼ばれる井戸などがあります。これはまさにオランジュの凱旋門的空間とみなすことができます（fig.10）。

2. 聖武天皇と宇佐八幡宮の登場と発展

宇佐八幡宮は、8世紀初頭の和銅年間に豊前国宇佐郡の鷹居の地に出現します（fig.11）。その場所は、豊後国との国境に近い場所であり、当時の主要道路に接していたことが『八幡宇佐宮御託宣集』という書物に記載されています。この道路は、中津条里の南限線の直線道の延長線上に位置し、この道路をさらに1.5kmほど延長した場所に宇佐八幡宮があります（fig.12）。

八幡神は、本来、渡来人が祀っていた外来の神であり、戦いの象徴である軍旗（八つの幡）に宿る軍神でした。8世紀はじめは、直線プランをもつ豊前道は国の産物を運ぶ物資移動の公道として整備が進む一方、九州では南部の隼人支配の軍道としての整備が進められました（fig.12）。この先兵となったのが朝鮮半島から来た渡来人たちです。この官道の整備と連動し、軍神八幡神は出現したと考えられます。一昨年の報告でも述べたように、鷹居社の後、716年（霊亀2年）八幡神は小山田社に移動します。これも隼人との緊張が契機となった移動と考えられます。その後、八幡神は、720年（養老4年）の大隅隼人の乱から間もない724年（神亀2年）に現在の小倉山の社殿が造営されました。

聖武天皇が即位したのは、宇佐八幡宮が現在の場所に遷座した前年の723年（神亀元年）のことです。聖武天皇の即位とともに現在に続く社殿の位置が確定したことは注目されます。その後、軍神である八幡神は対隼人問題や朝鮮半島の新羅との緊張関係の高まる中、日本の西方を鎮守する国家的神としての道を聖武天皇の治世下で歩んで行きます。スライドの年表にありますように（fig.13）、新羅との緊張が高まると、731年（天平3年）には朝鮮半島との境界神の役割をもっていた宗像の姫神を第二神として八幡宮の中に取り込みます。さらに、737年（天平9年）には、朝鮮半島から蔓延した天然痘の危機を回避するため、弥勒寺を宇佐八幡宮の境内地に移し、戦う神と救う仏を一体化することを企図するようになります（fig.13）。

東大寺大仏

この一つの帰結が、聖武天皇の行った749（天平勝宝元年）12月の八幡神の入京（平城京に上京すること）です。八幡宮の女性最高神官を紫色の輿に乗せ、その神官に神を憑依させ東大寺まで運び、造立の終わった直後の東大寺大仏を拝顔することになりました。これは八幡神が日本国のすべての神々を率いて大仏の建立に協力した帰結であり、これによって八幡神は日本の神々を仏世界に先導する国家の最高神と認定されました（fig.14）。

聖武天皇

この宗教構想を推進した聖武天皇は、隋唐の皇帝たちがめざした菩薩皇帝の考え方を導入し、民衆を仏世界に導くことを自らの使命であるとして「皇帝」号を使用しました。神々の世界を仏世界と結合させる役割を八幡神がもったとすれば、俗世界は天皇がそれを担ったということです。やがて、聖武天皇が亡くなると、聖武天皇霊と八幡神が一体化することは必然であったと考えられます。ローマの皇帝礼拝とも類似する八幡への参詣・礼拝が完成してゆくのです（fig.15）。

3. 直線官道と条里の整備（fig.16）

中津条里は、直線プランで整備された豊前官道を基準線として地割が造られました。豊前官道がいつ造成されたかは明らかではありませんが、2年前の報告でも述べたように、それは渡来系寺院の存在と密接に関係しています。道造成の技術は渡来人が担い、渡来系寺院との関係から7世紀末～8世紀初頭にかけて道は整備されたと推測しました。

中津条里と豊前官道

官道の整備については、大化の改新の詔に駅制のことが書かれており、かつては、国衙、郡衙をつなぐ道は7世紀半ば整備が始まったといわれています。しかし、これは必ずしも、その後展開する直線的官道とは考えられないことが最近の研究では主張されています。直線官道の整備は7世紀末から8世紀初頭になったといわれています。

それでは、条里の整備はどう進められたのでしょうか。条里と直線官道が密接に関係していることは各地の条里遺構や古代官道の研究で明らかにされています。かつては、条里は班田収授制との関係で説明されてきましたが、現在の有力な説は、墾田永年私財法（743年）の施行で盛んとなった富豪や有力寺社による農地開発（墾田）の急増が条里プラン成立の起源であるというものです。まさに聖

武天皇の治世時代が条里制の整備・確立期であると考えられます。

オランジュには、ローマの時代施行されたケントゥリアの地割を大理石の石板に記したものが残っています (fig.17)。

ペレス先生は、3年前の中津での報告で次のように述べています。

ローマ人はまたこれらのケントゥリア地割を図で示しました。それらを彼らは大理石や青銅板に彫りつけました。この方法で、征服された領域の地形図が登録されました。これは非常に容易いことでした。というのも、リミタティオ (境界設定) は直角に交わる幾何学的な網目状のものだったからです。例外的な史料 (今日まで唯一のもので) がわれわれにそのことを証明しています。それはガリア南部のオランジュというローマ植民市の地籍図 (fig.17) です。オランジュは将軍オクタウィウス (後のアウグストゥス帝) によって前36年に建設されました。

大理石のこの断片は地図 (ラテン語でフォルマ) の形をしていて、この植民市のケントゥリア地割を縮小して再現していました。各ケントゥリアの座標は地表に交差点の正確な位置を与える境界線によって示されました。従って地形図の詳細 (道路、水路、山々) は図で示されることができました。例えばここではローヌ河の支流が示されています (fig.17)。

日本では、1970年代から急激に進んだ圃場整備事業で伝統的水田は大きく改変されました。しかし、中津条里のように、未だ各地に古代律令国家の施行した条里の遺構がいくつか残っています。また、古代律令国家の時代、ローマのケントゥリア地割図に相当する条里図 (班田図) が作成され、国衙 (国の役所、現在の県庁に相当する) に保管されました。国衙保管の書類は現在残っていませんが、東大寺等の巨大寺院の開田地図、墾田地図の図面に当時地割の状況が克明に記されたものが残っています。

越中国新川郡丈部開田地図 (fig.18)

東大寺は、聖武天皇が世界最大の金銅製の盧舎那大仏を建立した寺院です。古代の条里を描いた図面のほとんどがこの東大寺の初期荘園の図面です。現在は、正倉院文書というかたちで宮内庁の所管になる文書群にほとんどが入っています。それでは、これらの地図をいくつかを紹介します。

東大寺の開田図、墾田図が残されているのは、越中国 (えっちゅうのくに・現在の富山県) と越前国 (えちぜんのくに・現在の福井県) と近江国 (おうみのくに・現在の滋賀県) と阿波国 (あわのくに・現在の徳島県) です。越中国では、新川郡 (しんかわぐん) ・礪波郡 (となみぐん) ・射水郡 (いみずぐん) の3郡16か所の地図があります。越前国では足羽郡 (あすわぐん) の2か所と坂井郡 (さかいぐん) 1か所の地図があります。近江国では2か所、阿波国にでも2か所の地図が残されています。これらの地図は、すべて麻布に描かれています。

田図の内容は、条里・溝とその坪ごとの開 (墾) 田積、荒廃田積の記載を中心とし、ときには山川池等の自然景観の描写を加え、端書には開田・墾田地図名と荘地の総面積、開・未開田積、荘地の四至、奥書には日付と検田・作図に関与した人々の名が記載されています。

最初の地図は新川郡の丈部（かせつかべ）開田図です（fig.18）。この地図には、759年（天平宝字3年）に作成されました。条里地割が記載され、その坪（1町単位）ごとに土地の「野」「乗田」等の地目（利用状況）や面積が記され、地図全体にわたる川や溝が描かれています。これはケントゥリア地割図とも共通面を持っています。

越前国足羽郡道守村開田地図

次の地図は、射水郡須佐（すさ）の開田図です（fig.19）。これも759年に作成されました。ここにも条里地割が記され、利用状況、溝、山などの記載が見られます。次の地図は、礪波郡伊加流伎の開田図です（fig.20）。これも759年の作成図です。ここには、左端に「寺田」が描かれ、道や溝、堺が記載されています。次は、766年作成の新川郡大荊村（おおいばらむら）の墾田図です（fig.21）。この地図にも地目やその面積が記載されています。

越前国足羽郡糞置村開田地図1

次に越前国の開田図・墾田図を見てみましょう。最初の地図は、766年作成の足羽郡道守村（ちもりむら）開田図で4分割された図です（fig.22）。地図の記載内容は、これまでの図とほぼ同様です。現在の福井市街の西方、足羽川と日野川の合流点付近に位置した。同荘は749年（天平勝宝1）4月勅による墾田施入・占定に始まり、後に同郡大領生江東人（いくえのあずまひと）が大領就任以前に私の功力で開いた墾田100町を功德料（くどくりょう）として東大寺に寄進し荘域を拡大しました。766年（天平神護2）には東人はさらに7町余の墾田を寄進し、また荘域内の百姓墾田の買得や口分田の交換などにより34町余の荘域の拡大、一円化を図りました。この時の図が紹介の開田図です（fig.23）。

越前国足羽郡糞置村開田地図2

次の地図は、越前国糞置村（くそおきむら）の開田図です（fig.24,25）。地図の場所は現福井市南部、二上町・帆谷町地域に比定されています。759年（天平宝字3）および766年（天平神護2）の開田地図が残存し、初期荘園研究上の重要な史料です。この荘園の成立時期・事情は不明ですが、759年には15町1段余の荘域をかかえ、うち開田面積は2町5段余であった。766年には荘域15町8段余でほとんど変化はありません。私もこの地図については、神社の成立と結びつけ分析を行ったことがあります。

最後に近江国水沼村開田図を紹介します（fig.26）。この図は、751年には作成されています。村は30町の面積をもち、これ以前に国衙の協力によって開発された荘園です。おそらく聖武天皇の749年（天平勝宝1）4月勅による墾田施入・占定を公認する政策と大仏建立による東大寺への宗教政策の開始が契機になっていることは間違いありません。

いずれにしても、これら東大寺の絵図類は、聖武天皇の律令体制構築の中で進められた条里施行の展開の中で作成されたものと考えられます。現在残されている条里図の最古のものは、735年（天平7年）の讃岐国山田郡図です（fig.27）。国衙に保管されたと推定される国内の郡ごとに作成された班田図をもとにした図であったと考えられます。

三河雅弘の論文（2010年）によれば、「現地に設定され1町の方格網さらには班田図との関係のもとに条里地割が施工されたと解釈できる。」「8世紀中頃における古代荘園図は、班田図を基図あるいはその存在を前提にして作成された図であった。こうした両者の密接な関係の背景には、8世紀中頃における古代国家の土地調査方法の存在があった。」と指摘しています。

最近の研究においては、条里を描いた班田図や古代荘園図は条里施行の証明にはならないが、これが施行の前提となったことを強調しています。また、条里の施行時期は8世紀半ばであることも指摘していますので、聖武天皇の治世下で班田図の作成、条里の施行が進んだことは間違いのないといえます。聖武天皇は、祭祀・道・地割制度において、ローマのアウグストスの存在であったといえるのではないのでしょうか。

聖武天皇期に整備が進められた条里地割は、中世以降も生き続けます。スライド28・29 (fig.28,29) などのように、中世の荘園絵図にもその地割が反映された図面が作成され、その土地支配に有効性を発揮しました。そのことについては、今年の報告でも取り扱いました。

今回の報告は、比較史という観点から、古代ローマと古代日本の皇帝祭祀、官道、条里を検討してみました。構想的報告で細部の検討は不十分ですが、お許しをいただきたいと思います。

<図版 (Figures) >



fig.1 オランジュの古代劇場 The ancient theatre of Orange



fig.2 アウグストゥス像 The statue of Augustus



fig.3 オランジュの凱旋門 The arch of triumph in Orange



fig.4 戦利品と降伏したガリア人のレリーフ
The relief which the booty and Gaulish soldiers be taken prisoner was drawn

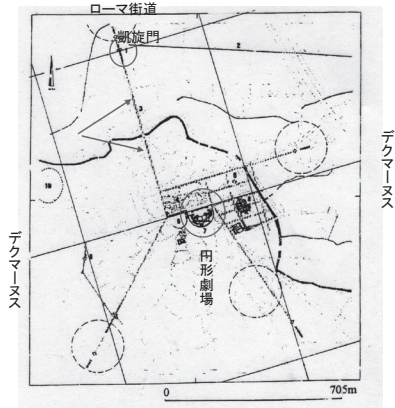


fig.5 オランジュの都市平面図
Le plan d'Orange



fig.6 天皇靈を祀る宇佐八幡宮
Usa-Hachiman shrine where the people have performed religious service to the spirits of Japanese Emperors "Tennos"



fig.7 宇佐八幡宮に至る勅使道
The national road which called "chokusi do" to Usa Hachiman shrine



fig.8 現在も派遣される勅使
Japanese Emperor's messengers who has been dispatched to USA shrine



fig.9 西参道と宇佐町
The west approach to USA Hachiman and USA town

fig.10 隼人への勝利記念 社頭松隈(化粧水・凶首塚・百体社)
The memorial facilities of triumph to HAYATO in the entrance of USA Hachiman shrine called MASTUKUMA



The arch of triumph in Orange



Keshomizu



Kyoshutuka (the tomb of Hayto)



Hyakutai shrine

fig.11 鷹居社 (最初の八幡宮)
TAKAI shrine where God Hachiman appeared fast time

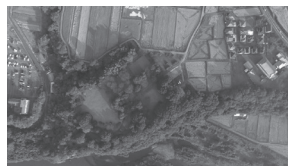


fig.12 Ancient National Road "Usa Road" (Buzen Road) and Usa-Hachiman Shrine

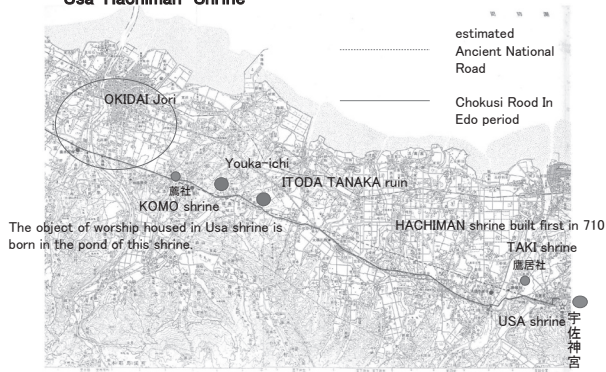
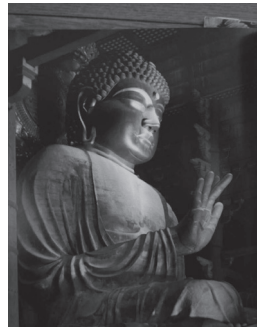


fig.13 聖武天皇と宇佐八幡宮の登場

- DC 724 聖武天皇即位
Emperor Shomu accedes to throne
- 725 小倉山の社殿(一御殿)造営.対隼人神の神殿
The first shrine building of USA Hachiman was built for triumph to HAYATO in Mt.Ogura .
- 731 比売神の託宣 对新羅神の神殿
The second shrine building was built for triumph to Silla by the oracle of God Hachiman.
- 737 小倉山の境内に弥勒寺移築の託宣 西国の国境神
Miroku temple was moved to USA shrine precinct by the oracle of God Hachiman. God Hachiman became the guardian deity of Japanese west border .
- 749 八幡神入京 国家神となる。
God Hachiman entered to Nara, became the guardian deity of Japanese.

fig.14 大仏建立の支援を通じ仏教の守護神となる



東大寺盧舎那仏
Vairocana-Buddha of TODJI Temple



神と仏の出会い
Meeting Shintoism and Buddhism

fig.15 天皇霊と八幡神の結合



◎自ら皇帝を称し、仏教を神道を結合させた最初の天皇。
Shomu Tenno introduced himself as "Emperoe", he linked Buddhism and Shintoism

◎聖武天皇の娘である称徳女帝が聖武太上天皇霊と八幡神の結合をはかる。⇒道鏡事件
Emperor Shotoku who is Emperor Shomu's daughter linked the spirit of Emperor Shomu and God Hachiman together.

◎777年八幡神の出家の日は、5月19日と聖武天皇の葬儀の日時に合わせている。
God Hachiman became priest on 19/5/777,
The funeral of Emperor Shomu was held on 19/5.

fig.16 Okidai Jori in Nakatsu and the road to USA shrine



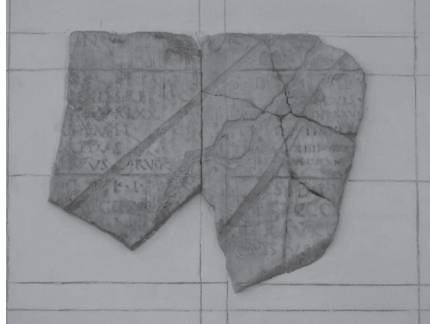


fig.17 オランジュのセントウリア地割の石板地図

The map of the square Land Allotments called "centuriation" is inscribed on the marble slabs.

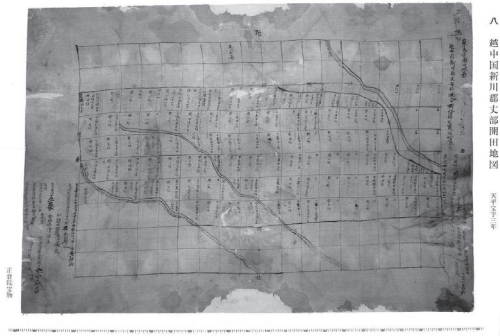


fig.18 越中国新川郡丈部開田地図天平宝字3年(759)
The map of Kasetisukabe Shinkawa-gun Ecchu province made in 759.

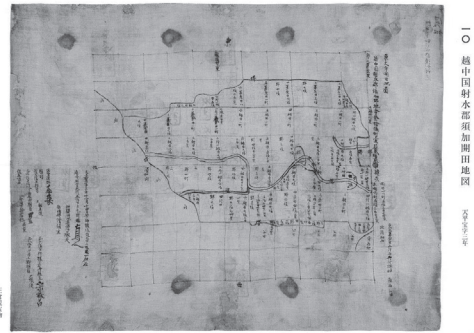


fig.19 越中国射水郡須加開田地図 天平宝字3年(759)
The map of Suga Imizu-gun Ecchu province made in 759.

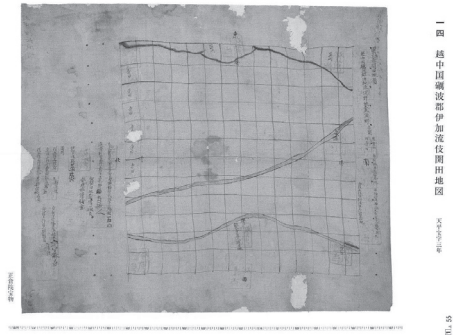


fig.20 越中国礪波郡伊加流伎開田地図 天平宝字3年(759)
The map of Ikarugi Tonami-gun Ecchu province made in 759.

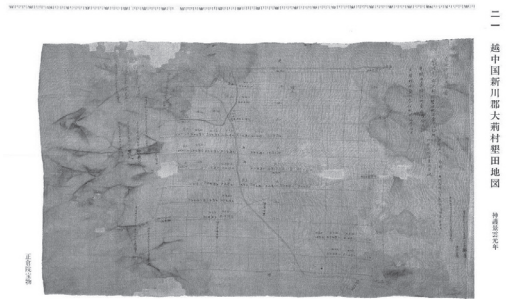
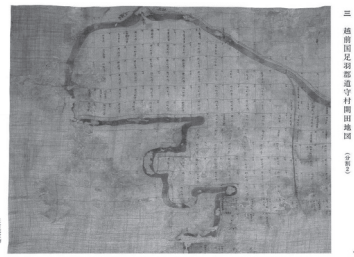


fig.21 越中国新川郡大荊村墾田地図 神護景雲元年(767)
The map of Oibara-mura Shinkawa-gun Ecchu province made in 767.



fig.22 越前国足羽郡道守村開田地図 天平神護2年(766)
The map of Chimori-mura Asuwa-gun Ecchu province made in 767.



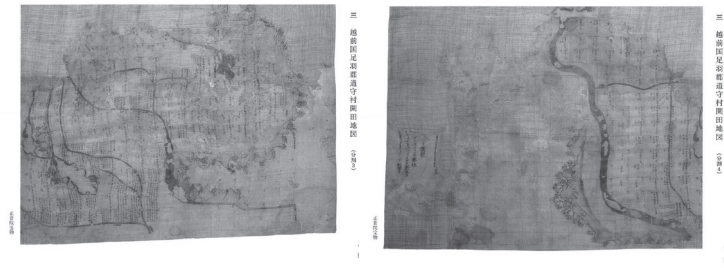


fig.23 越前国足羽郡道守村開田地圖
The map of Chimori-mura Asuwa-gun Ecchu province made in 767.

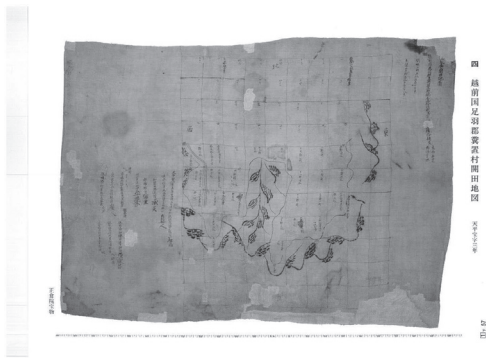


fig.24 越前国足羽郡糞置村開田地圖 天平宝字3年(759)
The map of Kusooki-mura Asuwa-gun Ecchu province made in 759.

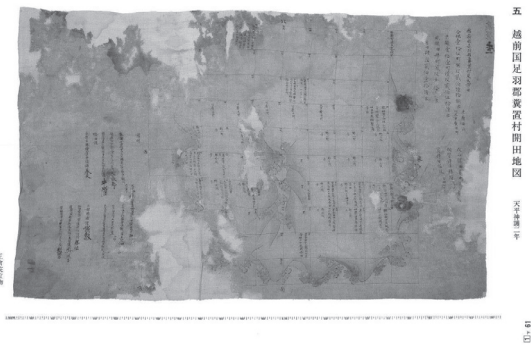


fig.25 越前国足羽郡糞置村開田地圖 天平神護2年(766)
The map of Kusooki-mura Asuwa-gun Ecchu province made in 766.

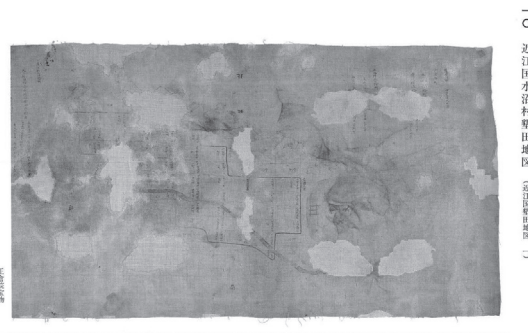


fig.26 近江国水沼村墾田地圖 天平勝宝3年(751)
The map of Minuma-mura Omi province made in 751

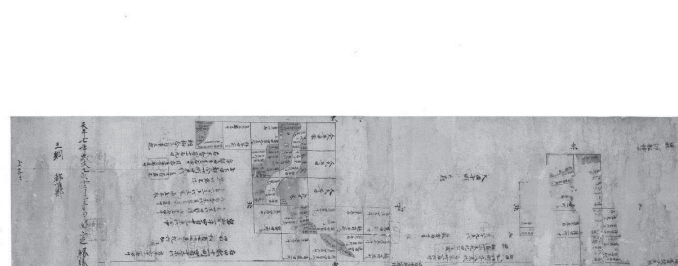
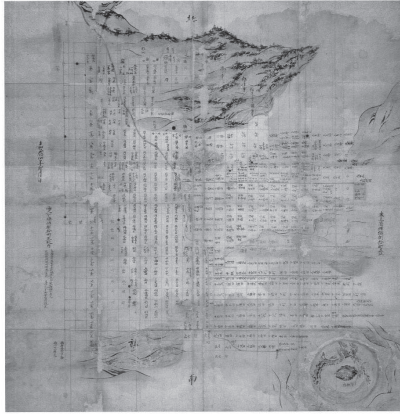


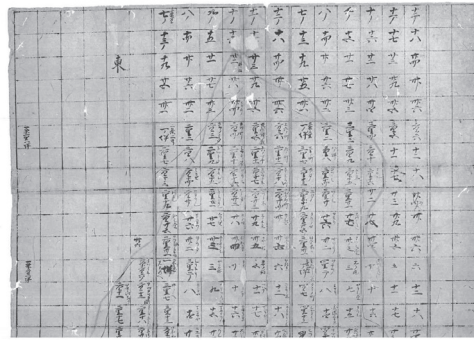
fig.27 讃岐国山田郡田圖 天平7年(735)
The map of Yamada-gun Sanuki province made in 751



27 播磨国鞆庄繪圖(複製) 129.8×125.4cm 原尺・江戸時代

fig.28 播磨国鞆庄繪圖

The Map of Ikaruga-sho Harima province



一六 近江国瀬保庄条里圖

fig.29 近江国瀬保庄条里圖

The map of allotting land called "jori"

Le culte frontière, le Kandô et le Jôri comparaison entre Usa et Orange

IINUMA Kenji
(Beppu University)

Traduction par H.Yamamoto

Préface

En mars en 2017 Mlle Yoko Harima m'a amené à Orange. Nous sommes arrivés en une heure et demi et nous avons rencontré M.Pérez et Mme Assenat au parking. Je suis allé à Orange à la première fois pour visiter le théâtre, l'Arc de Triomphe et le tableau de la centuriation d'Orange que j'ai connu grâce à M. Pérez. Alors je me suis excité à ce moment-là.

J'ai vu un bâtiment comme le mur grand de cent m. loin du parking. C'est le théâtre antique d'Orange(fig.1). En entrant dedans, il y avait le théâtre avec des sièges des spectateurs en pente sur le colline. Au centre d'arène du théâtre on voit le statue d'Auguste, successeur de César(fig.2). A partir d'ici j'ai vu l'Arc et le tableau de la centuriation au musée. Cette visite m'a fait inspirer de comparer Orange et Usa à ce colloque.

Orange était fondée par Octavianus (Augustus) en 36 avant J.-Ch. après la mort de César. A ce moment-là étaient construits l'arc de triomphe, la théâtre et etc. On dit qu'Orange est la meilleure comme le ruin romain. Il y a la statue d'Auguste, successeur de César au centre d'arène de la théâtre. La position actuelle de cette statue apparaît de signifier que cette théâtre soit le temple pour le culte impérial.

Au nord-ouest se trouve l'Arc de Triomphe(fig.3), d'où entrèrent des soldats romains qui convainquent le Gaule. Au mur au centre sont sculptés l'image de sanglier, symbole de Gaule et la scène de bataille. Au mur de deux flancs sont sculptés des instruments, des boucliers et des armures de Gaule, et dessous des captifs de Gaule(fig.4). La route à partir de l'Arc croise en angle droit la voie à côté de la théâtre(fig.5). Orange est la citadelle limitant la frontière de Gaule et l'intérieure à partir de l'Arc est l'espace sacré. Dedans on se normalement interdit de porter des armes et des dépouilles. Et aussi on se interdit de construire des tombes dans l'espace urbain. C'est pareille au Japon. Orange et Usa sont communes en tant que la ville religieuse frontière.

1.Sanctuaire de la divinité Hachiman: le temple dédié au culte des mânes de l'empereur (fig.6)

Le sanctuaire de la divinité Hachiman est le temple shintoïste consacré aux mânes de l'empereur Ôjin.Hachiman était auparavant le dieu guerrier pour le culte des drapeaux militaires et devint le dieu sauveur de l'Etat pour le bouddhisme au temps de la construction du Grand Buddha.

Ensuite il fit corps avec des mânes de l'empereur Shōmu qui assimilait la divinité Hachiman au dieu de l'Etat. Au début de 9e s. ap. J.-C. Il évolua donc vers la divinité des mânes de l'empereur Ōjin.

Sanctuaire de la divinite Hachiman

Il est remarquable que l'empereur Shōmu, le premier nommé 'Empereur', fit promouvoir le dieu militaire au rang de dieu de l'Etat et que sa fille, l'impératrice Shōtoku, fit assimiler la divinité Hachiman avec les mânes de l'empereur Shōmu, son père. Cela ressemble vraiment au culte impérial romain qui fit diviniser le premier empereur Auguste et fit construire des temple pour lui.

Le légat impérial du Japon actuel

La Cour impériale du Japon continua d'envoyer le légat impérial au Sanctuaire d'Usa au moment du changement d'empereur et organisa des fêtes particulières, puisque la Cour considérait le Sanctuaire d'Usa comme le siège du dieu de la Limite (Terminus chez les Romains) protégeant la frontière occidentale du Japon, avec le temple des mânes de l'empereur(fig.7). Actuellement chaque dix ans, le légat impérial est envoyé pour la cérémonie particulière, par exemple pour la fête du changement de Sanctuaire (Sengū) (fig.8).

Le temple du Sanctuaire d'Usa est construit vers le sud contre la nation des Hayato qui habitait au Sud-Kyushu. Il y a la limite entre la rivière Yakkan-gawa(ancien Usa-gawa) et le Sanctuaire d' Usa. Près de cette rivière fut édifié le temple shintoïste de Takai, le premier sanctuaire de la divinité Hachiman. Juqu'au Moyen Age, c'était le lieu sacré pour le Sanctuaire d' Usa. A cet emplacement, les funérailles étaient interdites.

Nisi-sando et Shato-Matsukuma

Environ à un kilomètre en droite ligne à l'est de Sanctuaire de Takai, il y l'entrée du temple nommé Shatō et Matsukuma. Dans la vallée descendant le plateau jusque là, il y a l'espace de la commune d'Usa et au centre se trouve le Sanctuaire d'Usa(fig.9). A l'origine, cet espace était appelé le centre du cour (Guchū) et les gens, à l'exception des personels du Sanctuaire d'Usa, avaient l'interdiction d'y habiter. Sur l'emplacement de Shatō et de Matsukuma, il y a le tumulus pour le Hayato qui fut tué lors de la bataille de 720 (Kyōshu-zuka) et le temple destiné à la pacification des mânes d'Hayato (Hyakutaisha), ainsi que le puits de l'eau pour faire maquiller des poupées pour la fête (Hōjō-ē) qui purifie des mânes des Hayato. Il y a là une similitude évidente avec un espace comme l'Arc de Triomphe d'Orange(fig.10).

2. L'empereur Shomu, l'apparition et le développement de la divinité Hachiman à Usa

Le Sanctuaire d'Usa apparut à l'emplacement de Takai(fig.11), dans le canton d'Usa dans la province de Buzen au début du 8e s. ap. J.-C. Selon Les oracles du Sanctuaire de Usa, ce lieu

est proche de la frontière de la province de Bungo et longe la route principale. Cette route se trouve sur la prolongation la plus méridionale de l'axe (la route rectiligne) du Jôri de Nakatsu. Le Sanctuaire d'Usa se trouve dans le prolongement exact de cette route, à 1,5 kilomètres vers l'est(fig.12).

La divinité Hachiman est originalement le dieu extérieur des étrangers, et elle est le dieu guerrier des huit drapeaux militaires. Au début du 8e s. ap. J-C., le kandô de Buzen fut aménagé en tant que route publique pour transporter des produits de l'Etat et en tant que route militaire pour contrôler les barbares du sud du Kyushu (Hayato)(fig.12). Les étrangers originaires de Corée servirent comme soldats (mercenaires) dans la bataille des Hayato. Avec l'aménagement de ce kandô, la divinité militaire Hachiman apparut. Le sanctuaire d'Hachiman s'est déplacé de Takai à Oyamada en 716. C'est à cause de cette bataille contre les Hayato. Ensuite, le Sanctuaire fut construit sur la colline actuelle de Ogura en 724 , juste après la révolte de Ôsumi-Hayato, en 720.

C'est au moment où le Sanctuaire d'Hachiman s'est déplacé, en 723, que le l'Empereur Shômu est monté sur le trône. Il est très remarquable que la position topographique du temple pour la divinité Hachiman se fixa au même moment que l'intronisation de l'empereur Shômu. Ensuite la divinité Hachiman devint définitivement le Dieu de l'Etat pour protéger l'ouest du Japon sous le règne de l'empereur Shômu, lors de la grande crise avec les Hayato et avec Shinra de la presqu'île de Corée. Voyons le tableau historique(fig.13) : en 737, la divinité Hachiman introduit le déesse de Munakata (Nord-Kyushu) en tant que son second Dieu qui était le dieu-frontière (Terminus) vers la presqu'île de Corée. Et en 737, on fit déplacer le temple bouddique Mirokuji dans le sanctuaire d'Hachiman pour conjurer l'épidémie de variole qui se propageait dans la presqu'île coréenne. Dès lors, la divinité Hachiman fit corps à la fois du dieu Guerrier et du dieu Sauveur(fig.13).

Le Grand Buddha de Todaiji

Finalement l'empereur Shômu fit entrer la divinité Hachiman dans la Capitale (Heijôkyô) en décembre 749. Il la fit porter dans un palanquin en pourpre par la plus haute prêtresse (flaminica) qui présenta la divinité Hachiman à l'Empereur, puis la fit porter jusqu'à Tôdaiji, et la fit prier le Grand Buddha. Cela signifie que la divinité Hachiman a collaboré à la construction du Grand Buddha en conduisant tous les dieux shintoïstes du Japon. Grâce à ça, la divinité Hachiman est devenue le plus haut dieu de l'Etat, qui introduisit les dieux shintoïstes dans le monde bouddhique(fig.14).

L'empereur Shômu

L'empereur Shômu introduisit l'idée de l'empereur-Bodhisattva et le nomma lui-même du titre 'Empereur' (Tenno ?) puisqu'il pensait de son rôle de faire entrer le peuple dans le monde bouddhique. C'est-à-dire que la divinité Hachiman fit se lier le monde shintoïste et bouddhique et que l'empereur Shômu rapprocha le peuple du culte bouddhique. Il est donc naturel que les mânes de l'empereur Shômu fissent corps avec la divinité Hachiman. Le culte de la divinité Hachiman,

finalement, ressemble beaucoup au culte impérial romain(fig.5).

3. La route officielle rectiligne (kandô) et l'aménagement de Jôri (fig.16)

Dans le Jôri de Nakatsu, l'axe fondamental était le kandô de Buzen qui était rectiligne. On ne sait pas quand le kandô de Buzen fut construit. Sa construction était en relation étroite avec l'existence du temple pour des étrangers. Les techniciens étrangers ont construit la route et la route fut peut-être aménagée entre la fin du 7e s. et le début du 8e s.a.J-C.

Jôri de Nakatsu et kandô de Buzen

Au sujet de l'aménagement du kandô, l'édit de la Réforme de Taïka établit un système de relais (éki). Auparavant, on pensait que la route liant le bureau de la province et de canton avait commencé d'être construite dans la moitié du 7e s. a. J.-C.

Considérons les débuts de l'aménagement du Jôri. Il est clair qu'il y a une relation étroite entre le Jôri et la route rectiligne(kandô) grâce aux études du vestige du Jôri et du kandô antiques dans beaucoup de régions au Japon. Avant on pensait que ce système était apparu avec la loi de donation et de distribution des champs(Handen-shûju). Mais actuellement on pense plutôt que c'est par la loi de la possession perpétuelle des champs (Konden-eidai-shizai-hô), en 743 que les riches et les pouvoirs religieux pouvaient augmenter leur champs rapidement grâce à cette loi. Cela veut dire que la période de l'empereur Shômu a bien été celle de la formation et de l'établissement du projet de Jôri.

A Orange il y a la carte de la centuriation sur le tableau en marbre au temple de l'Empire romain(fig.17).

Selon M. Pérez,

Les Romains ont aussi cartographié ces centuriations, qu'ils ont gravé sur des tables de marbre ou de bronze: on enregistrait de cette façon la topographie des territoires conquis, ce qui était très facile puisque la *limitatio* est un réseau géométrique orthonormé. Un document exceptionnel (et jusqu'à ce jour unique) nous le prouve: la carte du cadastre de la colonie romaine d'Orange en Gaule méridionale (fig. 17), fondée en 36 avant J.-C. par le général Octavien (le futur empereur Auguste).

Ces fragments de marbre que vous voyez formaient une carte (une *forma* en latin) qui reproduisait à échelle réduite la centuriation de la Colonie. Les coordonnées de chaque centurie étaient indiquées, grâce aux bornes qui, sur le terrain, donnaient l'emplacement exact des carrefours. On pouvait ainsi dessiner les détails de la topographie: les routes, les cours d'eau, les montagnes : ici par exemple, des affluents du fleuve Rhône (fig.17).

Les champs de riz traditionnels ont changé beaucoup à cause des l'aménagements rapides des années 1970 au Japon. Mais quelques vestiges de Jôri subsistent encore, comme le jôri

de Nakatsu. La carte du Jôri fut réalisée au temps de l'Etat de Ritsuryo : comme la carte de la centuriation, elle était déposée dans le bureau provincial (Kokuga). Todaiji a les cartes du cadastre dans ses plans du territoire.

La carte de Kasetukqbe à l'arrondissement de Shinkawa dans la province de Ecchu (fig.18)

Todaiji est le temple bouddhique où l'empereur Shomu a construit le plus grand Bouddha en métal dans le monde. Todaiji conserve beaucoup de cartes des anciens Jôri qui appartiennent aux manoirs de Todaiji. Actuellement ces cartes sont dans des archives impériales. Voyons ces cartes.

Les provinces auxquelles les cartes de champs du Todaiji sont de la province de Yechu (Département de Toyama), de Echizen (Fukui), de Oumi (Shiga) et de Awa (Tokushima). Dans la province de Yechu, il y a des cartes de trois arrondissements (Shinkawa, Tonami et Imizu) contenant 16 lieux. Dans Echizen, celles de l'arrondissement de Asuwa contenant 2 lieux et de Sakai. Dans Oumi, celles de 2 lieux. Dans Awa, celles de 2 lieux. Ces cartes sont peintes sur tissu de chanvre.

Ces cartes montrent principalement le Jôri et la fossa et la superficie des champs cultivés et celui des champs désertés, de temps en temps dessinent la vue naturelle et ajoutent la superficie etc. Voyons la première carte : c'est la carte de Kasetukabe dans l'arrondissement de Shinkawa. Cette carte fut rédigée en 759. Elle présente le cadastre du Jôri et montre la situation de l'utilisation et dessine la rivière et la fossa. Cela a de commun avec la carte de la centuriation romaine.

La carte de la village de Dômori au canton de Asuwa dans la province de Echizen

La carte de la village de Kasetukabe dans l'arrondissement de Ahiha dans la province de Echizen 1

Deuxième carte : la carte de Susa au canton de Imisu (fig.19). Elle fut rédigée aussi en 759. Cela montre le cadastre, la situation actuelle, les fossas, et les montagnes etc. La troisième carte de Ikarugi dans l'arrondissement de Tonami, également rédigée en 759 (fig.20). Elle montre le champ du temple, la voie et la frontière etc. Ensuite la carte de la village de Ôibaramura dans l'arrondissement de Shinkawa : elle montre aussi des noms des champs et leur superficie (fig.21).

La carte de la village de Kusookimura à l'arrondissement de Asuwa dans la province de Echizen 1

Voyons maintenant les cartes de la province de Echizen. La première, rédigée en 766, est celle de la village de Chimorimura dans l'arrondissement de Ashiha : elle est divisée en quatre et montre des même choses(fig.22). Cet endroit se trouve à l'ouest de la ville de Fukui, près de la confluence des fleuves Ashihagawa et Hinogawa. Ce manoir a été aménagé en avril 749. Ensuite le grand propriétaire Ikue no Azumahito a donné à Todaiji des champs cultivés individuellement de 100 chos (100ha). Et en 766, Azumahito a aussi donné 7 ha. et a augmenté la territoire de ce manoir de 34 chos(34ha). Cette carte montre des champs dans ce cas-là(fig.23).

La carte de la village de Kusookimura à l'arrondissement de Asuwa dans la province de Echizen 2

Ensuite voyons la carte de la village de Kusookimura dans la province de Echizen(fig.24,25). Elle se trouve dans la territoire de Nikamicho et Hotanicho dans le sud de la ville de Fhukui. La carte fut rédigée en 759 et en 766 et c'est importante pour des études du premier manoir. La date de ce manoir (seigneurie) n'est pas sûre. Ce manoire avait une superficie de 15, 1 cho(15,1ha). Elle avait une superficie de champs cultivés de 2,5cho(2,5ha). En 766 elle avait la superficie de 15,8 cho(15,8 ha). J'ai étudié cette carte autrefois, relativement à la formation de son temple shintoïste.

Voyons la dernière carte de la village de Mizunumamura dans la province de Oumi, rédigée en 751(fig.26). Cette village a une superficie de 30 chos (30ha). Il fut développé avec l'aide de l'Etat. Peut-être, cela fut absolument influencé par la politique de l'empereur Shomu qui autorisa le développement des champs en vertu de l'édit impérial de l'an 749, et par le commencement de sa politique pour Todaiji par la construction du Grand Buddha.

En tout cas, je pense que ces cartes de Todaiji furent rédigées en lien avec l'aménagement du Jôri dont la progression réalisait l'établissement du régime Ritsuryo par l'empereur Shomu. La plus ancienne carte du Jôri est celle de l'arrondissement de Yamamda dans la province de Sanuki qui fut rédigée en 735(fig.27). C'est originaire des cartes de la distribution des champs, rédigées dans chaque arrondissements et gardées par l'Etat.

Selon M. Mikawa(2010), le cadastre du Jôri fut aménagé sur la base des reseaux d'un Cho(100m) carré et de la carte de Handen(des champs distribués) . La carte des manoirs de 8e s. a. J.-C. fut rédigée sur la base de la carte original de Handen, puisqu'il y avait la méthode de l'Etat antique pour mesurer des champs au milieu de 8e s. après J.-Ch.

Des études récentes remarquent que la carte de Handen et la carte des manoirs anciens ne confirment pas l'aménagement du Jôri, mais sa prémisse, et que l'aménagement de Jôri date de la moitié du 8e s. après J.-Ch. Il est certain que la fabrication de la carte de Handen et

l'aménagement du Jôri progressèrent sous la période de l'empereur Shomu. Il me semble que l'empereur Shomu ressemble à l'empereur Auguste à propos de la régime du culte, de la voie et du cadastre.

Le cadastre du Jôri qui fut développé au temps de l'empereur Shomu continua jusqu'au Moyen-Age. Comme les images 28 et 29(fig.28,29) le montrent, ce cadastre a influencé la carte de la manoirs médiévales et il a hautement présidé au contrôle foncier au Moyen-Age. J'ai déjà parlé l'année dernière. Cette fois j'ai envisagé le culte impérial , la route officielle et le Jôri de Rome et du Japon au point de vue de l'histoire comparative.

Je vous remercie pour votre attention.

発掘成果にみる古道と条里

小 柳 和 宏 (大分県立歴史博物館)

古道と条里の関係について、発掘調査の成果に依りながら、話をしたいと思います。最初の写真は古道と条里の関係が確かめられた田中遺跡の空中写真です (fig.1)。日本では、道路や建物を建てる際には必ず発掘調査が行われます。この田中遺跡も新しく出来る道路の幅を発掘調査しました。今から12年前になります。場所は、私の勤務する宇佐市の隣町、中津市というところになります。図 (fig.2) で示したNo.1 のところです。宇佐神宮から西へ約12kmほどの場所です。

1974年の空中写真によると、まだ条里の痕跡を確かめることが出来ます (fig.3)。しかし、直線的な道路は現状ではほとんど確認出来ません。写真には官道の推定のラインを入れています。写真を拡大すると条里の痕跡と道路との関係がよく分かります (fig.4)。発掘調査は推定官道を横切る形で2006年に行われました。この時点ではすでに周辺部は圃場整備事業が終了し、条里は姿を完全に消していました。

田中遺跡の発掘調査では、主に7世紀から13世紀の遺構、遺物が出土しました。最も注目されたのは道路の跡が確認されたことです。日本の古代の道路は、側溝や道路面の下層から長方形の連続した土坑 (穴) が検出されることが多いのですが、田中遺跡でも連続した土坑が確認されました (fig.8,9)。側溝は確認出来ませんでした。通常は、連続した土坑は1列だけ確認されるのですが、田中遺跡では複数の連続する土坑群が見つかりました (fig.10-13)。

これは、この田中遺跡の場所が渡河点であることと関係があると考えられます。つまり、洪水に伴う橋の架け替えや、歩いて渡る場合の地点の変更などによって、道そのものが若干方向を変えたことが原因と考えられるのです。この連続土坑の意味 (役割) については、内部に固く締まった土を入れる、丸太を入れる等の諸説があり、確定できていませんが、道路面を使いやすくする工夫であったことは間違いないでしょう (fig.14)。

道路以外にもう一つ重要な発見がありました。それは水田に水を引くための水路が見つかったことです (fig.15)。この水路は、道路跡との位置関係、水路の方向などからすると条里水田に水を供給するものであると考えられます。何度かの掘り直しの痕跡も確認出来ました (fig.16)。残念ながら、明確に時期を示す遺物が出土していないので、水路の時期を決めるのは難しいのですが、7世紀代に遡る遺物が出土していますので、今のところ7世紀から8世紀頃と考えています。

水路をよく見ると、東側に行くに従い、やや南側に曲がるのがわかります (fig.17)。これは、道路跡との関係を考えてみるとその意味が分かります。すなわち、条里南限を通る道路に平行して流れるように、方向を変えたのだと考えられるのです。つまり、道路、水路、条里は一体的に構築されたと考えられるのが一番可能性が高いと考えられます。

もう一つ、ほぼ同じ時期の遺構として「製鉄炉」が見つかっています (fig.18,19)。水路から8 mほど離れた場所になります。日本では、6世紀になると鉄鉱石を使った製鉄炉が作られますが、7世紀になると次第に砂鉄を利用したものが中心となっていきます。田中遺跡で見つかったものも砂鉄を利用した製鉄炉です。

真ん中の長方形のところが炉本体を据えたところになり、炉の下部が熱を受けて固く、変色しています (fig.20)。両側には鉄滓（スラグ）を掻き出す円形の穴があります。炉は幅が40センチ、長さが120センチほどに復元できます。出土した炭を放射性炭素年代測定したところ、西暦680年-694年（91.9%）と603年-692年（93.1%）という数値でしたので、砂鉄と一緒に燃やした炭として利用した木が伐採されたのが7世紀の終わり頃であったと考えられます。図 (fig.21) は製鉄の作業を想定復原したものです。

この当時の製鉄は、国家が関与したと言われていいますので、田中遺跡の場所は何らかの公的な施設があった可能性が考えられます。それは、条里水田、道路、水路、さらには渡河点といった要素が集まった地点であることと密接な関係があると考えられます (fig.22)。つまり、7世紀の終わり頃から8世紀にかけて、田中遺跡の場所は古代国家にとって重要な場所であったのでした。

あらためて、田中遺跡の場所を確認しておきたいと思います (fig.23)。水路の取水口は、遺跡から約1キロ西側に想定できます。それは、現在も井堰があり、条里方面へ水を供給しているからです (fig.24,25)。水は、おそらく旧河道を利用しながら東へ向けて流れ、途中で田中遺跡の方へ方向を変えます。自然堤防上を断ち割るように条里の方へ直線的な水路を作っているのです。この時期の道路が直線的であるのと共通点があります。

田中遺跡では、10世紀から13世紀の水路も検出されていますが、この時期になると水路は旧河道の屈曲に合わせて、屈曲しています (fig.26)。一番労力のかからない場所を選んでいるのです。それを考えると、7世紀の終わり頃から本格化する、中国に倣った律令制度の導入による中央集権国家体制は、地方でも貫徹していたことが判ります。

次に、No.2の宇佐町について見てみたい (fig.27)。ちなみに、私が勤務する博物館は、この宇佐町の近くにある (fig.28)。宇佐町は宇佐神宮の門前に形成された小さな町で、そこには「大路」と呼ばれた直線道が走っている。

そこで、大路の形成された時期について、宇佐町の中にある様々な要素（遺構、遺物）の時期を押しやることによって考えてみよう (fig.29,30)。

まず、現在発掘調査によって確認された最も古い遺物は、弥勒寺から出土した六世紀後半の須恵器杯である (fig.31)。

これは、平安時代初頭に埋没した弥勒寺創建期の北隈溝から出土したもので、どのような遺構に本来伴うものであったのか判らないが、宇佐宮以前を示すものとして興味深い（『弥勒寺』）。

次に古いのが凶首塚古墳である (fig.32-34)。明らかに官道が引かれる以前、七世紀の初頭前後に築造された巨石墳である。

この宇佐町周辺では凶首塚古墳以外現在古墳は知られていないが、永享二年 (1430) の永弘光世讓状 (『大分県史料』第四卷永弘文書六二四) に、"いちいき (櫟) しけやす (重安) ふん"とした土地の界に"つか"があり、また、宇佐町を望む北側の丘陵地には平塚、二塚、狐塚、潮見塚、などの塚地名が残っており、凶首塚古墳周辺に古墳が点在した可能性が高い。

しかし、三世紀後半の赤塚古墳以来、六世紀中葉の鶴見古墳まで連綿と前方後円墳が築かれてきた駅館川右岸台地上 (宇佐原) (fig.35) や、五世紀に大型円墳葛原古墳が築かれた宇佐平野と比較したとき、宇佐町周辺は古墳時代においてこれらの地域より開発が遅れ、勢力的にも下位の地域と考えると良いであろう。

そこに、六世紀末から七世紀初頭になって巨石墳が築かれる意味は大きい。その後の百数十年は、この宇佐町周辺が歴史上に登場するための準備の時期であった。残念ながらこの時期の様相は伝承記事を除いては資料がなく、考古学的な調査の進展が待たれる。

次いで八世紀の中ごろには、弥勒寺が建立される。承和縁起 (「宇佐八幡宮縁起」『大日本文書』家わけ第四 石清水文書之二 四〇三号) によると天平十年 (七三八) のこととされていたが、発掘調査でもほぼ裏付けされた (fig.37)。

また、これ以前に宇佐宮が築かれていたのは間違いなく、承和縁起では神亀二年 (七二五) とされている。

また、弥勒寺の伽藍配置を見ると、現西参道 (宇佐大路の延長線上) の南側に主要伽藍を納めようという意図が読み取れ (fig.38)、そのことは南側に山を控えた地形であるにも拘わらず、その山を削ってまで平坦地を造りだそうとしていることから窺えると指摘されている (『弥勒寺』)。そうすると大路 — 弥勒寺という時間的な動きが確認できる。

また、弥勒寺のプランニングを見たとき、ほぼ東西に延びる創建時の北限の溝が「伽藍の主軸決定とは異なった基準」によっていることが指摘されている (『弥勒寺』)。ほぼ東西、南北という軸は、この宇佐町の平野に確認できる条里阡線と等しいのである (fig.39)。そうであれば、弥勒寺建立時には条里が施行されていた可能性が高くなる。

さらに、宇佐大路は宇佐町の中で東西線 (条里線) に対して約一六度振れており (fig.39)、このことは中津市の沖代平野を通る大路が条里の南限に沿うような、一般的な官道と条里との関係とは異なる。

これは、宇佐町における条里の成立と道の成立の大幅な時間的なズレか、またはどちらかに他の規制を受けない強力な指導性が発揮されたことを示すのであろうが、現時点で条里の施行の時期が発掘調査で確かめられていないので確定的なことを云うのは早計であろう。

いずれにしても、宇佐宮成立時には少なくとも宇佐郡衙、または宇佐駅からの道があったのは間違いなく、弥勒寺建立時までにはそれは松隈から呉橋を通る直線道として整備されていたのである (fig.40)。

最後に、改めて直線道と条里、宇佐神宮の関係を整理しておこう (fig.41)。条里は直線道の北側、すなわち海側に展開している。ただし、宇佐条里と道路との接点については、いまのところよく分かっていない。そして、宇佐町 (No.2 地点) の条里については、直線道以前の可能性が指摘できた。

<図版 (Figures) >



Fig.1

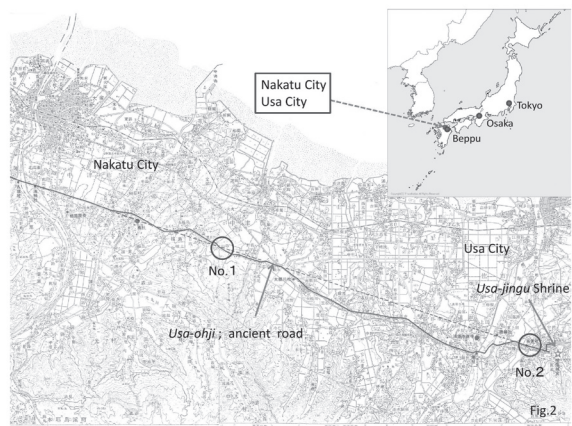


Fig.2



Fig.3



Fig.4

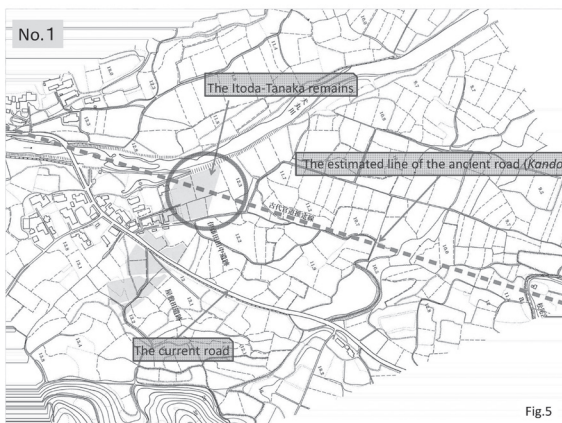


Fig.5

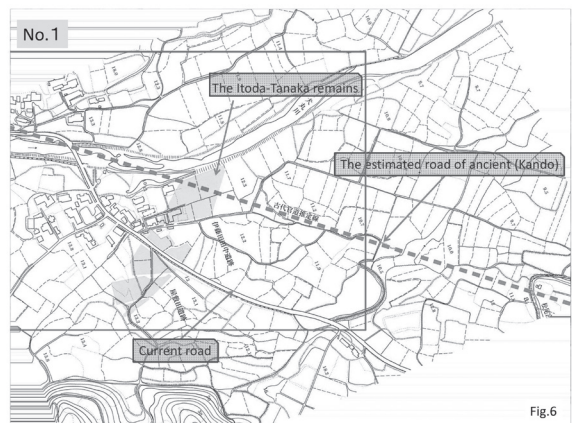


Fig.6



Fig.7

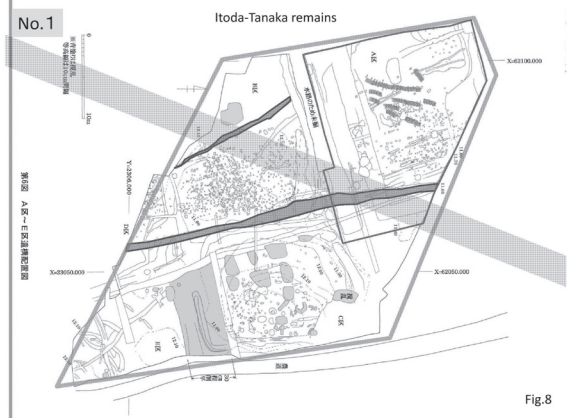


Fig.8

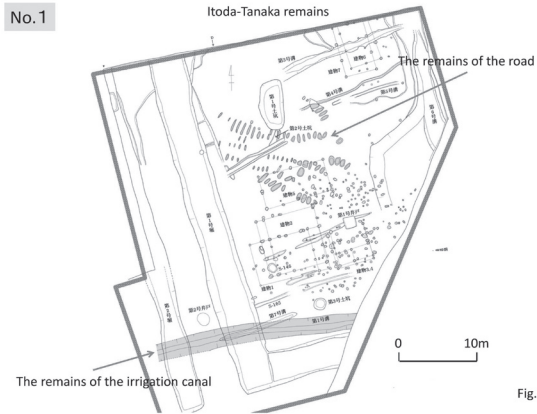
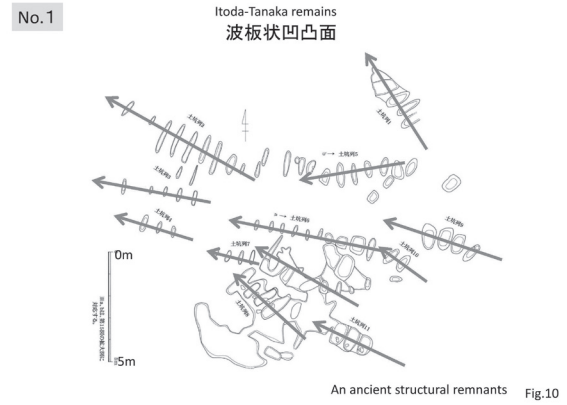


Fig.9



An ancient structural remnants Fig.10

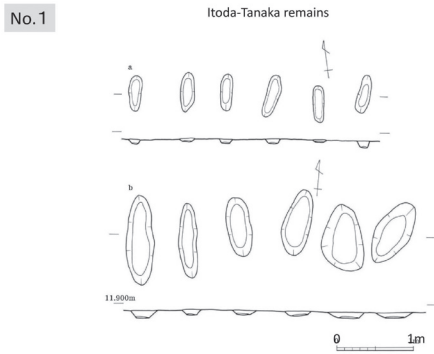


Fig.11



Fig.12

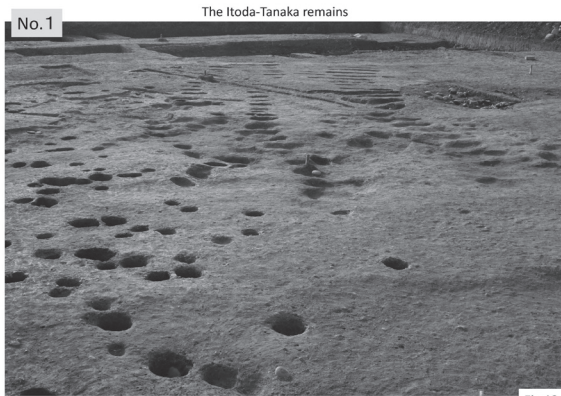


Fig.13

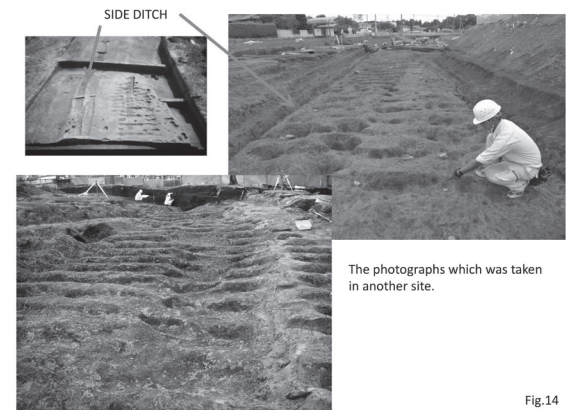


Fig.14

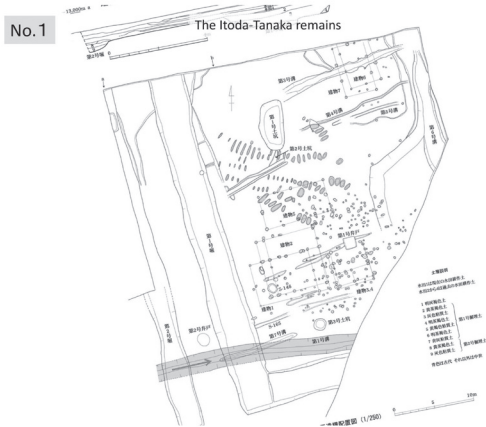


Fig.15

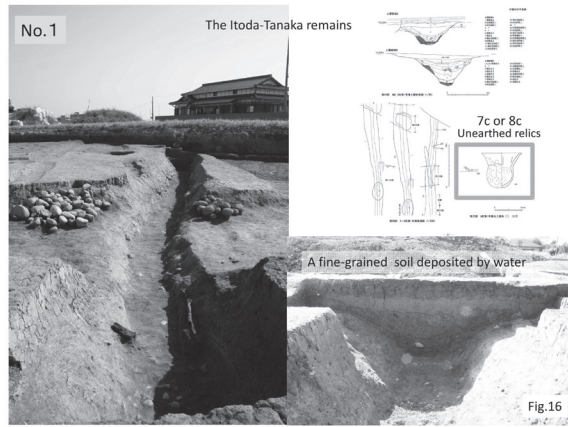


Fig.16

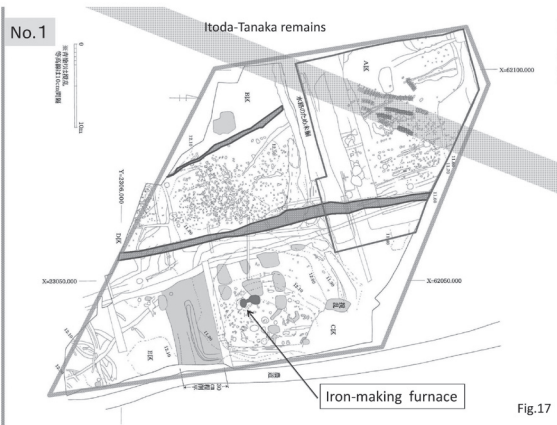


Fig.17

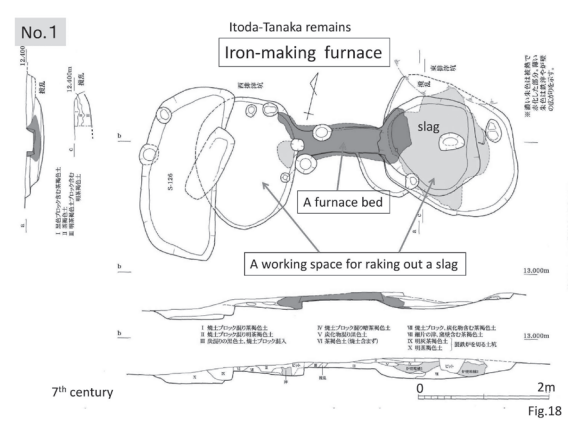


Fig.18

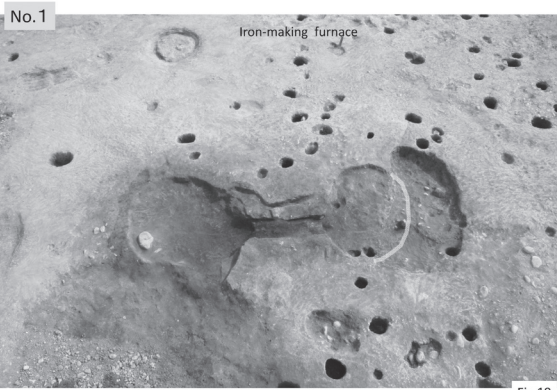


Fig.19

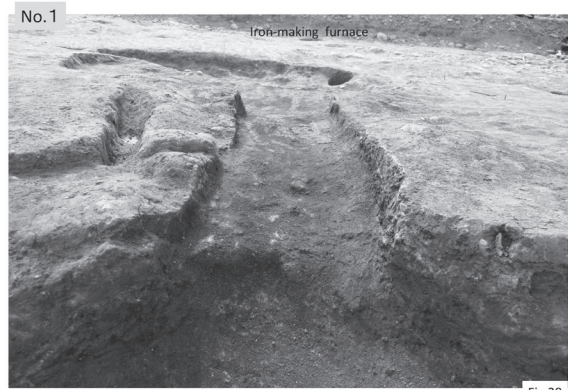


Fig.20

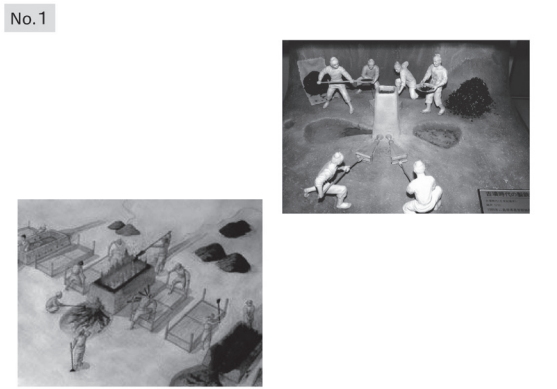


Fig.21

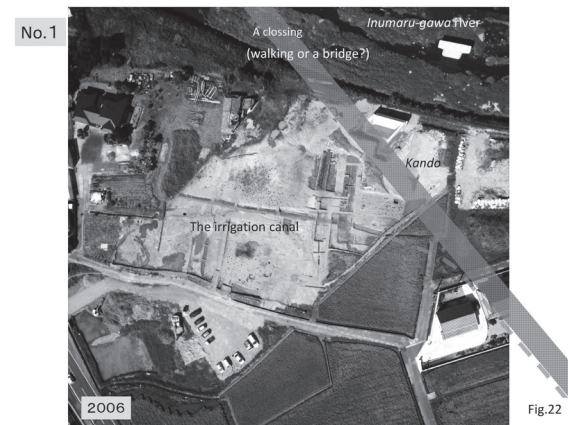
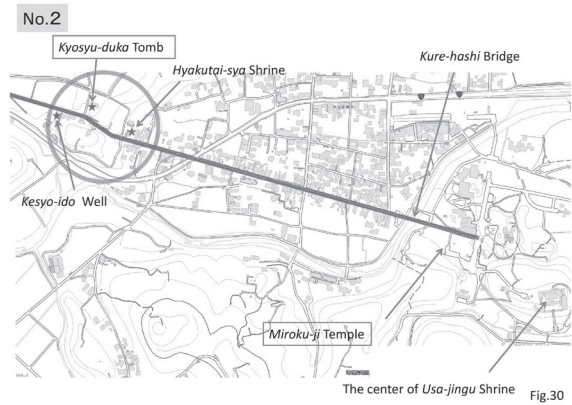
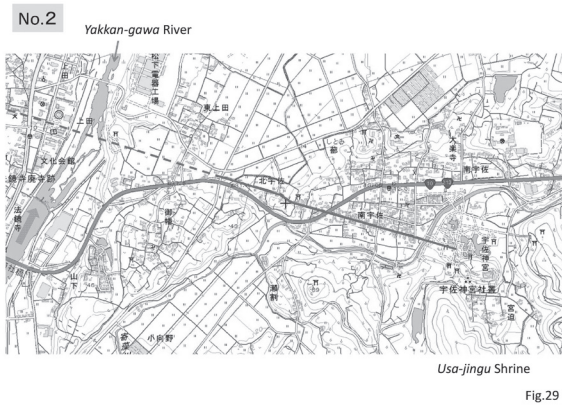
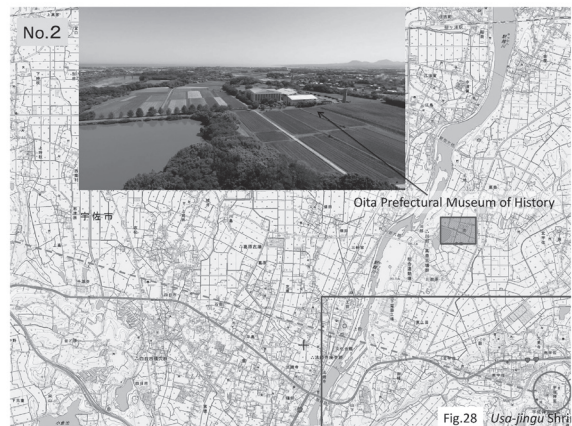
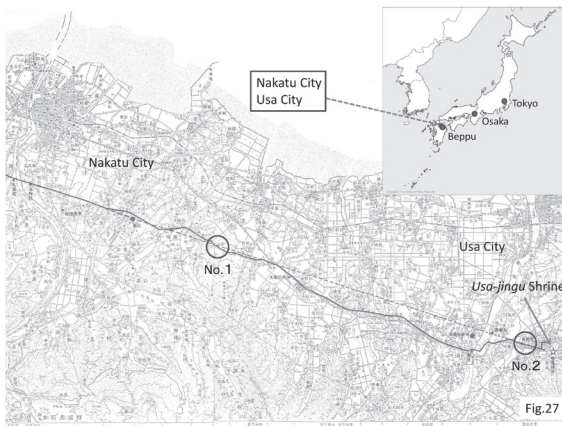
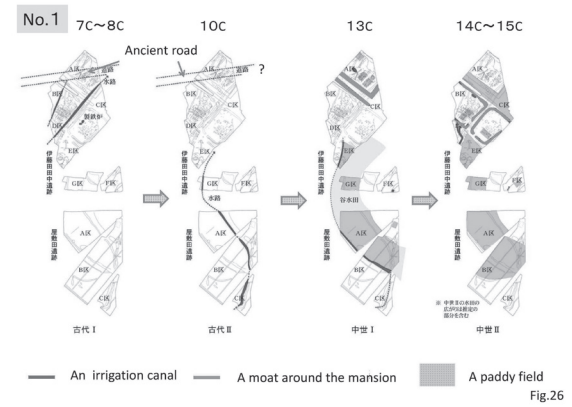
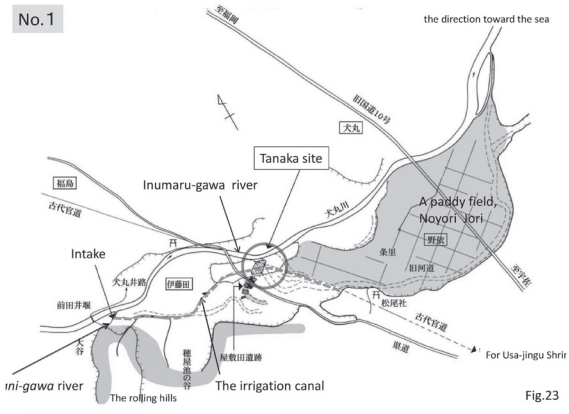


Fig.22



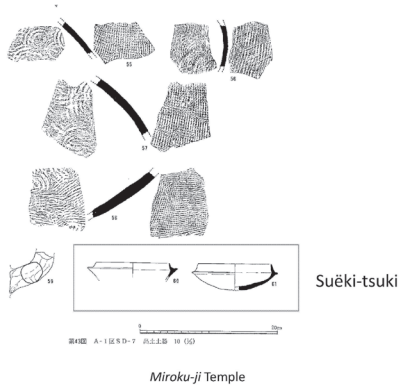


Fig.31



Fig.32

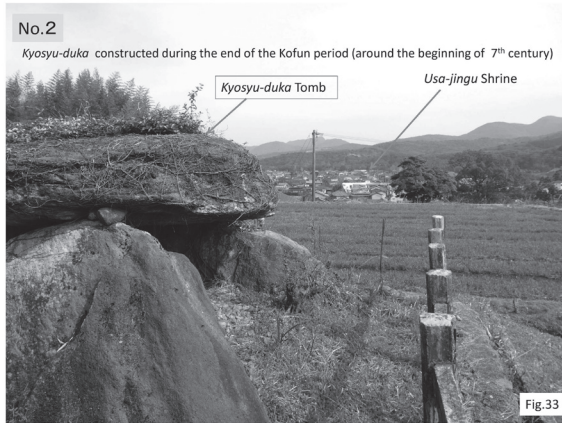


Fig.33

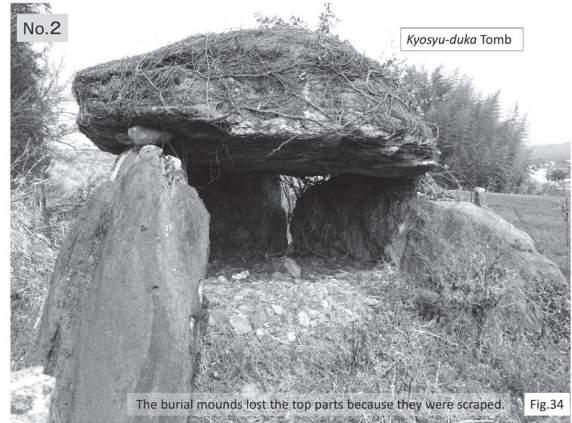


Fig.34

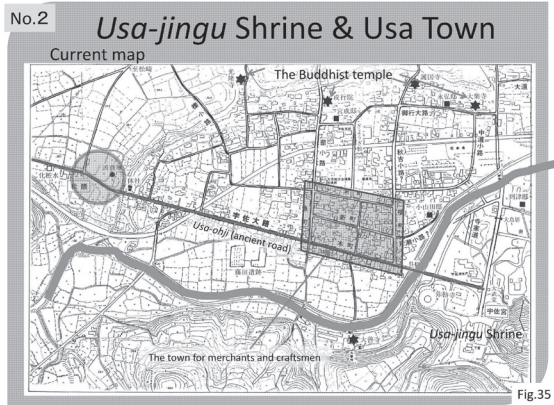


Fig.35



Fig.36

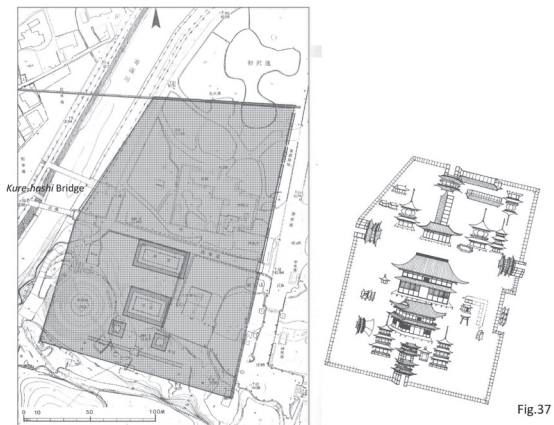


Fig.37

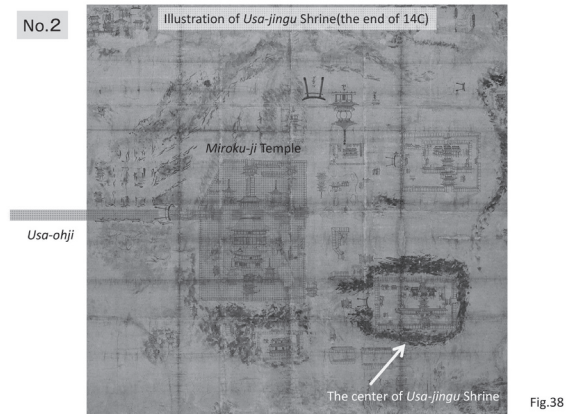
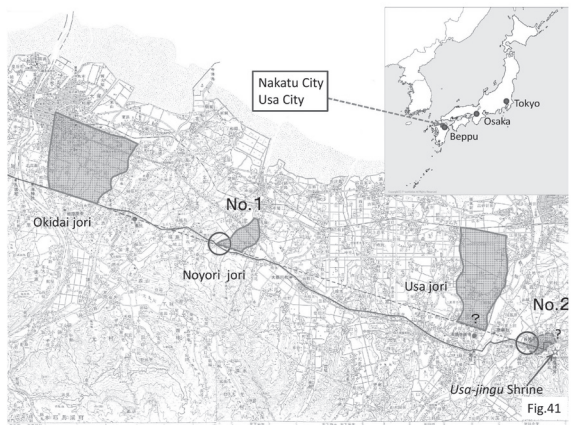
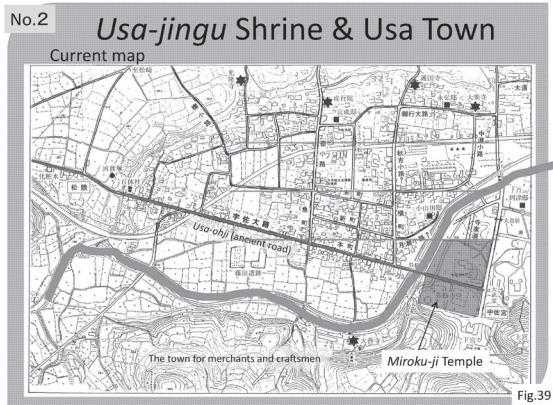


Fig.38



Sur la relation entre la route ancienne et le Jôri d'après des résultats des fouilles à Usa (Japon)

KOYANAGI Kazuhiro
(Musée départemental de l'Histoire à Oita, Japon)
Traduction par H.Yamamoto

Je voudrais parler de la relation entre la route ancienne en consultant des résultats des recherches archéologiques. La première(fig.1) est la photo aérienne du site de Tanaka laquelle a confirmé la relation entre la route ancienne et le Jôri. Au Japon il faut absolument fouiller des sites en aménageant des routes et des bâtiments. A propos du site de Tanaka, on a mis en jours le site sur lequel la route était construite, il y a douze ans. C'est dans la territoire de ville de Nakatsu, voisine de ma ville Usa(No.1 dans fig.2), environs de 12 km ouest depuis Sanctuaire Usa.

D'après la photo aérienne de 1974 ; on peut constater le vestige de Jôri. Mais actuellement on ne peut pas constater la route rectiligne. Dans cette photo le ligne supposé de la route officielle est indiqué. On peut voir bien la relation entre la route et le vestige de Jôri en élargissant la photo. En 2006 on a fouillé le site en traversant la route supposée. Dans ce temps le secteur périphérique l'aménagement des rizières avait déjà fini et le vestige de Jôri a totalement disparu. Fig.5 et 6 indiquent les sites des recherches archéologiques. On peut voir la relation entre la voie actuelle et la route rectiligne. Fig.7 est la photo aérienne élargie des sites des recherches (bleus).

Dans les fouilles du site de Tanaka, on a trouvé des ruines et des objets archéologiques datant principalement d'entre le 7e s. et le 13e s. ap. J.-Ch. C'est le plus remarquable que l'on a pu constater la ruine de la route. A propos des routes anciennes du Japon, on a détecté souvent des continuel *dokô* (galerie en terre) rectangulaires sous la route et d'à côté de la route. Dans ce site de Tanaka on a aussi constaté ces trous(fig.8,9). On ne pouvait pas constater des fosses d'à côté. Normalement une seule série de galerie, mais dans le site de Tanaka plusieurs continuel séries étaient découverts(fig.10-13).

C'est pourquoi le lieu du site de Tanaka était le point de traversée fluviale. Probablement on a changé la direction de la route à cause de la substitution du pont détruit par l'inondation et de l'échange du point de traversée pour des piétons. Il y a des divers théories sur la rôle des continuel séries de trous : pour mettre dedans des terres dures et solides ou pour mettre dedans des troncs de bois. Donc on ne peut pas décider sa rôle. Sans doute c'était l'invention pour faire la route plus utile(fig.14).

Il y avait une autre découverte importante sauf celle de la route. C'est celle de l'aqueduc qui

dirige de l'eau vers des rizières(fig.15). On peut penser que cet aqueduc alimente des rizières de Jôri en eau, en considérant la position entre l'aqueduc et le vestige de la route et l'orientation de l'aqueduc. On a aussi pu constater la ruine des plusieurs fois de creusement(fig.16). C'est dommage qu'il est difficile de décider la période de l'aqueduc, puisque l'on ne peut pas fouiller des objets archéologiques indiquant la période clairement. Mais pour le moment on pense que cet aqueduc date de 7^e ou 8^e s. ap. J.-Ch., puisque l'on mettait en jour l'objet remontant à 7^e s. ap. J.-Ch.

En regardant attentivement l'aqueduc, on trouve qu'elle se courbe un peu vers le sud à mesure qu'elle s'avance vers l'est(fig.17). On peut comprendre ce que cela signifie, en considérant la relation entre l'aqueduc et la trace de la route. C'est à dire que l'on a changé l'orientation de l'aqueduc pour qu'elle coule parallèlement à la route comme la plus sud limite de Jôri. Donc il est le plus vraisemblable de penser de ne pas construire séparément la route, l'aqueduc et le Jôri

On trouve une autre ruine de 'fourneau de fer' au presque même temps qui se situe de 8 m loin de l'aqueduc(fig.18,19). En 6^e s. apr. J.-Ch. au Japon, un fourneau de fer utilisant des minerais de fer est produit. En 7^e s. apr. J.-Ch. domine plus en plus un fourneau de fer utilisant des sables ferrugineux. Celui dans le site de Tanaka utilise aussi des sables ferrugineux.

Le fourneau même s'est situé dans le trou rectangulaire au centre du site. Et la partie inférieure du fourneau devenait dure et s'est décolorée à cause de la chaleur de feu. De chaque côté du fourneau il y a un trou rond pour évacuer des scories ('slags'). On peut restituer ce fourneau large de 40 cm et long environ de 120cm. En mesurant la période de charbon radioactif des charbons fouillés, elle date de 680-694 ap. J.-Ch. (91.9%) et de 603-692(93.1%). Donc il est possible que des bois utilisés comme des charbons brûlés avec des sables ferrugineux, étaient abattus environ à la fin de 7^e s. ap. J.-Ch. Fig.21 restaure l'opération imaginaire de sidérurgie.

Dit-on que l'état a pris part à la sidérurgie de cette époque, il est vraisemblable qu'un certain établissement public s'était situé dans le site de Tanaka. On pense que cela est en rapport étroit à ce que l'endroit du site était le point où se sont assemblés tels éléments que la rizière de Jôri, la route, l'aqueduc et ensuite le point de traversée etc.(fig.22). Ça veut dire que l'endroit du site de Tanaka était important pour l'état ancien entre la fin de 7^e s. et le 8^e s. ap. J.-Ch.

De nouveau confirmons la position du site de Tanaka(fig.23). On peut supposer que le bouche de l'aqueduc se situe environ d'un km ouest du site, parce qu'il reste encore un barrage maintenant et qu'il offrait de l'eau pour la région de Jôri(fig.24,25). L'eau pourrait couler vers l'est en utilisant le trace de cours ancien, et se tourne en chemin vers le site de Tanaka. Il fait l'aqueduc rectiligne vers le Jôri en coupant le barrage naturel. Cela coïncide avec la route rectiligne dans cette époque.

Dans le site de Tanaka, était détecté l'aqueduc datant d'entre 10^e s. et 13^e s. apr. J.-Chr. Dans cette période l'aqueduc fait des zigzags en ajustant à la courbe du trace de cours ancien. On choisit le plus économique méthode. Donc je pense que la régime centralisateur devenant sérieux environs à la fin de 7^e s. ap. J.-Ch., développait en vertu de l'introduction de Ritsuryo sur le modèle de Chine, et s'accomplissait complètement aussi dans des provinces.

Ensuite nous verrons la commune Usa (No.2)(fig.27). Mon musée se trouve près de Usa(fig.28). Usa est la petite commune établie devant Sanctuaire de Usa. Là-bas il y a une rue droite appelée 'Usa-Ôji'(la Grande Voie).

Réfléchissons maintenant à la période de formation de Usa-Ôji, en considérant celle des divers éléments (ruines et artefacts) qui se trouvent dans le ledit quartier de Usa(fig.29,30).

D'abord le plus vieil (vieux) vestige confirmé par des fouilles est un Suëki-tsuki(récipient en terre) de la seconde moitié de 6^e siècle qui était mis au jour dans le temple bouddhique de Mirokuji(fig.31).

Cette relique est mise au jour(a été découverte dans la fosse nord du territoire originel du Mirokuji enterré au début de la période de Heian (9^e s.). Il est difficile de savoir à quel vestige elle appartient l'origine, mais c'est très intéressante au titre représentatif de la période précédant la construction du Sanctuaire de Usa (selon 'Mirokuji').

Le deuxième plus vieux vestige est le tumulus de Kyôshuzuka(celui de Hayato vaincu) (fig.32-34). C'est un tumulus mégalithique construit vers le début de 7^e siècle, clairement avant que la route officielle soit aménagée.

Autour du quartier de Usa, aucun tumulus autre que celui de Kyôshuzuka n'a encore été découvert. Mais selon le document testamentaire de Nagahiro Mitsuyo Yuzurijyo 永弘光世讓状 de 1430(dans *Documents de Nagahiro 624, Documents historiques du Département d'Oita*, IV). Il existe un "tsuka"(monticule) à la limite du territoire, considéré comme "fun"(tumulus) et appelé "Ichiiki (nom de famille) Shigeyasu(prénom)"Et sur une colline nord qui domine le quartier de Usa, il reste des noms de tsuka (monticules) : Hira(plain)-tsuka, Ni(deux)-tsuka, Kitsune(renard)-tsuka, Shiomi(voir la marée)-tsuka etc. Il est donc probable que des tumulus aient existé ça et là autour de celui de Kyôshuzuka.

Cependant quand on compare la périphérie du quartier de Usa avec Usa-haru(fig.35), le plateau sur la rive droite du fleuve de Yakkan-gawa, où zenpō kōenfun* ont été construites de façon ininterrompue (depuis le tumulus de Aka(rouge)-tsuka à la seconde moitié du 3^e siècle jusqu'au tumulus de Tsurumi(voir la grue)-tsuka au milieu du 6^e siècle), et avec la plaine de Usa où un grand tumulus rond de Kuzuhara-kofun a été construit au 5^e siècle, on peut supposer qu'à

la période des tumulus, cette périphérie était en retard et de niveau inférieur tant en ce qui concerne l'aménagement que le dynamisme de ces régions.

*zenpo koenun : un tumulus circulaire précédé d'un avant-corps trapézoïdal (a round-keyhole-shaped tomb)

Il est très significatif qu'un tumulus mégalithique soit construit dans cet endroit à la fin du 6^e siècle ou au début du 7^e siècle. Cent et quelques dizaines d'années plus tard viendra la période qui préparera l'entrée de cette périphérie de la commune de Usa dans l'Histoire. Il est dommage qu'on ait pas de documents sur les différents aspects de cette période. Autres que quelques écrits transmis jusqu'à ce jour et l'avancement des recherches archéologiques sur cette question se fait attendre.

Vient ensuite, vers le milieu du 8^e siècle l'édification. Du temple bouddhique Mirokuji. Elle aurait eu lieu en 738 (Jyôwa 10) selon Jyôwa-engi (les récits se rapportant à l'origine des sanctuaires shinto de l'ère de Jyôwa (834-848)) * et cela a été quasiment confirmé par des fouilles (fig.37).

* Selon *Usa-hachimangu-engi* (l'Origine et l'Histoire de Sanctuaire de Usa)

Il est sûr et certain que Sanctuaire de Usa a été édifié avant cela, en 725 (*Jinki* 2) d'après le Jyôwa-engi

Par ailleurs, en voyant la disposition des bâtiments dans le temple bouddhique de Mirokuji, on peut comprendre l'intention de disposer les bâtiments principaux au sud de l'actuel Nishisando sur le prolongement de Usa-ôji (la voie sacrée de l'ouest) (fig.38). On dit que cela peut être deviné dans la tentative d'aplanir le terrain au sud, bien que celui-ci se trouve tout près de la montagne (selon 'Mirokuji'). Et même s'il faut éroder la montagne pour cela. ainsi, on peut confirmer le processus chronologique de Usa-ôji à Miroku-ji

Autre point, en regardant les plans de Miroku-ji, on a pu remarquer qu'à l'époque de la fondation, le fossé nord s'allongeait à peu près dans un axe est-ouest (*) et que cette orientation différente de celle des axes principaux de disposition des bâtiments (selon 'Miroku-ji') Ces axes, approximativement est-ouest et nord-sud sont semblables à l'axe (sensen) de Jôri qu'on peut constater dans la plaine du quartier de Usa (fig.39). Ce qui dans ces conditions, augmente la possibilité que le Jôri de Usa ait déjà été aménagé au temps de l'édification de Miroku-ji.

De plus, l'orientation de Usa-ôji est inclinée environs de 16 degrés vers l'axe est-ouest de Jôri dans le quartier de Usa (fig.39). Ce qui est différent de la relation ordinaire entre les officielles et le Jôri comme par exemple la grande voie (ôji) traversant la plaine de Okidai en longeant la limite sud de Jôri dans la ville de Nakatsu

Cela signifierait qu'il y aurait eu, dans le quartier de Usa, un grand décalage de temps entre l'aménagement de Jôri et celui de la route ou bien une forte domination de l'un, qui ne serait pas laissé influencer par les règles de l'autre. Mais pour le moment, la période d'aménagement de Jôri n'étant pas vérifiée par les fouilles, il serait hâtif de conclure.

En tout cas, il est certain qu'il y avait au moins une route depuis le chef-lieu du canton de Usa ou depuis le relais de Usa au temps de la formation de Sanctuaire de Usa. Et cette route avait été aménagée comme voie rectiligne passant de la colline de Matsukuma au pont Kurehashi avant même la période de l'édification de Mirokuji(fig.40).

De nouveau finalement nous allons résumer la relation entre la route rectiligne, Jôri et Sanctuaire de Usa(fig.41). Le Jôri se développe au nord de la route rectiligne, c'est-à-dire au sud de la mer. Cependant on ne peut pas maintenant éclaircir le point de contact de Jôri de Usa avec la route. Et je peux indiquer que le Jôri de la commune de Usa (No.2) était aménagé avant la construction de la route rectiligne.

ナルボンヌの属州聖域と宇佐の条里制

山本晴樹（別府大学）

ローマ元老院属州ナルボネンシス（現フランス南部）のローマ都市ナルボ（現ナルボンヌ）は属州首都であるが、そのため郊外には属州レヴェルの皇帝礼拝を行う聖域（属州聖域）があり、またそれに隣接して円形闘技場が設置されていた（fig.1）。この聖域の跡地から19世紀末に出土したのが、「属州ナルボネンシスの祭司法（Lex de flamonio provinciae Narbonensium）」と呼ばれる碑文（CIL XII,6038）である。これは属州祭司についての詳細な規定を定めたもので、属州レヴェルの皇帝礼拝の成立を伝える貴重な史料といわれている。しかし、それを創設した皇帝の名前を記す箇所が欠落しているために、それをめぐって様々な説が提起されている。これまでの議論で大方の支持を得ているのは「ウェスパシアヌス（在位69-79）説」である。

ナルボの都市レヴェルの皇帝を行う場（都市聖域）は、現在のフォーラム広場（旧ビスタン広場）の一角を占める一帯に存在したことが考古学調査から判明している。それに対して属州聖域は上述の碑文を出土した地区一帯を占めたことが明らかではあるが、その実態はいまだ把握されていない。例えば、1980年代末までのガリア・ナルボネンシスに関する研究をまとめたRivet（1988）の図（fig.2）によれば、属州聖域は中心部の都市属州聖域から発する道路の延長線上の道路に接している。

しかし、ペレス氏（1995）によれば、図（fig.3,4）のように属州聖域とそれに隣接する円形闘技場の方位はN39° 30'Eであり、都市聖域の方位（N21° 15'E）とは明らかに異なっているので、両聖域が同一線上に並んでいるRivetの図はあり得ないものである。その点では、Rivetの研究に先立つMoulis氏およびSabrie夫妻の本（1986）に描かれた図（fig. 5,6）の方がより正確ではあるが、しかし完全ではない。

このように、その一角が残存している都市聖域に比べて属州聖域および円形闘技場は現在地下に埋蔵されているためにその実態は明らかになってはいない。写真（fig.7）は現在の属州聖域および円形闘技場の跡と思われる地区であるが、まったく往時の姿をとどめていない。かろうじて湾曲しているアパルトマン（HLM）（fig.8）の形状から、その地下に円形闘技場の遺跡が存在している可能性を推測できるのみである。

ここで比較のために、ヒスパニアやアフリカの属州首都における都市聖域と属州聖域との位置関係をそれぞれの都市図でみてみよう。バエティカのコルドバ（fig.9）やアフリカ・プロコンスラリスのカルタゴ（fig.10）では、両聖域はいずれもKardo Maximus（南北基軸線）やDecumanus Maximus（東西基軸線）に関係しているように思われる。これに対してナルボンヌではそうではない。まさしくここにナルボンヌの属州聖域の特色が表れているのである。

ナルボの属州聖域において、はじめて西地中海世界における属州レヴェルの皇帝礼拝が確立したと

いわれており、その成立の時期をめぐって議論が戦わされている。従ってナルボンヌの属州聖域の遺跡としての重要性は極めて高いといわなければならない。しかしながら現状は聖域中心部跡が写真(fig.11)にみるような状態である。ナルボの属州聖域の研究の進展を願わずにはいられない。

さて、日本における研究状況を見てみよう。

飯沼健司氏は1991年に出された報告書『宇佐大路』において、中津条里の南限線と宇佐幡宮へ至る宇佐大路・西参道が同一線上に並んでいることを指摘し、両者をつなぐ官道の存在を推定している(fig.12)。この指摘は、これまであまり関連づけて考察されことのなかった中津条里と官道と宇佐八幡宮を地割・街道・聖域として包括的に捉えるものであり、まさしく前述のペレス氏の研究と重なるものであった。

小柳和宏氏は同じく1991年に、宇佐八幡宮周辺にはより以前に施行された条里が存在しており、宇佐大路・西参道はその条里を裁断するかたちで直進して宇佐八幡宮に至ったことを指摘した。そして今回小柳氏は、飯沼氏が推定した宇佐平野での直線的な官道の存在の可能性を参考にして考古学調査を行い、宇佐平野においてはその官道を南限線として宇佐条里が施行された可能性を指摘した(fig.13)。宇佐条里に関しては島方(2009)の歴史地図ではfig.14でみるような場所が指摘されているが、これはあくまでも推定である。

今後は、小柳氏の指摘を踏まえて、宇佐平野での条里制に関する本格的な考古学調査が行われることを期待したい。この調査が進めば、官道の建設年代および宇佐条里の施行年代が明らかになるであろうし、このことは引いてはその官道が到達する宇佐八幡宮における神宮寺たる弥勒寺の建立年代の解明にも貢献することになるとと思われる。

<結び>

この日仏共同研究の出発点はペレス氏の研究——聖域(属州皇帝礼拝の聖域)と街道(属州聖域が則している街道)および地割(ナルボンヌE型地割)を一体として関連付ける——であった。この研究に啓発されて、われわれは日本の大分県において、聖域(宇佐八幡宮・神宮寺弥勒寺)と街道(官道・勅使街道)そして地割(中津条里・宇佐条里)がそれぞれ別個なものではなく、一体として把握さるべきであることを痛感した。今後はフランスと日本でそれぞれ得られる成果を比較検討することによって、聖域・街道・地割の研究が一層前進することを期待したい。世界史的な価値をもつ国際共同研究になるものと思われるからである。

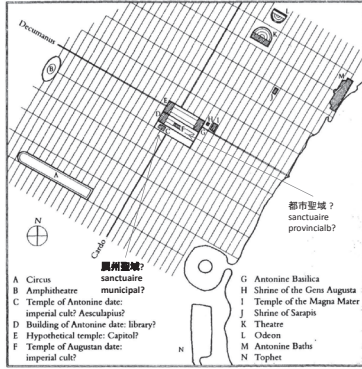


fig. 10 カルタゴ(2C.)Karthage antique (Rives 1995)



fig.11 鳳州聖域中心部跡
La ruine du centre du sanctuaire provincial en 2016



fig.12 勅使街道と古代官道推定線(『宇佐大路』1991年)
La route du légat impérial et la route conjecturale de kandô (Iinuma 1991)

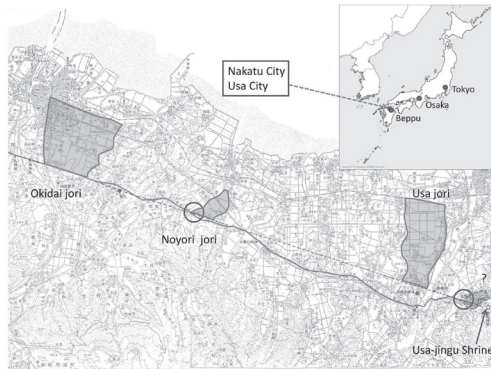


fig.13 官道推定線上的中津条里・野依条里・宇佐条里(小柳2018)
Jōri de Nakatsu, Jōri de Noyori et Jōri de Usa sur la route conjecturale de kandô (Koyanagi 2018)



fig.14 中津条里・宇佐条里(推定)
Jōri de Nakatsu et Jōri conjectural de Usa (Simakata 2009)

Le sanctuaire provincial de Narbonne et le Jôri d'Usa

YAMAMOTO Haruki
(Beppu University)

La ville de Narbonne est la capitale d'une province romaine sénatoriale. Elle possède un sanctuaire provincial où le culte impérial était exercé au niveau de l'Etat (fig.1). L'amphithéâtre était édifié dans son voisinage. Près des ruines de ce sanctuaire, une inscription fut découverte, intitulée 'La loi du flamine de la province de Narbonnaise (*Lex de flamonio provinciae Narbonensium*, CIL XII,6038) '. Cette loi institue des règles précises sur le sacerdoce provincial et inaugure le culte impérial au niveau provincial. Mais il y manque le nom de l'empereur-auteur. Beaucoup de théories ont été proposées : l'hypothèse de Vespasien (r.69-79), à ce jour, l'emporte.

Selon des recherches archéologiques, le sanctuaire municipal de Narbonne est situé dans l'emplacement qui constitue le coin de actuelle Place de Forum (ancienne Place Bistan). Le sanctuaire provincial, hors de la vieille enceinte républicaine, occupait le secteur où ladite inscription a été mise au jour : mais on ne peut pas confirmer sa position véritable. Selon A.F.L. Rivet (1988) par exemple, le sanctuaire provincial longe la route provenant, en droite ligne, du sanctuaire municipal (fig.2).

M.Pérez a confirmé que l'orientation du sanctuaire provincial et de l'amphithéâtre est environ de N39° 30 E (fig.3,4) : elle est vraiment très distincte de celle du sanctuaire municipal. Ça veut dire que deux sanctuaires ne pourraient pas se trouver en longeant la même route. Cependant le plan dessiné par M. D. Moulis (1986)(fig.5,6) est plutôt plus exact que celui de M. Rivet, mais il n'est pas parfait.

Pour le moment par comparaison avec celle du sanctuaire municipal, la véritable situation du sanctuaire provincial et de l'amphithéâtre n'est pas éclairée, puisque le sanctuaire provincial et l'amphithéâtre sont entièrement sous terre, à l'état de substructions. Dans la situation actuelle (fig.7), le paysage ancien de cet endroit n'est donc pas discernable. On peut au plus deviner l'existence souterraine de l'amphithéâtre sur la photographie aérienne (fig.8). par l'intermédiaire de la forme elliptique d'un immeuble (HLM), forme que ses promoteurs adoptèrent après en avoir découvert la trace en creusant pour poser les fondations de l'édifice moderne.

Voyons les plans des capitales dans les provinces romaines sénatoriales à propos de la relation topographique entre sanctuaire municipal et provincial. Dans les villes de Corduba (Cordoue) en Bétique (fig.9) et de Carthago (Carthage) en Afrique proconsulaire (fig.10), il me semble que les deux sanctuaires se relient avec le Kardo Maximus et/ou le Decumanus Maximus. Mais comme

nous avons déjà vu, ce n'est pas même chose dans le cas des deux sanctuaires à Narbonne. Ce serait donc un cas de figure caractéristique de Narbonne.

On dit que le culte impérial au niveau provincial a commencé au sanctuaire provincial de Narbonne pour la première fois. La première construction du sanctuaire provincial à Narbonne est donc très importante pour l'établissement du culte impérial dans l'Empire romain. Mais l'image (fig.11) montre la situation actuelle du vestige de cet endroit. J'espère donc qu'à l'avenir, les recherches sur sanctuaire provincial de Narbonne fera de grands progrès.

Considérons maintenant la situation actuelle des études au Japon.

linuma(1991) remarque que la limite la plus méridionale du Jôri de Nakatsu se prolonge théoriquement jusqu'à la voie d'Usa-Ôji et du Nishi-sandô qui aboutissent au Sanctuaire d'Usa(fig.12). Il a aussi imaginé qu'il y avait le kandô (la route publique) qui liait ces deux routes. Cela veut dire que M.linuma a lié le Jôri de Nakatsu (le cadastre), le kandô (la voie) et le Sanctuaire d'Usa (le sanctuaire) organiquement. L'idée de M.linuma est vraiment la même que celle de M.Pérez.

M.Koyanagi(1991) a confirmé que Usa-Ôji et Nishi-sandô furent construits par le pouvoir de haut niveau, puisque cette route coupait le système foncier déjà aménagé dans le territoire du Sanctuaire d'Usa. Dernièrement, M.Koyanagi a recherché le site de la plaine d'Usa au plan archéologique et il a constaté qu'il y avait le kandô rectiligne et qu'il était aussi la limite sud du Jôri d'Usa(fig.13). Pour le Jôri d'Usa, la carte historico-géographique de Shimakata 2009 (fig.14) a présenté la position topographique du Jôri d' Usa dans la plaine, mais c'est purement conjectural.

Désormais il est nécessaire de faire des fouilles précises dans la plaine d'Usa, en se référant aux études de M.Koyanagi. On va éclairer la chronologie de l'aménagement du Jôri d' Usa et où le kandô était situé dans le Jôri, et ensuite quand Usa-Ôji et Nishi-sandô furent construits. Finalement on pourrait confirmer la date de construction du temple shintoïste-bouddhique Miroku-ji dans l'enceinte du Sanctuaire d' Usa.

Conclusion

Le point de départ de notre projet était les études de M.Pérez. Il a prouvé la relation étroite entre le sanctuaire(le temple du culte impérial et l'amphithéâtre), la voie (la route à côté du sanctuaire) et le cadastre (la centuriation de «Narbonne E). Grâce à ses études, nous pourrions confirmer la même relation au Japon entre le sanctuaire (le temple shintoïste-bouddhique Miroku-ji, le Sanctuaire d'Usa), la voie (kandô, la route du légat impérial) et le cadastre (Jôri de Nakatsu, Jôri d'Usa). Désormais nous pourrions comparer les résultats de chaque étude en France et au

Japon. Il semble que notre projet soit digne d'affecter une signification mondiale.

Bibliographie

Rivet(1988) :A.F.L.Rivet,*Gallia Narbonensis*, London 1988.

Perez(1995):A.Pérez, *Les cadastres antiques en Narbonnaise occidentale*, Paris 1995.

Moulis(1986) :D.Moulis et R. et M. Sabrie, *Narbonne Romaine*, 1986.

linuma(1991) : Kenji linuma, *Usa-Oji*, Oita 1991. (en japonais)

Koyanagi(1991) : Kazuhiro Koyanai, *Usa-Oji*,1991.(en japonais)

Shimakata(2009) : Kouichi Shimakata (ed.), *La carte de l'Ouest-Japon antique*, Heibonsha, Tokyo 2009. (en japonais)

Panzram(2002) : S.Panzram, *Stadtbild und Elite*, Stuttgart 2002.

Golvin(2002) :G.Coulon et J.-C.Golvin, *Voyage en Gaule romaine*, Arles,Paris 2002.

Rives(1991) : J.B. Rives, *Religion and Authority in Roman Carthage from Augustus to Constantine*, Oxford 1995.

地 割

—ローマ皇帝の権威の表現—

アントワヌ・ペレス (モンペリエ第三大学)

山 本 晴 樹 訳 (別府大学)

「それ以来、わたしはもはやわたしの同僚の政務官以上の権力を持たなかった。しかしわたしは権威において彼らに勝った。」(『神皇アウグストゥス業績録』34) (fig.1)

この文章は、アウグストゥスの政治的遺書から引用されているが、これのみでローマ帝国の創立者の権力の本質を要約している。ローマ共和政の旧来の政務官の特権と権力の全体の相続者として、アウグストゥスは新たな政治体制を開始するであろう。その中では、すべての政治制度はその後皇帝の聖なるあるいは神的な本質に従属する状態になる。それはローマと同時代のいかなる他の文明のなかに匹敵するものがない概念、すなわちアウクトリタース (権威) の力によるのである。

I 皇帝アウグストゥスの諸権力：アウグストゥス、アウグル、アウクトリタース (fig.2)

1 アウグストゥス、最高のアウクトリタース (権威) を保持する者

前27年1月11日ガイウス・ユリウス・オクタウィアヌスは公式に元老院でアウグストゥスの称号を受け取る。この名前 (コグノーメン) は古代の終末まで全てのローマ皇帝によって担われるであろう。それはローマ共和政末期に帝国という新しい体制を開始しその本質を決定づける革命の最終的な到達点をなしている。

このアウグストゥスという用語についてしばらく立ち返ることは重要である。アウグストゥスは「聖なる力に満ちた」という意味である。この名前アウグストゥスが意味するのは実際のところ、皇帝が神々に結びついているということであり、彼 (アウグストゥス) がユピテル (ローマの最高神) 自身から彼に来る一つの権威を意のままにすることである。このことは今後、彼のすべての政治行動は「"augmentés"増大される」(ラテン語のaugereから)。すなわちそれらは法の力をもつ。アウグストゥスはaugur (augure鳥占官) でもある。鳥占官は古代ローマでは神々の意思を知る神官であった。各々の政治行動、各々の決定はまず鳥占官団の助言によって先取りされた。都市の神々が好意的であるということが確信された (fig.3)。それ故、アウグストゥスは今後は鳥占官の第一位の者である。そしていかなる者も神々の意思を知るのに彼よりもより良い地位にある者はいない。彼は権威、より勝ったカリスマを意のままにする。それはラテン語ではアウクトリタースと呼ばれている。かくして、皇帝は共和政の他のすべての政務官の上位に置かれる。彼ら (政務官) はかれら自身、貴族として、アウクトリタース (権威) をもつ。しかし今後はアウグストゥスのそれよりは劣っている。まさにそれ故アウグストゥスは彼の遺書、業績録の中で書くことができる。「わたしはわたしの同僚政務官以上の権力を持たなかった。...、しかしわたしは権威において彼らに勝った。」

そこにはローマ皇帝権力の基礎そのものがある。皇帝のすべての行動は神々からかれらに来るこの権威、この威信によって「増大」される。アウグストゥスはそれ故全く「元老院の第一人者」(元老

院での第一位の政務官)であり、ローマの第一位の鳥占官である。彼は全ての政務官の政治権力と全ての神官の宗教的権力を同時に独占する。

2 神的な本質をもつ皇帝

元首アウグストゥスは彼自身神的な本質をもっているということがある。もち論かれは全く神ではない。しかし彼の身体は神性の一部を含んでいる。なぜか。

二つの理由

a) 彼はカエサルの養子、いわゆるユリウス氏族(カエサルの家系)であるので、ウェヌス(ヴィーナス)自身の子孫であった。しかしとりわけ前44年3月の暗殺以後、カエサルは元老院によって神格化された(アポテオーシス)。そしてローマの中心、フォーラムに神殿が建立された(神格化されたカエサルの神殿)。実際、独裁官の死の翌日、彗星がローマの空に現れたといわれている。それは彼の魂が神々と結びつく印であった。これはその死後の皇帝の神格化のローマでの最初の事例である。ローマ宗教の三大主要神の礼拝に捧げられた神官(ユピテルの祭司flamenn Dialis、マルスの祭司flamen Martialis、クイリーヌスの祭司flamen Quirinalis)の傍らに、彼(カエサル)の礼拝に捧げられた神官、flamen Iulii(カエサルの祭司)もまた創設された。

b) 前述のように、鳥占官の第一位の者として、彼(アウグストゥス)は神々の意思を知っていた。そしてこの資格で、かれはローマ共和政の他の政務官、すなわちローマ貴族の全体、の権威に優る権威を保持する。それ故それは、絶対に争う余地のない、より優れたインペリウム(命令権)であり、より優れたアウクトリタース(権威)である。そしてそれは彼の全存在に対してであり、彼の全生涯にわたる。

II アウクトリタース(権威)とケントゥーリア地割

a) 開始と終結

最古の古代以来、ローマでは、新しい植民市が建設される際、鳥占官と呼ばれる新しい神官はト占(鳥占い)を行う。彼らは神々が好意的であるかどうかを知るために鳥の飛翔(飛び方)を観察する。この伝統は極めて古い。それは前753年のロムルスによるローマの建設という伝説的な時期にさかのぼる。文学的な伝承によれば、ロムルスはパラティーヌスの丘の頂にある、鳥占いをおこなう神域(templum)に上った。すなわちそこは神々に捧げられ、宇宙の秩序に従って方向づけられた四角い台座である。その用語(templum)はギリシア語のテメノスと同じ意味の分野に属している。この場所から、rex-augur(王-鳥占官)はリトゥウス(鳥占官の杖)の助けによって、ローマの将来の二つの軸を象徴的に線引きした。数世紀後に、ローマの政務官—rex(王)のimperium(命令権)の同僚的な相続者—は、植民市すなわちローマの拡大を建設するとき、同じ動作を繰り返す。その際locus gromae(測量器の位置)、すなわちそれによってケントゥーリア地割が開始されることになる直角儀gromaが設置される正確な場所、が決定される。資料によれば、この所作は鳥占いによって、すなわち鳥占官の責任のもと十分に了解されている鳥占いの行使によってなされる。その際、宗教的に「増大」された(ラテン語でinauguratio)この四角の台座から始まって、天と地の四分分割(四つの部分に分けること)が実施される。

以下のことを詳細に述べることは重要なことである。すなわち、神官によって使用される道具ステッ

ラ (stella) は、宇宙の四つの大きな方向を表す四つの枝のついた一種の十字架であるということ。これは同じような道具で、直交している四つの枝をもつ直角儀である。それを、このようにして建設された都市のあらたな地割 (条里) を構築する測量師が後に使用するであろう (fig.4)。その方向は聖なる建築物、すなわち祭壇、神殿、聖域の方位を決定することが証明されている。リミタティオ (境界設定) とインアウグラティオ (開始) という二つの動作はそれ故まさしくはるか昔に失われる共通の起源をもっている。

最も重要な境界はそれ故神々に捧げられた土地、すなわちそう呼ばれているテンブルムにおいて線引きされる。それ故それら (境界)

は神聖であり、不可侵である。エトルリア人に帰せられ、そして土地測量士の集大成にもたらされている古い伝説 (われわれに地割の科学について語っているテキスト) は、ユピテル・テルミヌス (境界の神ユピテル) が境界石や境界線をあえて動かし、かくして境界のディグニタース (威厳) をあえて犯す者を死をもって罰するであろうということを主張している。実際のところ、境界を無視する者は世界を野蛮に、すなわち都市 (ローマ) とその法の存在以前の状態に、いわば先史時代にふたたび陥らせる。この理由から測量師が地割の境界の線引きをする際、かれらは常に境界の土塁の堀で犠牲を行う。すなわちテルミヌス神、境界と辺境の神の名誉において犠牲を行う。それは都市と国家の辺境の永遠の特徴を保証する。

B) アウグストゥス、最初のフィーニートル (測量師)

繰り返すことになるが、ローマ皇帝は彼自身鳥占官の第一位の者である。実際、前12年に、彼の名目上最後の共和政派マルクス・アエミリウス・レピドゥスの死に際して、皇帝は終身の最高祭司 (ポンティフェクス・マクシムス) となった。この資格でかれはローマのすべての祭司集団とりわけ鳥占官の集団を管理する。

アウグストゥスはそれ故、前27年1月より最高位の鳥占官としてローマ帝国のすべての都市の象徴的建設者となる。そしてローマ帝

国のすべての都市はケントゥーリア地割が与えられた。アウグストゥスはそれ故事実上最初のフィーニートルであり、最初の測量士である。

ケントゥーリア地割の全ての道や境界は威厳 (ラテン語でディグニタース) を与えられている。それは帝国のすべての領域に対する彼のアウクトリタース (権威) を表している (図5)。

フランスで非常に有名な史料は更にアウクトリタース (権威) とリミタティオ (地割) の創設との間の結びつきを説明している (図6, 7)。一つの碑文 (1959年に発見された) は実際、後75年にウェスパシアヌス帝が、オクタウィアヌス (アウグストゥス) によって建設されたオランジュの植民市の地割を確証した (図6)。ウェスパシアヌス帝はローマ帝国の第二の王朝の創設者である。彼はアウグストゥスの家系には属していなかった。というのもアウグストゥスの最後の子孫であるネロ帝は亡くなっていたからである。皇帝になるために、ウェスパシアヌスは彼のインペリウム (命令権) についての法律を編纂させた (それが皇帝ウェスパシアヌスの法である。この神聖な法は、ローマ元老院によって決議されたが、以下のことを定めている。つまり、彼 (ウェスパシアヌス) は神格化された

アウグストゥスのアウクトリタース（権威）を引き継いでいるということである。従って彼（アウグストゥス）はウェスパシアヌスの直接の祖先になる。それ故ウェスパシアヌスは今や新たな境界線を引くために、あるいはオランジュの碑文が示しているようにアウクトル（創設者）の資格で古い地割をやり直すために活動することができるのである。

皇帝の地位のこの特徴はさらにアウグストゥスの治世から数世紀後のローマ帝国の最後にみらる。アウクトレース、そのように古代のテキスト（史料）はローマ帝国の都市の領域で測量活動を管理する高い位の役人を呼ぶ。彼らはそのように名付けられているが、それはかれらが皇帝の最高のアウクトリタース（権威）を委任によって保持するからである。それを彼らは古い地割に秩序をふたたびもたらしたり、新しい地割を作り出したりするためにそうする。古代末期において（後4世紀～5世紀）、この高い位の役人はこの測量師（アウクトルであるミスロンティウスなる人物）という威厳のある称号（「非常に傑出した）人物）で飾られている（fig.8）。彼はテオドシウス帝（後4世紀の末）の治世に記述している。

ベジエの場合は皇帝のこの地位の見事な事例である（fig.9, 10）。オクタウィウス、後のアウグストゥス、すなわちバエテラエ（現ベジエ）の創設者の像（彫像）がフォルム（中央広場）にあった。この植民市のリミタティオ（地割）を創ったのが彼であった。そしてこの肖像（彫刻）はベジエの市民が寄贈したものであるが、かれがアウグストゥスになる前にすでに将来のプリンケプス（元首）の神の摂理によるそして神的な特徴という名誉を与えている。

従って、ローマ世界の都市においていたるところで、このケントゥーリア地割は皇帝の権力を承認することに関係しているという理由が理解される。元首の責任のもとでの線引き、それは彼のアウクトリタース（権威）の物理的表明なのである。かれのリミテース（境界）は犯すべからざるものである。そして農村部に拡大すると、それはひとつの神聖な単位（まとまり）において都市とその領域をむすびつける。その単位（まとまり）はローマ市民と彼らの神々との結合（同盟）、ローマ市民と彼らの皇帝、すなわち最高の権威を持つアウグストゥスとの結合（同盟）を現実のものにする。従って、リミタティオ（地割）は皇帝の権威を「増大された」領域と結びつける内在的な（本質的な）結合（まとまり）を表している。

このことからケントゥーリア地割は象徴的に皇帝礼拝に関連することが主張されうる。

アウクトリタース（権威）と測量とのこの結びつきはわたしにどうしてもなく大和朝廷の状況を考えさる。ローマ帝国においては、帝国の道はしばしばケントゥーリア地割の線引きを決定している。ガリア・ナルボネンシス（現在の南フランス）では大変よく見られるものである。例えばまたベジエにおいて（fig.11,12）、これはまさしく七つの流通路という古代の組織に極めて類似している。この流通路は大和朝廷周辺の七つの国に渡っていた（五畿七道）。その中では帝国の道、それは奈良から出ているが、条里という様々なシステムに対して起源的な軸を代用している（例えば豊前という古代の国での、中津と宇佐神宮との間において）。

奈良では、あるはより詳しくは宇佐では、皇帝（天皇）の道は八幡神の大きな聖域の中を通っているのがよくわかる。その道はそれの方位と地形を決定している（fig.13,14,15,16）。八幡神（そしてここ

ではわたしは飯沼教授の著述を参照するのであるが) それは聖武天皇の霊、のちに応神天皇と同一視される神である(飯沼教授は神仏習合という用語を使ってる)。道と景観と聖域との間の地形上の結びつきは従って、宇佐と大和の場合において、ローマの場合のように、皇帝(天皇)の神聖な権威の明らかな主張である。

しかし、ローマに立ちかえろう。アセナ先生は非常に劇的なニームの場合についてただいま語ったが、そこでは皇帝礼拝の二つの主な聖域がアウグストゥスのケントゥーリア地割に結合されている。

ここにオランジュの場合がある(fig.17,18,19)。ケントゥーリア地割のカルドー・マクシムス(南北の基軸線)は半円形の建物に隣接していることが注目される。それはアウグステウム(アウグストゥス礼拝施設)と同一視された。すなわちそこではヌーメン・アウグスティー(アウグストゥスの神霊)、アウグストゥス帝の神的な人格が名誉づけられたのである。

同様に、ナルボンヌで、ウェスパシアヌスは、新しいアウグストゥスとして、前述のように、新たなリミタティオ(地割)をまた作った。それは彼の支配において、国家による皇帝礼拝の大きな聖域を、ガリア・ナルボネンシスの属州首都のなかに含んでいる。図像からそのことがわかる。この新たなリミタティオ(地割)をナルボンヌで作り出すときに、ウェスパシアヌスはそれ故象徴的にローマ帝国西部の最も高位の都市の一つにおいて新しい帝国の王朝の政治的・宗教的正当性を主張してる。彼はそれによって神々が彼(ウェスパシアヌス)をローマ帝国の創設者、神格化されたアウグストゥス、つまり彼の先祖の正当な後継者として認めていることを主張しているのである。

この意味でナルボンヌのケントゥーリア地割(fig.20)は従って中津と宇佐の条里の役割と同じ役割を果たしている。その中津と宇佐の条里は地理的に八幡神の大きな聖域と八幡神がその神格化された化身である大和の天皇の神聖な姿と結びついている。

それ故、わたしは言いたいのであるが、多くの点で、ローマと日本の状況は本当に驚くほど似ている。多分この類似のためにわれわれは宗教的・歴史的そして政治的相違を超えて、古代における日本の皇帝(天皇)のアウクトリタース(権威)の、象徴的あるいは現実的な本質の理解にひとつの貢献をもたらすことができるだろう。

<図版 (Figures) >

"...dès lors, je n'ai pas eu plus de pouvoir que mes collègues magistrat, mais je l'ai emporté sur eux en auctoritas (autorité)"...

「それ以来、わたしはわたしの同僚の政務官以上の権力は持たなかった。しかしアウクトリタース(権威)においてはかれらに優った。」

(Auguste, *Res Gestae Divi Augusti*, 34)

fig.1 『神皇アウグストゥス業績録』 34

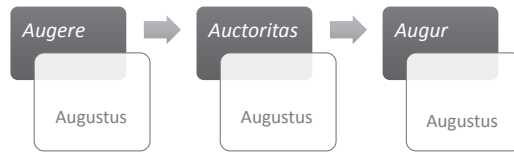
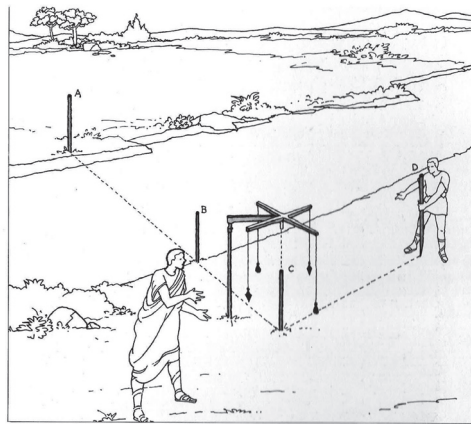


fig.2 皇帝アウグストゥスの諸権力：
 アウゲレ(増大させる) → アウクトリタース(権威) → アウグル(鳥占官)



Augure
 Et
 Poulet sacré

fig.3 鳥占官と聖なる鳥



La groma
 fig.4 測量器

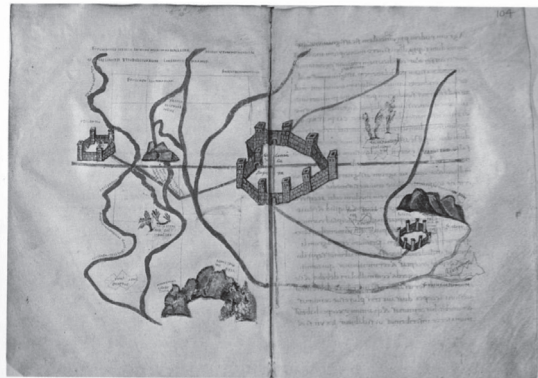
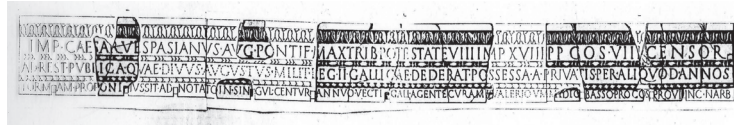


fig.5 コローニア・アウグスタ(アウグストゥスの植民市) Colonia Augusta



L'inscription de Vespasien à Orange (79 ap. J.-C.)
 fig.6 ウェスパシアヌス帝の碑文 (オランジュ、後79年)

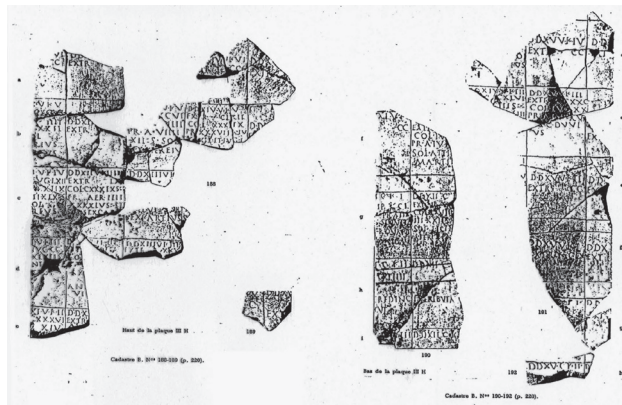


fig.7 オランジュの地割の碑文



Latinus et Mysrontius
 Auctores
 IVe s. ap. J.-C.

fig.8 ラティーヌスと
 ミスロンティウス
 測量師
 (後4世紀)



Béziers
 (France)

fig.9ベジエ
 (フランス)

Béziers

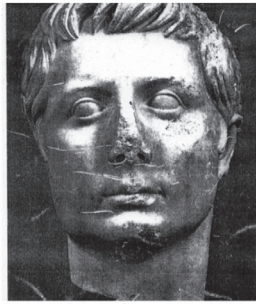


fig.10 ベジエ

Colonia
Vrbs
Iulia
Baeterrensium
コロニア
ウルプス
ユリア
バエテレンシス
(ベジエの正式名称)



Via
Domitia
fig.11
ドミティウス街道



fig.12 ベジエ

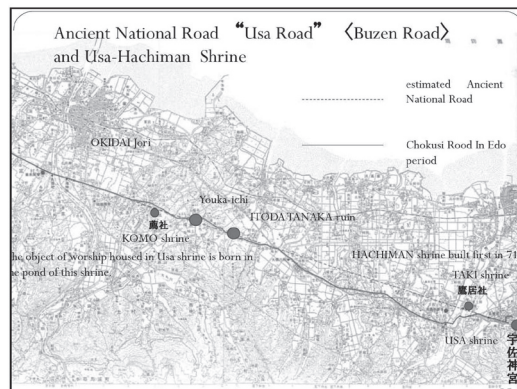


fig.13 勅使街道と古代官道推定線

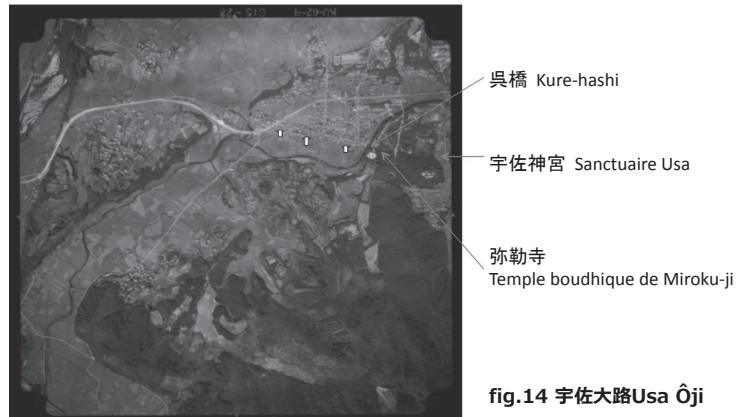


fig.15 西参道と呉橋 Nishi-sandō et Kure-hashii (au fond)

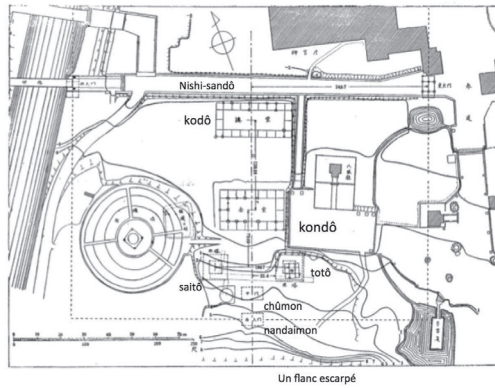


fig.16 西参道と弥勒寺の方位 Orientation de Nishi-sandō et Miroku-ji (N 16° E)

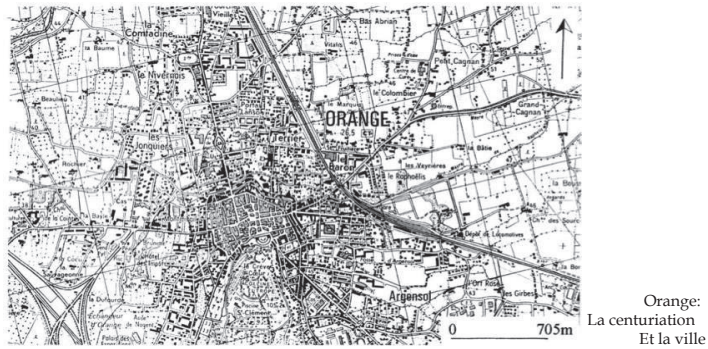
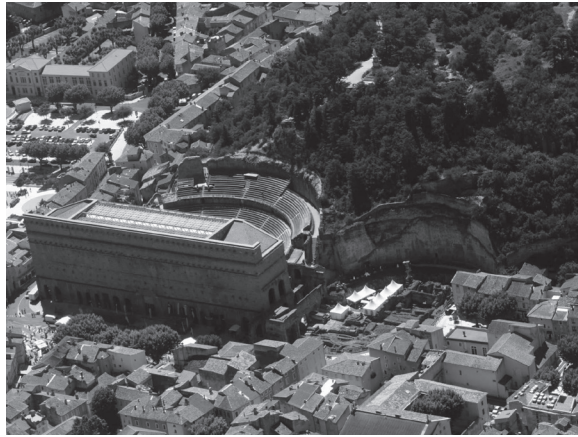


Fig. 10. Reconstitution de «Orange E» dans le centre urbain antique. Extrait de la carte IGN au 1/25 000, 3040 Ouest, Orange, 1984. (Autorisation n° 32-257).

fig. 17 オランジュ：ケントゥーリア地割と都市

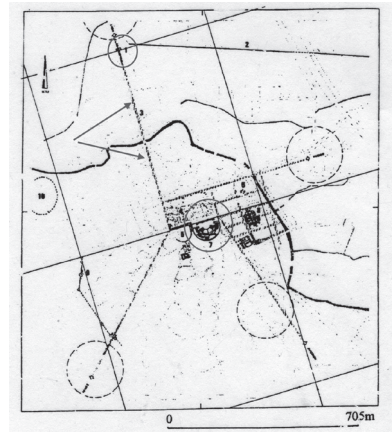
Orange:
l'augustum ?

fig.18
オランジュ
アウグステウム?
(皇帝礼拝施設)



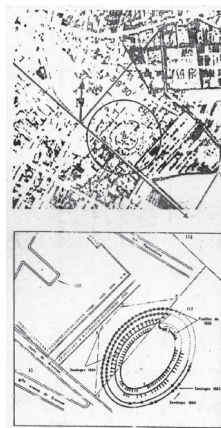
Orange : plan urbain,
Augusteum et centuriation

fig.19
オランジュ : 都市プラン
アウグステウム (皇帝礼拝施設)
とケントゥーリア地割



Narbonne :
Le complexe du culte
impérial
Provincial et la centuriation

fig.20
ナルボンヌ
属州皇帝礼拝複合施設
とケントゥーリア地割



Le cadastre, expression de l'autorité impériale romaine

Antoine PEREZ
(Université de Montpellier III)

"..dès lors, je n'ai pas eu plus de pouvoir que mes collègues magistrats, mais je l'ai emporté sur eux en *auctoritas* (autorité)". (Res Gestae Divi Augusti, 34)

Cette phrase, tirée du testament politique d'Auguste, résume à elle seule la nature du pouvoir du fondateur de l'Empire romain: héritant de l'ensemble des prérogatives et des pouvoirs des anciens magistrats de la République, Auguste va instaurer un régime politique nouveau, dans lequel toutes les institutions politiques se trouvent désormais subordonnées à la nature sacrée - ou divine de l'Empereur, en vertu d'une notion qui ne trouve d'équivalent dans aucune autre civilisation contemporaine de Rome : l'*auctoritas*.

I Les pouvoirs de l'empereur Auguste: **Augustus, Augur, Auctoritas** (fig 2)

1 - Auguste, celui qui détient l'auctoritas suprême

Le 11 janvier 27 avant J.-C., Caius Iulius Octavianus reçoit officiellement au Sénat le titre d'*Augustus* - Auguste. Ce surnom (*cognomen*), sera porté par tous les empereurs romains jusqu'à la fin de l'Antiquité: il constitue l'aboutissement ultime de la révolution qui, à la fin de la République romaine, inaugure le nouveau régime impérial et détermine sa nature.

Il est important de revenir quelques instants sur ce terme *Augustus*. *Augustus* signifie : "plein de force sacrée". Ce surnom *Augustus* veut dire en effet que l'empereur est lié aux dieux, qu'il dispose d'une autorité qui lui vient de Jupiter lui-même. Cela veut dire que désormais, tous ses actes politiques sont "augmentés" (du latin *augere*): ils ont force de loi. Or, Auguste est aussi un *augur* - un augure - : les augures étaient, dans la Rome antique, les prêtres qui connaissaient les volontés des dieux. Chaque acte politique, chaque décision était d'abord précédée par la consultation du collège des augures : on s'assurait que les dieux de la cité étaient favorables(fig.3). Auguste, donc, est désormais le premier des augures, et personne n'est mieux placé que lui pour connaître la volonté des dieux. Il dispose d'une autorité, d'un charisme supérieur, qui se dit en latin *auctoritas*. C'est ainsi que l'empereur se place au dessus de tous les autres magistrats de la République, qui eux-mêmes, en tant que nobles, ont une *auctoritas*, mais désormais inférieure à celle d'Auguste. Voilà pourquoi Auguste peut écrire, dans son testament, les Res Gestae : "*Je n'ai pas eu plus de pouvoir que mes collègues magistrats... mais je l'ai emporté sur eux en autorité*".

C'est là le fondement même du pouvoir impérial romain: tous les actes de l'Empereur sont "augmentés" par cette autorité, par ce prestige qui leur vient des dieux. Auguste est donc tout à la fois le *princeps senatus* (premier magistrat au Sénat), et le premier augure de Rome. Il monopolise

à la fois le pouvoir politique de tous les magistrats et le pouvoir religieux de tous les prêtres. Ce n'était jamais arrivé à Rome auparavant.

2 Un empereur d'essence divine

Or, **il se trouve que le Princeps Auguste est lui-même d'essence divine** : il n'est pas tout à fait un dieu, bien sûr, mais sa personne contient une parcelle de divinité. Pourquoi ?

- Pour deux raisons :

a) - Parce qu'il est le **filis adoptif de César**: or, la *gens Iulia* (la famille de César) disait-on, descendait de Vénus elle-même. Mais surtout, après son assassinat en Mars 44 av. J.-C., César avait été divinisé par le Sénat (**apothéose**) et un temple avait été construit au cœur de Rome, sur le forum (le temple de César divinisé). On dit en effet qu'au lendemain de la mort du Dictateur, une comète était apparue dans le ciel de Rome, signe que son âme avait rejoint les dieux. C'est le premier exemple à Rome de divinisation d'un

imperator après sa mort. On avait même créé un prêtre dédié à son culte, le *flamen Iulii*, à côté des prêtres dédiés au culte des trois grands dieux principaux de la religion romaine, le flamine de Jupiter, celui de Mars, et celui de Quirinus (flamen Dialis, flamen Martialis, flamen Quirinalis).

b) - parce que, on vient de le dire, en tant que premier des Augures, il connaît les volontés des dieux, et à ce titre il détient une *auctoritas* supérieure à celle des autres magistrats de la République, c'est à dire l'ensemble de la noblesse romaine. Il a donc un *imperium* supérieur, et une *auctoritas* supérieure, qui rend son pouvoir absolument incontestable, et pour toute son existence, durant toute sa vie.

II) Auctoritas et centuriation

a) *Inauguratio et Terminatio*

Depuis la plus haute antiquité, à Rome, lorsqu'on fonde une nouvelle colonie, les prêtres, qu'on appelle des augures, prennent les auspices: ils observent le vol des oiseaux pour savoir si les dieux sont favorables. Cette tradition est très ancienne: elle remonte à l'époque légendaire de la fondation de Rome par Romulus, en 753 av. J.-C. Selon la Tradition littéraire, Romulus monta au sommet du mont Palatin, sur un *templum* augural, c'est à dire une terrasse carrée consacrée au dieux et orientée selon l'ordre de l'univers – le terme appartient à la même sphère sémantique que le *temenos* grec. De cet endroit, le *rex-augur* traça symboliquement les deux axes de la future Rome à l'aide du *lituus*, le bâton de l'augure. Des siècles plus tard, les magistrats romains – héritiers collégiaux de l'*imperium* du *rex* - répètent le même geste lorsqu'ils fondent une colonie, c'est à dire une

extension de Rome. On décide alors du *locus gromae*, c'est à dire de l'endroit précis où on mettra en station la *groma*, l'équerre d'arpentage grâce à laquelle on va créer la centuriation. Et cette opération se fait, disent les textes, *auspicaliter*, c'est à dire par la prise des auspices, qui se fait

bien entendu sous la responsabilité des augures. On pratique alors la quadripartition (= diviser en quatre parties) du ciel et de la terre, à partir de cette terrasse carrée qui a été religieusement "inaugurée" (*inauguratio* en latin).

Il est important de préciser que l'instrument utilisé par le prêtre la *stella* est une sorte de croix à quatre branches, qui représente les quatre grandes directions de l'univers. C'est un instrument semblable, une équerre à quatre branches orthogonales, qu'utiliseront plus tard les arpenteurs qui construisent le nouveau cadastre (*Jôri*) de la cité ainsi fondée(fig.4). On constate que les directions déterminent l'orientation des édifices sacrés: autels, temples et sanctuaires. Les deux opérations, la *limitatio* et l'*inauguratio*, ont donc bien une origine commune qui se perd dans la nuit des temps.

Les limites primordiales sont donc tracées dans un sol qui a été consacré aux dieux, c'est à dire, comme on l'a dit, un *templum*: c'est pourquoi elles sont sacrées et inviolables. Une ancienne légende attribuée aux Etrusques et rapportée dans le *corpus* des *agrimensores* (c'est à dire les textes qui nous parlent de la science des cadastres) affirme que *Jupiter Terminus*, "Jupiter des limites", punira de mort ceux qui osent déplacer les bornes et les frontières et violer ainsi la *dignitas* ("dignité") des limites. En effet, celui qui ignore les limites fait retomber le monde dans la barbarie, c'est à dire dans un état antérieur à l'existence de la Cité et de ses lois: en quelque sorte la préhistoire.. C'est pour cette raison que lorsque les arpenteurs tracent les limites du cadastre, ils pratiquent toujours un sacrifice dans la tranchée de fondation de la limite, un sacrifice en l'honneur du dieu Terminus, le dieu des limites et des frontières, celui qui garantit le caractère éternel des frontières de la cité et de l'Etat.

B) Auguste, le premier *finitor* (arpenteur)

Or, il se trouve que l'Empereur romain, je le répète, est lui-même le premier des augures: en effet, en l'an 12, à la mort de son dernier titulaire républicain, Marcus Aemilius Lépide, l'Empereur est devenu à vie Pontife Suprême (*Pontifex Maximus*). A ce titre, il dirige tous les collègues sacerdotaux de Rome, et notamment le collège des augures.

Auguste donc, à partir de Janvier 27 av J.-C., en tant qu'Augure suprême, devient **le fondateur symbolique des toutes les cités de l'Empire romain**. Et toutes les cités de l'Empire romain ont été dotées d'une centuriation. **Auguste est donc de fait le premier finitor, le premier arpenteur. Toutes les voies et les limites de la centuriation sont dotés d'une dignité (*dignitas en latin*), qui expriment, sur tous les territoires de l'empire, son auctoritas**(fig.5).

Un document très célèbre en France illustre encore ce lien entre l'*auctoritas* et la création de la

limitatio (Fig.6 et 7)

Une inscription (découverte en 1959) mentionne en effet qu'en 75 ap. J.-C., l'empereur Vespasien a rétabli le cadastre de la colonie d'Orange, fondée par Octave-Auguste (fig.6). Or l'empereur Vespasien est le fondateur de la deuxième dynastie impériale romaine: il n'appartenait pas à la famille d'Auguste, puisque le dernier descendant d'Auguste, l'empereur Néron, était mort. Pour devenir empereur, Vespasien a fait édicter une loi sur son *imperium* (*lex de imperio Vespasiani Augusto*). Cette loi sacrée, votée par le Sénat de Rome, stipule qu'il hérite de l'*auctoritas* du divin Auguste, qui devient donc son ancêtre direct. Il est donc "le nouvel Auguste". Donc, il peut maintenant agir pour tracer de nouvelles limites, ou pour rétablir les anciens cadastres en sa qualité d'*Auctor*, comme le montre l'inscription d'Orange.

Cette particularité de la position impériale se voit encore à la fin de l'empire romain, des siècles après le règne d'Auguste. *Auctores*: c'est ainsi que les textes antiques appellent les hauts fonctionnaires qui dirigent les opérations d'arpentage sur le territoire des cités de l'empire romain. On les dénomme ainsi car ils détiennent par délégation l'*auctoritas* suprême de l'Empereur, pour remettre de l'ordre dans les cadastres anciens, ou pour en créer de nouveaux. Dans l'antiquité tardive (IVe-Ve siècles) ces hauts fonctionnaires sont parés de titres prestigieux (*Vir eminentissimus* = hommes "très éminents") Ainsi (fig.8) de cet arpenteur (*Mysrontius auctor*) qui écrit sous le règne de l'empereur Théodose (fin du IVe siècle après J.-C.)

Le cas de Béziers est parfaitement exemplaire de cette position impériale (fig.9,10). La statue d'Octave, le futur Auguste, fondateur de la *Colonia V(rbus) Iulia Baeterrensium*, était sur le *forum* : c'est lui qui a créé la *limitatio* coloniale, et ce portrait soumis à la dévotion des citoyens de Béziers honore déjà, avant même qu'il ne fût Auguste, le caractère providentiel et divin du *futur princeps*.

On comprend donc pourquoi, partout dans les cités du monde romain, les centuriations participent de l'affirmation du pouvoir impérial: tracées sous la responsabilité du Prince, elles sont la manifestation physique de son *auctoritas*. Leurs *limites* sont inviolables, et, en s'étendant à la campagne, elles associent la ville et son territoire dans une unité sacrée qui réalise l'union des citoyens romains et de leurs dieux, l'union des citoyens romains et de leur Empereur, Auguste, celui qui possède l'autorité suprême. **Partant, la *limitatio* exprime donc l'unité intrinsèque associant l'autorité impériale au territoire "inauguré".**

C'est pourquoi on peut affirmer que la centuriation participe symboliquement au culte impérial.

Or, ce lien entre *auctoritas* et arpentage me fait irrésistiblement penser à la situation de l'empire du Yamato: dans l'empire romain, la voie impériale détermine souvent le tracé de la

centuriation: on le voit très bien en Gaule Narbonnaise, par exemple encore à Béziers (fig.11,12). C'est vraiment très comparable à l'organisation antique des Sept Circuits qui traversaient les sept provinces périphériques de l'empire du Yamato (*Goki-shichidō*), dans lesquelles la voie impériale, issue de Nara, tient lieu d'axe générique aux divers systèmes *Jōri*. (par exemple dans la province antique de Buzen, entre Nakatsu et le sanctuaire d'Usa).

Or, à Nara, ou plus précisément à Usa, on voit bien que la voie impériale pénètre dans le grand sanctuaire d'Hachiman, dont elle détermine l'orientation et la topographie (fig). Hachiman (et je me réfère ici aux écrits du professeur Inuma), Hachiman est une divinité qui fut identifiée à l'âme de l'Empereur Shōmu, et plus tard, Ujūin (le professeur Inuma utilise le terme de syncrétisme).

Le lien topographique entre voie, paysage et sanctuaire sont donc, dans le cas d'Usa et du Yamato, comme dans le cas de Rome, une affirmation évidente de l'autorité sacrée de l'empereur.

Mais revenons à Rome. Martine nous parlera tout à l'heure du cas de Nîmes, très spectaculaire, où les deux principaux sanctuaires du culte impérial sont liés à la centuriation d'Auguste.

Voici le cas d'Orange (fig.17,18,19) on remarque que le *Kardo maximus* de la centuriation jouxte un édifice semi-circulaire qui a été identifié comme un *augusteum*, c'est à dire un temple où l'on honorait le *numen Augusti*, la personnalité divine de l'empereur Auguste).

De même, à Narbonne, Vespasien, le "nouvel Auguste", comme on l'a vu, a créé aussi une nouvelle *limitatio*, qui englobe dans son emprise le grand sanctuaire du culte impérial d'Etat, dans la capitale de la province de Gaule Narbonnaise, comme on le voit sur la figure.

En créant à Narbonne cette nouvelle *limitatio*, Vespasien affirme ainsi symboliquement, dans une des plus prestigieuses cités de l'Occident romain, la légitimité politique et religieuse de sa nouvelle dynastie impériale. **Il affirme par là que les dieux le reconnaissent comme le successeur légitime du fondateur de l'Empire, le divin Auguste, son ancêtre.**

En ce sens, la centuriation de Narbonne joue donc un rôle identique à celui du *Jōri* de Nakatsu et d'Usa, topographiquement liés au grand sanctuaire d'Hachiman et à la figure sacrée de l'Empereur du Yamato dont Hachiman est la personnification divine.

Pour conclure, je dirai que, à de nombreux égards, les situations romaine et japonaise sont vraiment étonnamment comparables. Peut-être cette comparaison nous permettra t'elle - au delà des différences religieuses, historiques et politiques - d'apporter une contribution à la compréhension de la nature - symbolique ou réelle - de l'*auctoritas* impériale japonaise dans l'antiquité.

ニーム

— 元首とケントゥリア地割 —

マルティヌス・アセナ（モンペリエ第三大学）

坂井 利佐子 訳（別府大学）

ニームでは、主要な古代ローマ遺跡、なかでもアウグステウム（*Augusteum*皇帝礼拝施設）、すなわちフォンテーヌ公園全体、皇帝の息子たちを祭った神殿、メゾン・カレは、首尾一貫した都市計画だけでなく同様にこの古代ローマ都市の大部分に広がるケントゥリア地割にも関与している。実際、この都市における元首の影響はとて大きく、最近まで歴史叙述にはニームにおけるアウグストゥスのローマ植民市創建という見解が採用されていたほどである¹。アウグストゥスとその統治の始めから行った都市空間の再建の中に、元首とその家族の栄光に捧げられた記念建造物群を含むという、このニームの置かれた状況を軽視するわけにはいかない。なぜならそれは、都市の創建とは言わないまでも、少なくとも都市の再構成として理解されるのであるから。確かに、ローマ風の新しい装い、新たなケントゥリア地割、そして威厳に満ちた囲壁という冠（環状の囲壁）を植民市に与えていて、これは初代皇帝の大盤振る舞いと解釈されるであろう。ところがこうした改造はある特別な時期に行われているのである。なぜならその時再構成されたのは、それ以降「アウグストゥスの（*Augusta*）」という形容辞を冠するコロニア・ネマウス（*Colonia Nemausus*）だけでなく、ローマ帝国の政治的土台全体でもあるのだ。このように、この新しい権力が確立される地形的場面に独自の焦点を当てることで、ニームの形態及び過去の内戦と平和な時代への回帰の約束の間で揺れ動いた状況を検証するという、二重の意義が認められるのである。

コロニア・ネマウスにおいてアウグストゥスによって展開された記念建造物の計画については、アウグステウムとしてフォンテーヌ公園の泉の建造物の解釈を提案した、ピエール・グロ（Pierre Gros）の注目すべき研究と記述がある²。とてもよく保存されており、忠誠心を表すための、そして皇帝礼拝の最初の表出である儀礼を広めるための、崇高なこの建築群全体の編成を理解することが例外的ではあるが可能だ³。泉の源泉である池はエクセドラ（半円形の長い座台）で装飾され、そこには彫像群もしくはネマウス神の祭壇の土台でありえたであろう四角い平面の建築物が張り出している⁴。その池から水は、ニンファエウム及び、おそらく何よりもローマとアウグストゥスへ捧げられた祭壇の方へと導かれており、それらはこの建築群の中核をなしている⁵。この建築群では、その役割はあま

1 この問題に関しては、D. Roman, "Auguste et la colonie de Nîmes : remarques à propos d'une dichotomie", dans *Les villes augustéennes de Gaule, Colloque d'Autun*, 6, 7, 8 juin 1985, Autun, 1991, p. 35-39.を参照せよ。

2 P. Gros, "L'Augusteum de Nîmes", *Revue archéologique de Narbonnaise*, 17, 1984, p. 123-134.

3 *Ibid.*, p. 126.

4 *Ibid.*, p. 128. P.グロはM.トレリが彼に提案した第一の仮説を第二の仮説よりも支持している。

5 *Ibid.*, p. 123,-134., 同様に、A. Veyrac et J.-M. Pène, *L'Augusteum de la fontaine de Nîmes : étude*

りよく分かっていないのだが、アーチ型の広間（ディアナ神殿）は、二本の外陣を伴った三列柱廊によって、皇帝たちに敬意を表して行われる催し物のために用意された劇場へとつながっている（fig.1）。ピエール・グロは、碑銘に関する関係資料には60件近い碑文があり、帝政前期における「場所」の重要性を示しているとしている。碑文の多くは、都市の名祖である泉の神ネマウスへの奉獻であり、「この建築群の皇帝礼拝への漸進的な適合」を隠さず示している⁶。

皇帝の息子たちを祭った神殿（メゾン・カレ）はアウグストゥスの統治下のものとして知られるが、都市の中央広場（*forum*）におけるその建立は、ローマとアウグストゥスに結びつく祭儀の導入に応えるものである⁷（fig.2）。

他方、ジャン・ブノワ（Jean Benoit）⁸が明らかにしたように、そしてピエール・グロが喚起するよう、これらの記念建造物には独自の構想がある。すなわち、それらが方位を共有する都市構造である⁹（fig.3）。この都市構造は都市の中心部全体を占め、ニームの現在の都市計画の中で非常によく保存された遺跡群は、この古代都市の歴史における決定的な関与があったことを明らかにしている。この都市構成と囲壁との間で維持された地形学的なコンタクトは、ジャン・ブノワに、（ニームの街と囲壁）この二つの整備は同時代のものであったと考えさせた¹⁰。より正確に言えば、いわゆるアウグストゥス門の奉獻碑文は、（紀元前16年から15年に）護民官職権8回目であった元首が「植民市（*colonia*）に門（*porta*）と囲壁（*murus*）を与える（…*portas murosque coloniae dat*）」と記している。この年代が工事の始まりを示すのか、完了を示すのかは分からないのだが¹¹。

この都市空間の構造化はすでに傑出しているが、アウグストゥスの都市計画の構想はそれ自体が、「ニームB型」またはニームの地割網「B」の名で知られ、名祖の古代都市の大部分に広がるケントゥリア地割の中心にあるということに着目して考えをさらに推し進めることができる¹²。

20 × 20 アクトゥス（*actus*）のこのケントゥリア地割は、N 12° Wに（708 - 709 mのかなり大きな尺度として）計測される¹³。北部ではケントゥリア地割は多かれ少なかれニーム市の北にあるガルドン

archéologique du bassin de la source et de la canalisation souterraine ouest, *Revue archéologique de Narbonnaise*, tome 27-28, 1994, p. 121-163を参照せよ。

6 *Ibid.*, p. 129.

7 R. Amy et P. Gros, *La Maison Carrée de Nîmes*, XXXVIII suppl. à *Gallia*, 2 vol., Paris, 1979.

8 J. Benoit, "Nîmes : études sur l'urbanisme antique. Problèmes de méthode et résultats", *Bulletin de l'Ecole antique de Nîmes*, 1981, 16, p. 69-90. Il s'agit de la structure rouge de Jean Benoit.

9 P. Gros, *op. cit.*, p. 127.

10 J. Benoit, *op. cit.*, p. 88.

11 CIL XII, 3151. この点に関しては、P. Gros, "Rapport de synthèse", dans *Les enceintes augustéennes dans l'Occident romain, Actes du colloque international de Nîmes, (IIIe congrès archéologique de Gaule méridionale), 9-12 octobre 1985*, Nîmes, BEAN., nouvelle série, n° 18, 1985-1987, p. 159.を参照せよ。

12 アウグストゥスの時代のユゼス（Uzège）の行政上の地位は分からないが、領域はオランジュのケントゥリア地割（オランジュB型）の管轄であったと思われる。M. Assénat, *Cadastres et romanisation dans la cité antique de Nîmes*, *Revue archéologique de Narbonnaise*, 2006, Suppléments 36, p. 159 sq.

13 このケントゥリア地割に関する理論上の復元案に関する歴史叙述については、M. Assénat, 2006, *op. cit.* p. 33.を参照せよ。現在、このシステムの方位および、ニームの都市でわかっている他の地割網との可能性のある関係をさらに明確に

川と《ガリーグ軍营地(Camp des Garrigues)》の経度にほぼ沿っている。東部ではこの地割の網はローヌ川まで広がっている。西部ではその境界線はレズ川上、もしくはやや手前に位置する¹⁴。「ニームB型」の最も南の地割の痕跡については、サン・ジル地方に位置づけられるであろう(fig.4)。このように、ニームの都市の領域の大部分がこの整備に関係しているのである。このケントゥリア地割は、その領域の中のニームとアムブルスム(Ambrussum)間のドミティウス街道上にいくつかの区画を数えることに言及しておこう¹⁵。Fig.5は、アムブルスム地方の現在の風景の中に認められる、ケントゥリア地割として方位づけられた痕跡の見取図の例である。

ローマ街道あるいは別のケントゥリア地割との周知の三角測量上の関係を示している他の多くのケントゥリア地割とは違い、「ニームB型」では、他のケントゥリア地割網との三角測量上の関係は維持されているようには見えない¹⁶。たとえその構想は測地学の基本図から免れないのはまず確かだとしても、このシステムの方がより古い遺跡の方位を再び取ったと認めるしかないことに変わりはない¹⁷。私たちの意見では、この一致は少しも偶然によるものではない。

確かに、トゥール・マーニュのふもと及びフォンテーヌ公園の泉と《ディアナ神殿》の周辺での、いわゆる《ヴィラ・ローマ》の発掘は、その土地に元々存在した、後期ヘレニズム時代の公共の建造物の存在を明らかにしたが、それはアウグストゥスの都市計画の方位を共有するものであった¹⁸(fig.6)。アウグストゥスの地割網の創設は、原初の街の整備計画を組み入れつつ拠り所としたので、この発見は元首が推し進めたローマ化政策に関する最も重要な資料となる。

しようと努めている。ミシェル・オリヴ(Michel Olive)氏の得難い専門的な支援と常に適切な助言に感謝する。

- 14 確かに、アントワヌ・ペレス氏によってレズ川流域に特定された地割“Sextantio-Lattara”は、土地区画の方位の識別を時に困難にしている。A. Pérez, *Les cadastres antiques en Narbonnaise occidentale. Essai sur la politique coloniale romaine en Gaule du Sud (Ile s. av. J.-C. - Ile s. ap. J.-C.)*, RAN, suppl. n. 29, 1995, p. 236-237.
- 15 この都市構造の記述及び関与し得る遺物については、M. Assénat, 2006, *op. cit.*, p. 33 et 101-102を参照せよ。
- 16 異論のない限りにおいて。いずれにせよ、私たちの考えでは、このケントゥリア地割の方位の優先決定は、ローマ支配以前の聖域の方位の再現であるはずである。次の脚注を参照せよ。
- 17 ローヌ川下流域の地割に関する1991年の論文の折、私たちは新たな調査により、このケントゥリア地割とニームのアウグストゥス都市計画の間の明確な関係を明らかにし、また、ジャン・ブノワが「赤」と呼ぶところの都市構造と農村のケントゥリア地割との有機的な関係を明らかにすることで理論上の復元を提案することができた(M. Assénat, "Contribution à l'étude des cadastres romains de la basse vallée du Rhône : nouveaux apports et problèmes de chronologie", RAN, 24, 1991, p. 44-45)。ピエール＝イヴ・ジャンティが行ったサン・ローラン通りの発掘により、紀元前5世紀から同2世紀までと、紀元前1世紀の前半からアウグストゥスの時代までの居住区域が明らかになった(P.-Y. Genty *et alii*, "Recherches sur l'habitat romain à Nîmes. Les fouilles de la rue Saint-Laurent", BEAN, 15, 1980, et notice "Rue Saint-Laurent, côté sud, à l'angle de la rue Florian", dans *Archéologie à Nîmes, 1950-1990...*, p. 80-82)。研究結果は、ローマ支配以前の平地の都市の存在と、あらゆる建造物が数世紀の間を通して、そしてアウグストゥスの時代まで、アウグストゥスの都市の方位に似た一定の方位を保持していたことを予想させるものであった。紀元前1世紀の半ばより少し前に建てられ、紀元の変り目頃に再構成された家屋の遺跡の予測される方位は、NL 16°と18° W (± 2°)の間、あるいはNG 14.4°と16.4° Wの間に含まれるという傾向を示していた(M. Monteil, *Nîmes antique et sa proche campagne*, MAM, Lattes, 1995, p. 273-279)。今日私たちの証明においてこの例を取り上げるのは、それを放棄するのと同じくらいに難しいように思われる。いずれにせよ(後述の)《ヴィラ・ローマ》の敷地の発見は、私たちの最初の結論と方向性を同じくするものである。
- 18 Cf. E. Guillet *et alii*, "Un monument à portique tardo-hellénistique près de la source de la fontaine, à Nîmes (Gard)", DAM, 15, 1992, p. 57-89, et L. Sauvage, "Le sanctuaire protohistorique de la Fontaine à Nîmes, à la lumière des découvertes récentes", DAM, 15, 1992, p. 112-116.

フォンテーヌ公園の泉は、カヴァリエ丘のふもとにある湧出地下水の近くに設置され、水に結びつけられた、かなり古くからある神聖な領域である。紀元前2世紀の終わりか同1世紀の間に年代が推定される三つの碑文があり、その内の一つには《*namausiques*の母たち》と記載されているのだが、これらの碑文は、少なくとも当時から泉の周辺は整備の対象であったことを示している¹⁹。同様に、《ヴィラ・ローマ》の敷地の発掘でポルチコ（柱廊）を持つ建物の存在が明らかになったが、それは1世紀の初めに年代が推定され、それに先立つ原史時代（紀元前5世紀）の遺構と同じように方位づけられていた。ところが、アウグストゥス時代の建築家によって取り入れられ称揚されたのはこの区域の方位である。ローラン・ソヴァージュ（Laurent Sauvage）は、至極明快なある論文において、「紀元前1世紀の終わり頃のアウグステウムの方位の中にあるポルチコを持つ記念建造物の建築方位の永続化は、その記念建造物は取り壊されて壮麗なテラスに取って代わられたのだが、アウグストゥスの記念建造物群より前の時代の他のいくつかの大きな建築物の存在に由来しており、それらはポルチコを持つその記念建造物と同じ都市計画及び同じ方位に対応するものである」と言及している²⁰。

トゥール・マーニュへ導く壮大な傾斜路も同様に方位づけられている²¹。傾斜路はフォンテーヌ公園の複合施設と原史時代の囲壁のこの大きな塔をつなぐもので、トゥール・マーニュはアウグストゥス時代にこれ見よがしに装いを新たに、アウグストゥスの囲壁装置を見下ろし、数キロメートル先に街の存在を知らしめた。

ピエール・グロは、キュレネのカエサル神殿（*Caesarium*）あるいはエフェソスのセバステイオン（*Sebasteion*）に言及して、「ともかくこれらの例は、建築空間の段階的な併合政策の特性を示している。だからと言って、エフェソスのセバステイオンが以前の機能をなくすわけではなく、古くからある祭礼は、それが価値を持って存在する間はそのアイデンティティーを失うことなしに、新たな宗教的組織に同化したのである。実を言えば、この新たな宗教的組織を、都市共同体にとっての自然発生的な中心地と伝統的に見なされていた場所と建築物とに近接させることが目的である」ことを想起させた²²。

より正確な年譜のデータを取り入れると、元首はかなり早い段階で都市の整備に携わったことが分かる²³。例えば、アウグストゥスの第九コンスル年（紀元前25年）の年代のある二つの奉献物は、泉の

19 L. Sauvage, « Le sanctuaire protohistorique de la Fontaine à Nîmes, à la lumière des découvertes récentes », *Documents d'Archéologie Méridionale*, vol. 15, 1992. Espaces et monuments publics protohistoriques de Gaule méridionale. p. 113.

20 *Ibid.*, p. 114.

21 P. Varène, "La Tour Magne et l'Augusteum de Nîmes", *Revue archéologique*, 1, 1987, p. 91-96.

22 P. Gros, *op. cit.*, p. 124-23.

23 CIL, XII, 3148 et 3149. 1753年、ジャン＝フィリップ・マレシャルは、手の込んだ作りの二重階段の土止め擁壁の中にその二つのブロックを戻したが、それらは王権の象徴と混同されて、革命の際に壊された。H.-Adolphe Pieyre, *Histoire de la ville de Nîmes depuis 1830 jusqu'à nos jours*, Nîmes, 1886-1887によれば、ブロックに刻まれたテキストは1850年に復元された。この点については、A. Veyrac et J.-M. Pène, "L'Augusteum de la Fontaine de Nîmes : étude archéologique du bassin de la source et de la canalisation souterraine ouest", *RAN*, 27-28, 1994-1995, p. 166-167.を参照せよ。

二つのエクセドラの整備に関与している。メゾン・カレの領域内に位置づけられる広場で、紀元前1世紀の最後の15年間（紀元前25年と同10年の間）に年代が推定される初期の公共建築集合体の遺跡が同様に発掘され²⁴、それらはアウグストゥスの都市計画の方位を共有している。当初の記念建造物の計画は頓挫したようで、時代の変わり目にあって、その建造は完成せず、紀元5年以降に皇帝の息子たちに捧げられたメゾン・カレの建設に取って代わられた²⁵。これらの指標は、元首の統治時代の最初の頃にこの計画が都市の中心部で実施されたと考える余地を残す、二つの時期の下限、(*deux termini ante quem*) となっている。したがって、原史時代あるいは少なくとも紀元前1世紀の初めの伝統において定着した、より昔の方位の選択が意味をなすのかということが問題になってきた。

随分前から歴史叙述は、新しい政治体制となったところの基盤を放棄する元首の戦略は、伝統と共和政への崇敬の再興に支えられたが、それはまるで、名誉は回復したが、彼の権力だけのためにその実体を排除された体制の再興に支えられたかのようなのである、と指摘した。

泉への愛着の表明という慣習は、ローマとアウグストゥスへの崇敬を、その地に固定された原史時代の儀礼の中にしっかり定着した信仰を重ねることで、フォンテーヌ公園の聖域に取り入れられた。すなわち、場所の美化及び、元首の按察官たちが、宗教的、政治的、そして制度化した側面において周知の計画に従って伝統を敬うようになったという事実がそこに付け加わった。しかしここでは、次のことが特に重要である。つまり、誕生して間もない皇帝礼拝が、どのようにしてその土地だけでなく、同様に地形測量にも組み込まれたのかが分かるということであり、地形測量のマトリックス（基本型）、つまりケントゥリア地割は、比較的古いローマ時代の信仰の実践に基づいていることである。おそらく初めて、（他のところで同時に試みられたことを意味するものではないが）、私たちは、ケントゥリア地割によって限定される場所における神聖化された場所の形成を検証することができた。多少の解説が必要ではあるが。

もともと境界の画定 (*limitatio*) はそれ自体、(占いにより場所の境界を決める) 宗教的な慣行 (*templum*) である²⁶。それは政務官あるいは神官によって執り行われ、神々の絶対的な秩序に従って、そして市民のやはり絶対的な秩序に従って、地上の場所を調整する。征服に乗じて便利に利用され普及した境界確定は、統治とローマ化のためのひとつの有効な手段である。それが都市と田園地帯を結ぶ方法がどんなものであろうと、境界の画定は何よりもまず市民の大建造物 (*monument*) なのである。境界確定は、この「大建造物 (*monument*)」という呼称においてはあまり研究されていないのだが²⁷、それでもやはり統一的な建築であり、その構想は、序列化された要素を、調和のとれたある全体に調整するべく的確な均衡と秩序に應えるものである。さらには、ケントゥリア地割は、実際に効果的に、領土全体において大建造物全体をうまく配分し、ローマ文化の価値を都市の境界線まで拡散することで、大建造物がケントゥリア地割と同じ資格でマニフェストとなる価値の浸透を左右する。

例えばオランジュの土地台帳Bの地図が示すように、境界の確定は、《カードを切り》(新たな試みを可能にし)、行政の、政治の、文化の、財政の、そして《知覚神経の(方向感覚の)》、新しい枠組み

24 M. Célié *et alii*, "Enceintes et développement urbain : Nîmes antique des origines au I^{er} s. ap. J.-C.", JRA, 7, 1994, p. 391. この遺跡は、西方向では、少なくとも三側面に面して開かれた空間が取り囲み、南方向には、連なるおよそ5部屋に開かれたポルチコのある回廊があり、東方向には、建物へと通じていると思われる廊下がある。

25 Cf. CAG, Nîmes, 171-179, p. 278-296, et CIL XII, 3156.

26 K. Lachman, Frontin 27 ; 13-17; 26, 1-10. A. Pérez, *op. cit.*, p. 66-73.

27 M. Assénat, 1991, *op. cit.*, p. 48.

を確立することを可能にし、そこでは、先在の社会構造をすっかり改編することで、経済的生産が行われるのである。オランジュでは、トリカスティニー族 (les Tricastins) の人々は消え去ることなしに彼らの領土は地割Bに再編成されたが、彼らはそれ以降、魅力に欠ける土地に閉じ込められ、征服されて租税を強制された民族の運命を知ることとなる²⁸。

ニームにおいて、このような骨組みの中にアウグステウムを組み込むことは、ある新しい要素を、その同化を促し、そしてそのメッセージによる都市の浸透を促すある仕組みの中に統合させることのように考えられるに違いない。その時から皇帝礼拝は市民の間で非常に重要になるであろう。もちろんこの指摘は、「アウグストゥスの平和の祭壇 (アラ・パキス・アウグスタエ *Ara Pacis Augustae*)」という華やかなマニフェストを、皇帝のメッセージを美化するものとみなし、そして祭壇の植物装飾の中にその象徴的な意味を含むアウグストゥスの政治的革新を美化するものとみなす、ジル・ソロン (Gilles Sauron) の研究と対比されるであろう。フラミア街道のこの記念建造物とほぼ同時代のメゾン・カレは意味深くアカンサス葉飾りのフリーズを示したが、それは《平和》の祭壇のモデルを複製し拡散することとなる²⁹。

以上述べたように、ニームにおける、街の中心の歴史的建造物、アウグストゥスの都市計画、そしてケントゥリア地割を結ぶ関係を検証したことから、これらすべての関係が都市の同様の政治的な受容と関連していたことが明らかになった。それゆえ、皇帝礼拝に精神と肉体を与えた地形学的文脈の中で、皇帝礼拝の導入を復元することが重要である。私たちはここに、いかにして新たな考え方が、慣習の果てに、そして新たな黄金時代の到来を考慮して、そのメッセージとその(都市)モデルを響き渡らせたかを見るのである。原史時代およびアウグストゥス時代以前の文化的かつ地形測量の構造におけるアウグステウムの適合の重要性をすでに指摘したが、本稿での、ケントゥリア地割の枠組みにおけるアウグステウムの同化の解釈は、同じくジル・ソロンの言葉を借りれば、《定着の変遷についてのひとつの要素》となるのである³⁰。

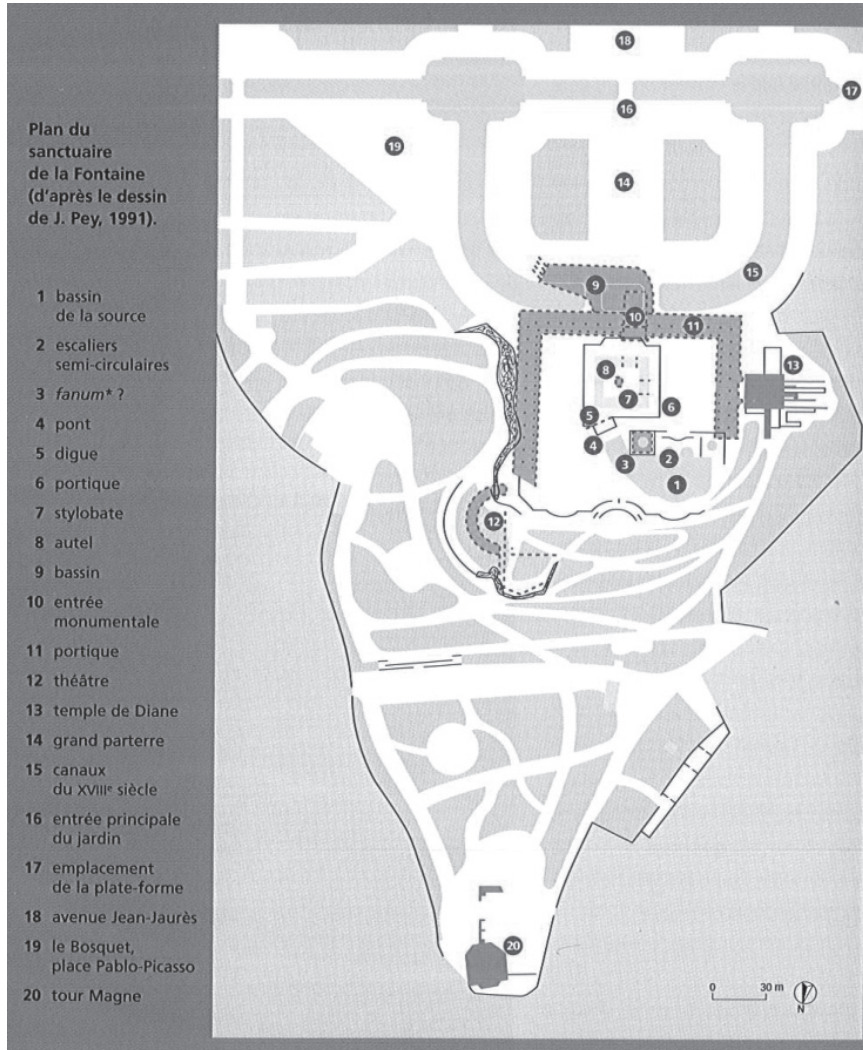
28 A. Piganiol, *Les documents cadastraux de la colonie romaine d'Orange*, Gallia, suppl. n. XVI, 1962.

29 G. Sauron, *L'histoire végétalisée, ornement et politique à Rome*, Rome, 2000, p. 123.

30 *Ibid.*, p. 223.

<図版 (Figures) >

fig.1 J.ペイによるアウグステウム図 (1991年のJ.ペイの図に基づくフォンテーヌ公園の地図)



- 1. 水源の池 2. 半円階段3. (古代ローマ時代の) 礼拝所?4. 橋5. 堤防6. ポルチコ (柱廊)
- 7. スタイロバート (ステュロバテス) 8. 祭壇 9. 池 10. 建造物の入り口 11. ポルチコ (柱廊)
- 12. 劇場 13. ディアナ神殿 14.大庭園 15. 18世紀の運河16. 庭園の正面入り口 17. (建物の) 基壇跡
- 18. ジャン・ジョレス大通り 19. 植え込み、パブロ・ピカソ広場 20. トゥール・マーニュ

fig.2メゾン・カレ

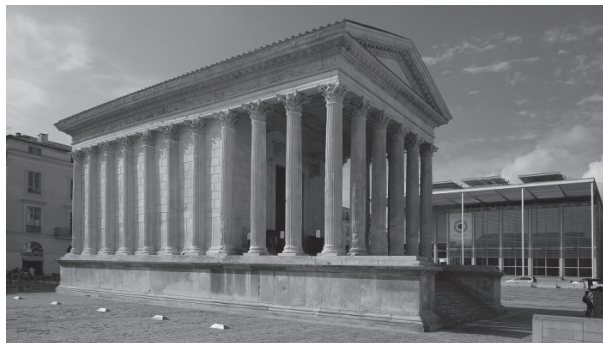


fig.3ジャン・ブノワの「赤」の都市構造



fig.4地割網「ニームB」の分布図

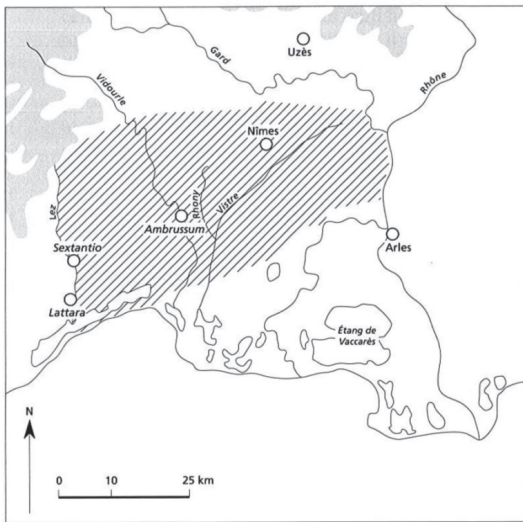
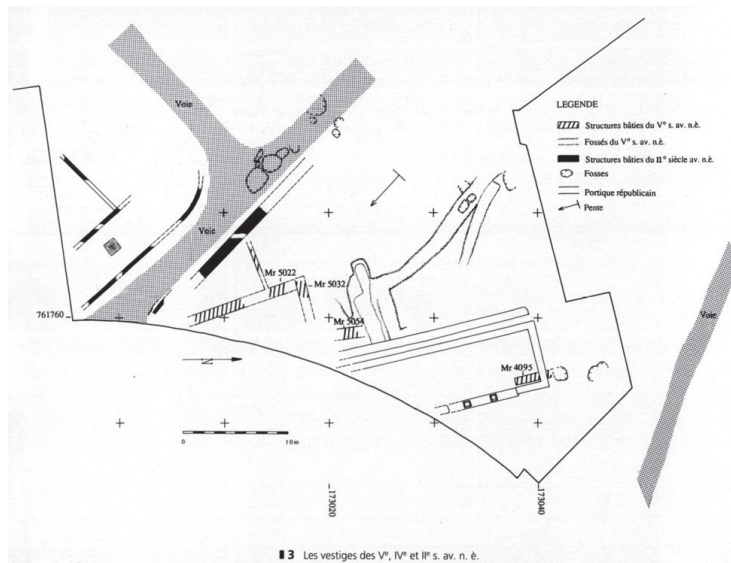


fig.5アムブルスム地方の地割網「ニームB」の理論上の復元



fig.6 E.ギエ、その他による「ヴィラ・ローマ」の発掘



Nîmes, le Prince et la centuriation

Martine Assénat (Université de Montpellier III)

À Nîmes les principaux monuments romains, en particulier l'*Augusteum*, c'est-à-dire l'ensemble du jardin de la Fontaine, le temple des Princes de la Jeunesse ainsi que la Maison Carrée, participent non seulement d'un plan d'urbanisme cohérent mais également d'une centuriation qui s'étend sur une grande partie de la *civitas* classique. L'empreinte du Prince marque de fait à ce point la cité que, jusqu'à une date récente, l'historiographie retenait l'idée de la fondation à Nîmes d'une colonie romaine augustéenne¹. Cette situation, qui implique dans la reconstruction de l'espace civique opérée par Auguste dès le début de son règne des monuments à la gloire du Princeps, et de sa famille, est loin d'être anodine puisqu'elle a été conçue si ce n'est comme une fondation, tout au moins comme une refondation de la cité. C'est bien ainsi, en effet, que l'on interprètera les prodigalités du premier des empereurs, dotant la colonie d'une nouvelle parure urbaine, d'une nouvelle centuriation et de sa majestueuse couronne de murailles. Or ces transformations interviennent à un moment très particulier, puisqu'alors, ce n'est pas seulement la Colonia Nemausus qui est refondée, ornant désormais sa titulature de l'épithète Augusta, mais l'ensemble du socle politique de l'Empire de Rome. On comprend ainsi le double intérêt qu'il y a à observer la configuration nîmoise et les mouvements de bascule qui s'opèrent là aussi entre l'hier de la guerre civile et les promesses de retour vers un âge de paix, avec un focus particulier sur la scène topographique dans laquelle ce pouvoir nouveau se déclare.

Le programme monumental déployé par Auguste dans la *colonia Nemausus* a été remarquablement étudié et décrit par Pierre Gros qui a proposé d'interpréter les édifices de la source de la Fontaine comme un *Augusteum*². Très bien conservé, il est possible, et ceci est exceptionnel, de comprendre l'organisation d'ensemble de ce complexe élevé pour que s'expriment les dévotions et que se déploient les liturgies des premières manifestations du culte impérial³. Depuis le bassin de la source, orné d'exèdres, et que surplombe un édifice de plan carré qui pourrait être la base d'un groupe statuaire ou d'un autel au dieu Nemausus⁴, les eaux sont acheminées vers un nymphée et vers l'autel, sans doute d'abord dédié à Rome et à Auguste, qui

1 Pour un point sur la question voir D. Roman, "Auguste et la colonie de Nîmes : remarques à propos d'une dichotomie", dans *Les villes augustéennes de Gaule, Colloque d'Autun, 6, 7, 8 juin 1985*, Autun, 1991, p. 35-39.

2 P. Gros, "L'Augusteum de Nîmes", *Revue archéologique de Narbonnaise*, 17, 1984, p. 123-134.

3 *Ibid.*, p. 126.

4 *Ibid.*, p. 128, P. Gros préfère la première hypothèse à la seconde que lui a suggérée M. Torelli.

constituent le cœur du complexe.⁵ Dans la même composition une salle voûtée (Temple de Diane), dont on ne comprend pas bien le rôle, est reliée, par une *porticus triplex* à deux nefs, à un théâtre destiné à accueillir des jeux donnés en l'honneur des empereurs (figure 1). Pierre Gros rappelle que le dossier épigraphique, de près de soixante inscriptions, désigne l'importance du site sous le Haut-Empire : les dédicaces à *Nemausus*, dieu de la source éponyme de la cité, pour nombreuses qu'elles soient, ne masquent pas « l'appropriation progressive du complexe au culte impérial »⁶.

À l'introduction de rites associés à Rome et à Auguste répond l'élévation, sur le *forum* de la cité, du temple des Princes de la Jeunesse (Maison Carrée) dont on sait qu'il ressortit à la politique dynastique d'Auguste⁷ (figure 2).

Par ailleurs, comme l'a bien établi Jean Benoit⁸, et comme le rappelle Pierre Gros, ces monuments participent d'un plan particulier, à savoir une structure urbaine avec laquelle ils partagent leur orientation⁹ (figure 3). Cette structure urbaine occupe tout le centre-ville et les vestiges très bien conservés dans le plan contemporain de Nîmes indiquent qu'il s'est agi d'une intervention déterminante dans l'histoire de la ville antique. Les contacts morphologiques entretenus entre ce plan et l'enceinte laissaient penser à Jean Benoit que les deux aménagements étaient contemporains¹⁰. Plus précisément, l'inscription dédicatoire de la porte dite d'Auguste, indique que le *Princeps*, dans sa huitième puissance tribunicienne (16-15 av. J.-C.), " ... *portas murosque coloniae dat* ", sans que l'on puisse savoir si cette date marquait le début ou l'achèvement des travaux¹¹.

Cette structuration de l'espace est déjà remarquable, mais nous pouvons aller plus loin encore en remarquant que ce plan d'urbanisme augustéen est lui-même au cœur d'une centuriation, connue sous le nom de « Nîmes B » ou réseau « B » de Nîmes, laquelle se déploie sur une grande partie de la cité antique éponyme¹².

Cette centuriation de 20 x 20 *actus* est mesurée à N 12° W (pour un module assez grand de

5 *Ibid.*, p. 123-134., et aussi A. Veyrac et J.-M. Pène, L'*Augusteum* de la fontaine de Nîmes : étude archéologique du bassin de la source et de la canalisation souterraine ouest, *Revue archéologique de Narbonnaise*, tome 27-28, 1994, p. 121-163.

6 *Ibid.*, p. 129.

7 R. Amy et P. Gros, La Maison Carrée de Nîmes, XXXVIII^e suppl. à Gallia, 2 vol., Paris, 1979.

8 J. Benoit, "Nîmes : études sur l'urbanisme antique. Problèmes de méthode et résultats", *Bulletin de l'École antique de Nîmes*, 1981, 16, p. 69-90. Il s'agit de la structure rouge de Jean Benoit.

9 P. Gros, *op. cit.*, p. 127.

10 J. Benoit, *op. cit.*, p. 88.

11 CIL XII, 3151. Sur ce point cf. P. Gros, "Rapport de synthèse", dans Les enceintes augustéennes dans l'Occident romain, Actes du colloque international de Nîmes, (III^e congrès archéologique de Gaule méridionale), 9-12 octobre 1985, Nîmes, BEAN., nouvelle série, n° 18, 1985-1987, p. 159.

12 Nous ne connaissons pas le statut administratif de l'Uzège à l'époque d'Auguste dont le territoire semble soumis à l'administration d'une centuriation d'Orange (Orange B), M. Assénat, *Cadastrés et romanisation dans la cité antique de Nîmes*, *Revue archéologique de Narbonnaise*, 2006, Suppléments 36, p. 159 sq.

l'ordre de 708 - 709 mètres)¹³. Au Nord la centuriation suit peu ou prou la longitude du cours du Gardon au nord de Nîmes et du "Camp des Garrigues". Vers l'Est le réseau s'étend jusqu'au Rhône. Vers l'Ouest sa limite pourrait se situer sur le Lez ou légèrement en deçà¹⁴. Pour ce qui est des traces les plus méridionales de "Nîmes B", elles se situeraient dans la région de Saint-Gilles (figure 4). C'est donc une grande partie du territoire de la cité de Nîmes qui est concernée par cet aménagement. Notons que cette centuriation compte parmi ses éléments plusieurs tronçons de la voie Domitienne entre Nîmes et *Ambrussum*¹⁵. La figure 5 donne l'exemple d'un relevé de traces orientées comme la centuriation, observées dans le paysage contemporain de la région d'Ambrussum.

Différemment de nombreuses autres centuriations qui présentent des rapports de triangulations connus avec une voie romaine ou une autre centuriation, "Nîmes B" ne semble pas entretenir de relation de triangulation avec d'autres réseaux centuriés¹⁶. Même s'il est vraisemblable que sa conception n'ait pas échappé à un canevas géodésique, il reste que l'on ne peut que constater que l'orientation du système a repris celles de vestiges plus anciens¹⁷. Selon

-
- 13 Sur l'historiographie relative aux propositions de restitutions théoriques relatives de cette centuriation voir M. Assénat, 2006, *op. cit.* p. 33. Nous cherchons actuellement à préciser davantage l'orientation de ce système et ses articulations éventuelles avec les autres réseaux connus de la cité de Nîmes. Nos remerciements vont à Michel Olive qui nous apporte une aide technique précieuse et des conseils toujours avisés.
- 14 En effet, le réseau "*Sextantio-Lattara*", identifié par Antoine Pérez dans la vallée du Lez rend parfois ardu la différenciation des orientations du parcellaire A. Pérez, *Les cadastres antiques en Narbonnaise occidentale. Essai sur la politique coloniale romaine en Gaule du Sud (IIe s. av. J.-C. - IIe s. ap. J.-C.)*, RAN, suppl. n. 29, 1995, p. 236-237.
- 15 Sur la description de la structure et sur les éléments fouillés susceptibles d'y être associés voir M. Assénat, 2006, *op. cit.*, p. 33 et 101-102.
- 16 Sous réserve de nouvelles observations à l'étude. Quoiqu'il en soit il reste selon nous que la détermination prioritaire de l'orientation de cette centuriation dût être la reproduction de celle du sanctuaire pré-romain. Voir la note suivante.
- 17 C'est en 1991, à l'occasion d'un article consacré aux cadastres de la basse vallée du Rhône, que de nouvelles recherches nous permirent d'établir un lien précis entre cette centuriation et l'urbanisme augustéen de Nîmes et de proposer une reconstitution théorique mettant en évidence les liens organiques entre la structure urbaine appelée "rouge" par Jean Benoit et la centuriation rurale (M. Assénat, "Contribution à l'étude des cadastres romains de la basse vallée du Rhône : nouveaux apports et problèmes de chronologie", *RAN*, 24, 1991, p. 44-45). Les fouilles de la rue Saint-Laurent conduites par Pierre-Yves Genty avait mis en évidence un quartier d'habitation occupé du V^e siècle au II^e s. av. J.-C. puis de la première moitié du I^{er} s. av. J.-C. jusqu'à l'époque d'Auguste (P.-Y. Genty *et alii*, "Recherches sur l'habitat romain à Nîmes. Les fouilles de la rue Saint-Laurent", *BEAN*, 15, 1980, et notice "Rue Saint-Laurent, côté sud, à l'angle de la rue Florian", dans *Archéologie à Nîmes, 1950-1990...*, p 80-82, résultats qui impliquaient l'existence d'une ville de plaine préromaine et que toutes les constructions avaient observé au cours des siècles et jusqu'à l'époque augustéenne une orientation constante semblable à celle de la ville augustéenne. L'orientation recalculée des vestiges pour la maison édifiée peu avant le milieu du I^{er} s. av. J.-C. et restructurée vers le changement d'ère présenterait une inclinaison comprise entre NL 16° et 18° W (à $\pm 2^\circ$) soit entre NG 14,4° et 16,4° W (Cf. M. Monteil, *Nîmes antique et sa proche campagne*, MAM, Lattes, 1995, p. 273-279). Aujourd'hui il nous semble qu'il est tout autant difficile de retenir cet exemple dans notre démonstration ... que d'y renoncer. Quoiqu'il en soit les découvertes du site de la « Villa Roma » (ci-après) vont dans le même sens que nos premières conclusions.

nous cette coïncidence n'est nullement due au hasard.

En effet, les fouilles dites de "Villa Roma", au pied de la Tour Magne et aux abords de la source de la Fontaine et du "temple de Diane", ont révélé un bâtiment public indigène, tardo-hellénistique, partageant l'orientation du plan d'urbanisme augustéen¹⁸ (figure 6). Cette découverte constitue un document capital sur la politique de romanisation menée par le *princeps* puisque la création du réseau d'Auguste s'est appuyée, en l'intégrant, sur un plan de ville indigène.

La source de la Fontaine est un très ancien sanctuaire lié à l'eau, organisé autour d'une résurgence vauclusienne située aux pieds du Mont Cavalier. Trois inscriptions, dont une mentionnant « les mères namausiques », datées d'entre la fin du II^e s. ou le I^{er} s. av. J.-C. indiquent que, dès cette période au moins, les abords de la source font l'objet d'aménagements¹⁹. Dans le même sens la fouille du site de la « Villa Roma » a dévoilé l'existence d'un bâtiment à portique, daté du début du premier siècle et orienté comme les structures protohistoriques (V^e s. av. J.-C.) qui le précèdent. Or ce sont les directions de ce quartier qui ont été empruntées et magnifiées par l'architecte augustéen. Laurent Sauvage, dans un article tout à fait éclairant, note « La pérennisation des directions architecturales du monument à portique dans celles de l'*Augusteum* à la fin du I^{er} s. av. J.-C., à une époque où le monument a été démantelé et a cédé la place à une terrasse monumentale, implique l'existence d'autres édifices, antérieurs au complexe monumental augustéen, et répondant à un même schéma urbanistique et aux mêmes orientations que le monument à portique »²⁰.

Est de la même manière orientée la rampe monumentale d'accès à la Tour Magne²¹, qui relie le complexe de la fontaine à cet édifice de l'enceinte protohistorique, rhabillé de façon ostentatoire à l'époque augustéenne, dominant le dispositif de l'enceinte augustéenne et signalant la ville à des kilomètres.

Évoquant le *Caesarium* de Cyrène ou le *Sebasteion* d'Ephèse, Pierre Gros rappelle que « Quoiqu'il en soit, ces exemples sont caractéristiques d'une politique d'annexion progressive de l'espace architectural. Celui-ci ne se dépouille pas pour autant de ses fonctions antérieures, et les cultes anciens, quand ils existent, sont intégrés sans perte d'identité à la nouvelle organisation religieuse. Le but est, à vrai dire, d'ancrer celle-ci à proximité des sites et des édifices qui représentaient traditionnellement, pour la communauté urbaine, des centres de convergence naturels. »²²

18 Cf. E. Guillet *et alii*, "Un monument à portique tardo-hellénistique près de la source de la fontaine, à Nîmes (Gard)", *DAM*, 15, 1992, p. 57-89, et L. Sauvage, "Le sanctuaire protohistorique de la Fontaine à Nîmes, à la lumière des découvertes récentes", *DAM*, 15, 1992, p. 112-116.

19 L. Sauvage, « Le sanctuaire protohistorique de la Fontaine à Nîmes, à la lumière des découvertes récentes », *Documents d'Archéologie Méridionale*, vol. 15, 1992. Espaces et monuments publics protohistoriques de Gaule méridionale. p. 113.

20 *Ibid*, p. 114.

21 . P. Varène, "La Tour Magne et l'Augusteum de Nîmes", *Revue archéologique*, 1, 1987, p. 91-96.

22 P. Gros, *op. cit.*, p. 124-23.

Si nous introduisons des éléments de chronologies plus précis, nous constatons que le *Princeps* a été impliqué très tôt dans les aménagements de la ville²³. Ainsi deux dédicaces, datées du neuvième consulat d'Auguste (année 25), sont associées à l'aménagement des deux exèdres de la source. Sur le forum, localisé dans l'aire de la Maison Carrée, ont aussi été fouillés les vestiges d'un premier ensemble public daté du courant du dernier quart du I^{er} s. av. J.-C. (entre 25 et 10 av. J.-C.)²⁴ et ceux-ci partagent l'orientation du plan urbain augustéen. Ce programme monumental initial aurait été abandonné alors même que son édification n'était pas achevée pour laisser place, vers le changement d'ère, à la construction de la Maison Carrée dédiée après 5 ap. J.-C. aux Princes de la Jeunesse²⁵. Ces indices constituent deux *termini ante quem* qui laissent à penser que la mise en place du plan dans le centre-ville est intervenue au tout début du règne du *Princeps*. On en vient donc à se demander si le choix d'une orientation plus ancienne, ancrée dans la tradition protohistorique ou au moins du début du I^{er} s. av. J.-C., fait sens.

L'historiographie a depuis longtemps montré que la stratégie du *Princeps*, jetant les bases de ce qui devenait un régime nouveau, s'était appuyé sur la restauration de traditions et de cultes républicains, comme sur celle d'institutions remises à l'honneur mais vidées de leur substance au profit de sa seule puissance.

Au sanctuaire de la Fontaine, les manifestations d'attachement à la source, les habitudes, ont été captées en superposant le culte de Rome et d'Auguste à des dévotions bien ancrées dans les rituels protohistoriques, et arrimés à leur topographie ; s'y ajoutent l'embellissement du site, et le fait que les édilités princières, venaient honorer la tradition selon un schéma bien connu dans ces aspects religieux, politiques et institutionnels. Mais, ici, et ceci importe particulièrement, on peut observer de même comment le culte impérial naissant, s'inscrit non seulement dans un cadre indigène, mais aussi dans une topographie dont la matrice, la centuriation, relève de pratiques romaines également relativement anciennes. Pour la première fois sans doute, (ce qui ne signifie pas que l'expérience n'ait pas été tentée ailleurs en même temps), nous pouvons observer, en effet, l'élaboration d'un espace sacralisé dans l'espace défini par une centuriation ; cela mérite un petit commentaire.

23 CIL, XII, 3148 et 3149. En 1753 Jean-Philippe Maréchal a replacé ces deux blocs dans le mur de soutènement du double escalier construit par ses soins, mais ceux-ci, confondus avec les symboles de la royauté, furent martelés pendant la révolution. Selon H.-Adolphe Pieyre, *Histoire de la ville de Nîmes depuis 1830 jusqu'à nos jours*, Nîmes, 1886-1887, leur texte fut restitué en 1850. Sur ce point voir A. Veyrac et J.-M. Pène, "L'*Augusteum* de la Fontaine de Nîmes : étude archéologique du bassin de la source et de la canalisation souterraine ouest", *RAN*, 27-28, 1994-1995, p. 166-167.

24 M. Célié *et alii*, "Enceintes et développement urbain : Nîmes antique des origines au I^{er} s. ap. J.-C.", *JRA*, 7, 1994, p. 391. Ces vestiges sont représentés à l'Ouest, par un espace ouvert entouré, sur trois côtés au moins, par une galerie à portique ouvrant au Sud vers cinq pièces continues et à l'Est, par une galerie semblant donner accès à un bâtiment.

25 . Cf. *CAG, Nîmes*, 171-179, p. 278-296, et *CIL XII*, 3156.

À l'origine la *limitatio* est elle-même un *templum*²⁶. Inaugurée par un magistrat/prêtre, elle met en conformité l'espace terrestre avec l'ordre souverain des dieux et avec celui non moins souverain de la *civitas*. Instrumentalisée et généralisée à la faveur des conquêtes, elle est un moyen efficace d'administration et de romanisation et, quelle que soit la façon dont elle articule ville et campagne, la *limitatio* est avant tout un monument civique. Assez peu étudiée justement sous cette qualification de « monument »²⁷, elle n'en reste pas moins une construction unitaire dont la conception répond à des proportions et à un ordonnancement précis modulant, en un tout harmonieux, des éléments hiérarchisés. Mieux encore, la centuriation organise, réellement et performativement, la répartition sur l'ensemble du territoire de l'ensemble des monuments, conditionne le rayonnement des valeurs dont ils sont, au même titre qu'elle, le manifeste, en diffusant les valeurs de la romanité jusqu'aux bornes de la cité.

Comme le montre par exemple la mappe du cadastre B d'Orange, les *limitationes* permettent de « battre les cartes » et d'instituer un nouveau cadre administratif, politique, culturel, fiscal et « sensoriel », dans lequel s'effectue la production économique, en remaniant totalement les structures sociétales préexistantes. À Orange, sans disparaître, les Tricastins, dont le territoire a été réorganisé par le cadastre B, sont désormais confinés sur les terres les moins attractives et connaissent le sort des peuples vaincus soumis au tribut²⁸.

À Nîmes, l'insertion de l'*Augusteum* dans une telle trame doit être pensée comme l'intégration d'un élément nouveau dans un rouage favorisant son assimilation et la contamination de la cité par son message. Dès lors le culte impérial deviendra une valeur hautement civique. On mettra bien sûr cette remarque en regard de l'étude de Gilles Sauron considérant le manifeste ornemental de l'*ara Pacis Augustae* comme l'esthétisation du message dynastique et des innovations politiques augustéennes qui s'annoncent dans les compositions végétales du monument : de très peu postérieure au monument de la *Via Flaminia*, la Maison Carrée propose significativement une frise de rinceaux d'acanthé qui reproduit et diffuse le modèle de l'autel de la Paix²⁹.

À Nîmes donc, l'observation des liens qui unissent les monuments du centre-ville, le plan urbain augustéen et la centuriation, a montré que tous se rapportaient à une même acception politique de la cité. Il est donc important de restituer l'introduction du culte impérial dans le contexte topographique qui lui a donné âme et corps. Nous voyons ici comment un discours nouveau a fait résonner son message et ses modèles aux confins de la tradition et à l'aune de l'avènement d'un nouvel âge d'or. Si on avait déjà remarqué l'importance de l'adaptation de

26 K. Lachman, *Frontin* 27 ; 13-17; 26, 1-10. A. Pérez, *op. cit.*, p. 66-73.

27 M. Assénat, 1991, *op. cit.*, p. 48.

28 A. Piganiol, *Les documents cadastraux de la colonie romaine d'Orange*, Gallia, suppl. n. XVI, 1962.

29 G. Sauron, *L'histoire végétalisée, ornement et politique à Rome*, Rome, 2000, p. 123.

l'*Augusteum* aux structures culturelles et topographiques protohistoriques et pré-augustéennes, l'interprétation de son assimilation dans le cadre cette fois d'une centuriation constituée pareillement, pour reprendre l'expression de Gilles Sauron, « un élément pour l'histoire d'un enracinement »³⁰.

Bibliographie

- R. Amy et P. Gros, *La Maison Carrée de Nîmes*, XXXVIII^e suppl. à Gallia, 2 vol., Paris, 1979.
Archéologie à Nîmes, 1950 - 1990, Bilan de 40 ans de recherches, Musée archéologique de Nîmes, juin 1990.
- M. Assénat, « Cadastres et romanisation dans la cité antique de Nîmes », *Revue archéologique de Narbonnaise*, supplément n° 36, 2006.
- M. Assénat, « Contribution à l'étude des cadastres romains de la basse vallée du Rhône : nouveaux apports et problèmes de chronologie », *RAN*, 24, 1991, p. 39-62.
- J. Benoit, « Nîmes : études sur l'urbanisme antique. Problèmes de méthode et résultats », *Bulletin de l'Ecole antique de Nîmes*, 1981, 16, p. 69-90. Il s'agit de la structure rouge de Jean Benoit.
- F. Blume, K. Lachman et A. Rudorff, *Die Schriften des römischen Feldmesser*, Corpus Agrimensorum Romanorum, Berlin t. I, 1848.
- M. Célié *et alii*, « Enceintes et développement urbain : Nîmes antique des origines au I^{er} s. ap. J.-C. », *JRA*, 7, 1994.
- D. Roman, « Auguste et la colonie de Nîmes : remarques à propos d'une dichotomie », dans *Les villes augustéennes de Gaule, Colloque d'Autun, 6, 7, 8 juin 1985*, Autun, 1991, p. 35-39.
- J.-L. Fiches et A. Veyrac, *Carte archéologique de la Gaule, Nîmes*, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, Paris 1996, vol. 30/1.
- P.-Y. Genty *et alii*, « Recherches sur l'habitat romain à Nîmes. Les fouilles de la rue Saint-Laurent », *BEAN*, 15, 1980.
- E. Guillet *et alii*, « Un monument à portique tardo-hellénistique près de la source de la fontaine, à Nîmes (Gard) », *DAM*, 15, 1992, p. 57-89.
- P. Gros, « L'*Augusteum* de Nîmes », *Revue archéologique de Narbonnaise*, 17, 1984, p. 123-134.
- P. Gros, « Rapport de synthèse », dans *Les enceintes augustéennes dans l'Occident romain, Actes du colloque international de Nîmes, (III^e congrès archéologique de Gaule méridionale), 9-12 octobre 1985*, Nîmes, *BEAN.*, nouvelle série, n° 18, 1985-1987, p. 159-164.
- M. Le Glay, « Le culte d'Auguste dans les villes augustéennes...et les autres », dans *Les villes augustéennes de Gaule, Colloque d'Autun, 6, 7, 8 juin 1985*, Autun, 1991, p. 117-126.
- M. Monteil, *Nîmes antique et sa proche campagne*, MAM, Lattes, 1995.
- A. Pérez, « Les cadastres antiques en Narbonnaise occidentale. Essai sur la politique coloniale romaine en Gaule du Sud (II^e s. av. J.-C. - II^e s. ap. J.-C.) », *Revue archéologique de la Narbonnaise*, suppl. n° 29, 1995.

30 *Ibid.*, p. 223.

- H.-A. Pieyre, *Histoire de la ville de Nîmes depuis 1830 jusqu'à nos jours*, Nîmes, 1886-1887.
- A. Piganiol, *Les documents cadastraux de la colonie romaine d'Orange*, Gallia, suppl. n° XVI, 1962.
- G. Sauron, *L'histoire végétalisée, ornement et politique à Rome*, Rome, 2000.
- L. Sauvage, « Le sanctuaire protohistorique de la Fontaine à Nîmes, à la lumière des découvertes récentes », *DAM*, 15, 1992, p. 112-116.
- P. Varène, « La Tour Magne et l'*Augusteum* de Nîmes », *Revue archéologique*, 1987, p. 91-96.
- A. Veyrac et J.-M. Pène, « L'*Augusteum* de la fontaine de Nîmes : étude archéologique du bassin de la source et de la canalisation souterraine ouest », *Revue archéologique de Narbonnaise*, tome 27-28, 1994, p. 121-163.

中津から宇佐にいたる勅使街道沿道の寺社、条里の永続化の要因か？

エリザベート・アストリュック（モンペリエ第三大学）

飯坂晃治 訳（別府大学）

皆さん、こんにちは。

いろいろとありましたが、研究会をようやく開催することができ、こうして参加できることを大変うれしく思います。

2. 本年は日仏国交樹立160周年にあたります。その記念となる年を慶賀するために、「ジャポニスム」と題された大規模なイベントが、6月から2019年2月まで催されます(fig. 2)。そのプログラムでは、日本の文化とその伝統・豊かさに関する50以上の企画や展示、公演が開催されます。そのプログラムは「ジャポニスム2018」というウェブサイトで閲覧できます。この研究会と、より正確に言えば中津条里に関する国際プログラムは、完全にこのイベントの中心に位置づけられるものです。

ペレス氏は2016年の初頭に、中津条里に関するプロジェクトを私に紹介してくれました。私はローマのケントゥリアに関しては知っていましたが、日本でそれと同類の、あるいは少なくともよく似た地割を見ることができるとは考えていませんでした。勅使街道となる道は、農業生活と農地編成だけでなく、宇佐八幡宮とのつながりのゆえに宗教生活にも影響を与えているのです。

3. 私は2017年10月に現地を訪れる機会を得ました。この機会に私は中津という土地を知ることができ、またとりわけ飯沼教授のおかげで伝統的な稲刈りに参加することができましたので、忘れられない一日となりました (fig.3)。

飯沼教授が報告をしてくださいましたが、飯沼教授はより広い視点から勅使街道が土地区画に与えた影響を示してくださいました。私は飯沼教授が街道沿道の寺社を調査して一覧を作成したのは、とりわけそれらの立地が街道に規定されていると思われるだけに、的確であると感じました。

4. この研究を進めるために、私は博士論文において展開した手法に依拠したいと思います。私が2016年11月に提出した中世美術史の博士論文は、8世紀末から11世紀初頭のあいだに地中海ラングドック地方の5つの司教区（アグド、ベジエ、ロデーヴ、マグロンヌ、ナルボンヌ）内に建てられた農村の教会を扱ったものです。この研究では235の教会堂を調査することができましたが、そのうち75の教会堂は現在もなお多かれ少なかれ、歴史的景観のなかに見ることができるものです。そのカタログにより、土地区画に関する様々な論点が提起されたわけですが、その論点は勅使街道の沿道に建てられた寺社にも当てはまります。

大変申し訳ないことに、その比較は簡潔にならざるを得ません。というのも、私はここではおもに、寺社一覧をもちいて私が取り組むことのできる研究分野を提示しようと思うのです。したがって、

さしあたり私は皆さんに答えを示すよりも問題を提起したいと考えています。

5. 最初の作業は、街道沿道に建設された寺社全体をまとめたカタログを作成することにあるでしょう。そのカタログでは、それぞれの寺社は詳細を記したファイルによって提示されることになります。もし可能であれば、そのファイルは、史料が残されている場合には、そのテキストにおける最初の言及から、その立地の歴史記述を可能にするでしょう。というのも、最初期の寺社は7世紀に年代比定されることが知られているからです。同様に、建築プランとともにその構造も記述されるでしょう。

この一覧の作成によってこそ、研究の様々な手がかりが得られるのです。

6. 1点目の手がかりは建物の建設時期に関わります。街道の詳述は、まさに八幡神が鷹居から現在祀られている小椋山への移ったことのようなクロノロジーの理解と認識において重要な役割を果たします。街道と神格は緊密に結び付けられているからです。7世紀から8世紀初頭にかけて豊前国で建てられた寺院および神社の最初のカードは、飯沼教授によって作られました。我々にとって重要である街道の区間に関して、そのカードは5つの寺社、すなわち、現在はなくなってしまった3つの寺院と、現在もみることができる2つの神社を挙げています(fig.6)。

8世紀半ば以降、寺社の建設が増加しているようです。寺社の創建には、国のために仏の鎮護を求める目的があったのでしょうか。

7. 街道の役割に関して、9世紀初頭にナルボンヌ司教区とカルカッソンヌ司教区の間に建設された街道の方向性との比較が可能です。その研究は、司教座聖堂参事会員のエリー・グリフによって1976年におこなわれていますが、この研究は、836年の記録と関連のある、忘れられた聖堂の存在を明らかにすることができました。街道はカラントを起点とし、ウィラ・マクシミアナ（現在のペピューの北部の村）を通り、ペザン市の西方のロミュー通りと重なっていました。このケースでは、街道が2つの礼拝堂の位置特定を可能にします。そのひとつはサン・セルス礼拝堂で、建物そのものは完全に失われてしまいましたが、発掘作業のおかげで建築プランが発見されました。その建築プランは、街道の遺構と平行していました。もうひとつのサン・マルセル礼拝堂はミニャルドの農場の壁のなかに取り込まれています。ここでは街道は目印の役割を果たしています(fig.7)。

8. 勅使街道と、712年に創建された鷹居神社に話を戻しましょう。鷹居神社は八幡神の最初の神社で、街道の延長線上の地に725年に移されるまで、街道のそばに建てられていました(fig.8)。

場所の変更と八幡神がすぐに皇室の神となったという事実とから、研究の第2の手がかり、すなわち宗教的シンクレティズムへと話を進めましょう。宇佐神宮が勅使街道の沿道における後続の寺社の建設に影響を与えたのかどうかという問題が、この宗教的シンクレティズムに関わってきます。

宇佐神宮は神社と寺院をひとつの場所で結合させています。そもそも宇佐神宮は、日本の神々と仏教の教義の融合を掲げた最初期の寺社のひとつなののでしょうか？ それとも宇佐神宮が最初なののでしょうか？ 後続の寺社が神仏習合という現象を継承するのでしょうか？ それとも神社と寺院の交替があるのでしょうか？ また、その数について問うことにも意義があるでしょう。宇佐神宮が移転以来果たした役割とともに、新たな寺社の建設は増加したのでしょうか？

研究の第3の手がかりは寺社の地理的位置に関するものです。寺社は街道沿いに建設され、その遺構は街道を軸としていますが、条里や周辺の村落との関係はいかなるものなのでしょうか？ 実際、九州は5つの国に分かれていました。我々にとって重要なのは豊前という名の国です。豊前国はいくつかの地域に分かれ、その地域自体もいくつかの村落に分かれていました。

地中海ラングドック地方では、9世紀後半のシャルル禿頭王の時代の史料が新たな教会の立地に関する情報を提供します。この史料はその点に関して、教会が道のそばの、妊娠した女性や子供、老人、病人にとってアクセスしやすい場所に位置していなければならなかったことを示しています。奈良の政府かあるいは少なくとも国司が、新たな寺社の配置に関して、そのように指示する決定を下した可能性があるのではないのでしょうか？

その位置は偶然に帰されるものではなく、明確な目的に応じたものに違いありません。その配置は規則的でしょうか？ つまり、寺社間の距離は一定に保たれているのでしょうか？ もう一つの重要な点として、いくつかの寺社は、皇国の様々な道に点在していた宿駅と関連があったのでしょうか？

第4のポイントは、寺社建設の主導者だけでなく、その受益者にも関わってくるでしょう。寺社は誰によって、そして誰のために建設されたのでしょうか？ それぞれの地域は寺社を持ち、それはその地域の行政官のイニシアティブで建てられましたが、その他の者に関してはどうでしょうか？ 寺社は民間のものだったのでしょうか？ あるいは民衆のために建てられたのでしょうか？ 行政官や他の役人のみが寺社を建設できたのでしょうか？ あるいは、貴族の構成員のみがそうすることができたのでしょうか？

地中海ラングドック地方では、9世紀まで農村の教会の大部分は地方の領主によって建てられていました。聖職者にとって重要ではない遠隔地の話です。

この点を明らかにするために、『交替式』を参照することができるでしょう。『交替式』は8世紀末に編纂されたもので、41条からなります。『交替式』は868年に再編集され、条の数は倍になりました。

その諸規定は、国司が介入する地方の生活の領域を示しています。国司は、正倉の管理などといった様々な情報や、より一般的に言えば、あらゆる公共建築物や灌漑、駅馬の維持などに関して報告し、また宗教施設や神社、寺院の財政やそれらの維持に関する報告をおこなう義務を負っています。

私は、そのような定期的な報告の痕跡が史料に残されていることを期待しています。たとえ実際には、いくつかの国が古い記録を書き写すにとどまり、また情報伝達がそれほど定期的におこなわれたわけではなかったとしてもです。

この種の史料は、歴史上のある一時期における、国家の視点や街道沿道の寺社の数について情報を提供するでしょう。

9. 研究を進めるうえで重要なもうひとつの史料は、フランシーヌ・エライユにより翻訳された『類聚三代格 第1巻～第7巻』です(fig.9)。

この重要な翻訳作業は、前田家本・狩野文庫本・観智院本といった写本の読解により完成した『国史大系』に基づいています。

ここで翻訳されている7巻のうち、前半の3巻は祭式の管理に関するもので、後半の4巻は地方行政全般における吏員や職員を扱うものです。

10. [太政官符, 776年《国司はとりわけ神社の掃修と毎年の祭事の際の清浄の維持に留意すること。国司はその掃修を点検し, 毎年上位機関に報告すること》フランシーヌ・エライユ訳『類聚三代格 第1巻～第7巻』] (fig.10)

前半の決定は神社をその地位に応じて維持することに関するものです。それらの決定は包括的なもので、すべての国に適用され、適用されるものであるようです。他方、それらの決定は国司による巡検視察を引き合いに出していますが、これは特に17世紀のラングドックにおける農村の視察を想起させるものであり、またその史料は失われてしまった建築物に関する情報を提供する点で貴重な証言であります。

11. [《神社に寄せられた^{かんべ}神戸に神社の修理をさせるべきこと (811年)》]

《先例によれば、諸国の神社に寄せられた神戸には、課役を負担する成年男性が多い…彼らはその身でもって神社の修理にあたらなければならない、大きな損害が生じないように、損害に応じて彼らに修理をさせるべきである。》]

《神戸を寄せられていない神社は、その禰宜・祝らに修理をさせるべきこと (812年)》]

《大きな神社に寄せられた神戸に、神社の修理をさせるべきこと》フランシーヌ・エライユ訳『類聚三代格 第1巻～第7巻』 (fig.11)。

神戸：ある家族の構成員とその家です。

これは、西欧における教区の制度と大所領の領主であった修道院の制度を想起させます。

同時にこの史料から、人間生活に関する穢れや不道徳に対処しなければならない特別な神社に関わる明確な決定を見ることができます。

いくつかの決定は豊前国に関するもので、宇佐八幡宮に関わるものです。それらの決定はおもに神社での生活に言及していますが、街道沿道の他の寺社に関わるものではありません。

それにもかかわらず、そのような文書が存在していたのであれば、寺院や神社の管理に関して国司と地域の名士の間でやりとりがあったと考えるのは、おそらく適切でしょう。

12. 研究の最後の手がかりは、寺社の建築様式に関わるものです。たとえ、数世紀にわたって再建された寺社がいくつかあったとしてもです。

朝鮮の王国からの渡来人はこの地域には多く、八幡神はもともと彼らの神です。宗教的シンクレティズムを経た後の寺社の建築技術や装飾方法に一種の混交を探ることは可能でしょうか？

7世紀から8世紀にかけての古代の寺社の発掘作業は、朝鮮の技術にもとづいて加工された瓦の存

在を明らかにしました(fig.12)。したがって、渡来人のノウハウと現地の資材の融合は考えられるのです。同様に、最初の街道は朝鮮人によって建設されたとするのが適切でしょう。

13. これらの様々な点を考究するうえで史料の欠落が著しいとしても、考古学を信頼し、貴重な補足データを得るために、とりわけいまだ発掘されていない場所で調査や瓦の発掘をするのが適切でしょう。

結論として、中津と宇佐を結ぶ勅使街道の沿道に建設された寺社の一覧の作成は研究の様々な分野へのアクセスを可能にしますが、とりわけ私が望むのは、それが勅使街道の設定やひいては条里の画定において寺社が果たした役割に関する総合的な視点を提供する格好の手段となることです(fig.13)。

14. ご清聴ありがとうございました。

訳者注記

本稿のなかに『類聚三代格』からの引用があるが、翻訳にあたってはアストリュック氏の引用したフランス語訳をそのまま日本語に訳した。

なお訳文中の『交替式』と『類聚三代格』に関しては、別府大学文学部教授田村憲美氏から大変貴重なご助言を賜った。記して感謝申し上げたい。

<図版 (Figures) >

Les temples le long de la Voie Impériale
de Nakatsu à Usa, éléments de
pérennisation du Jôri ?

Elisabeth Astruc – ATER en histoire de l'art médiéval, université Paul-
Valéry, Montpellier 3



fig.2 ジャポニスム 2018
Japonismes 2018



fig.3 稲刈り (récoltes du riz)、国東半島・田染の荘
(la seigneurie Tashibu dans la péninsule Kunisaki,Oita)



fig.4 リュナスのサン・ジョルジュ礼拝堂
(フランス・エロー県)、10世紀
Saint-Georges de Lunas (Hérault), Xe siècle



fig.5 宇佐大路 (豊前官道) と宇佐八幡宮
La grande route Usa, (Buzen-kandô)

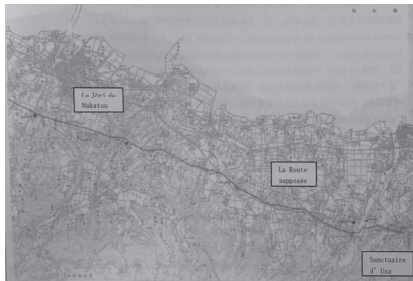


fig.6 豊前道と古代寺院・神社遺跡
Buzen-dô et sites archéologiques des temples
bouddhiques et shintoïstes

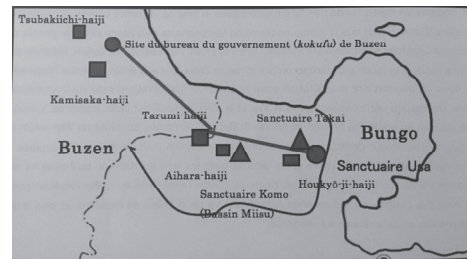


fig.7 エストラッド街道、9世紀初
Le chemin de l'Estrade, début IXe siècle



fig.8 豊前道
Buzen-dô

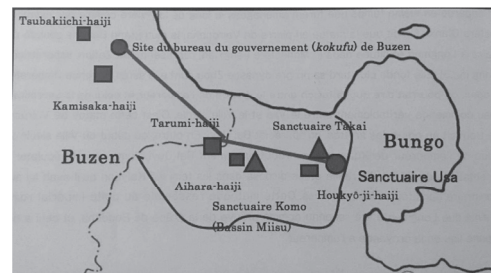


fig.9 フランシーヌ・エライユ訳『類聚三代格 第1巻～第7巻』
(国史大系・前田家本・狩野文庫本・観智院本)

Recueil de décrets de trois ères (Kokushi Taikei,
Maedebon, Kanôbon, Kanshi-inbon)

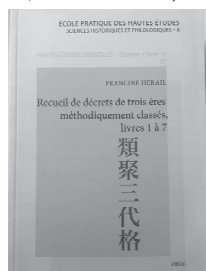


fig.10 太政官符 776年

Décret du ministère des Affaires suprêmes, 776

« Qu'un administrateur de province soit spécialement désigné pour veiller à l'entretien des sanctuaires et du maintien de la pureté à l'occasion des célébrations annuelles, qu'il en contrôle l'état et chaque année fasse rapport aux autorités supérieures. »

fig.11 太政官符 811年、812年

- Il faut faire réparer les sanctuaires par les foyers qui y sont attachés (811)
« Selon les précédents, il y a beaucoup d'hommes adultes contribuables dans les foyers attachés aux sanctuaires des provinces. [...] Il faut les faire travailler de leur personne à l'entretien des sanctuaires, leur faire faire des réparations suivant les dégâts, de façon que ne se produisent pas de gros dommages ».
- Il faut faire réparer les sanctuaires qui ne disposent pas de foyers par les desservants (812).
- Il faut faire réparer les sanctuaires par des foyers concédés aux grand sanctuaires.

fig.12 百濟系瓦

Tuiles d'origine de Paekche (Baekje), sud-ouest de la Corée

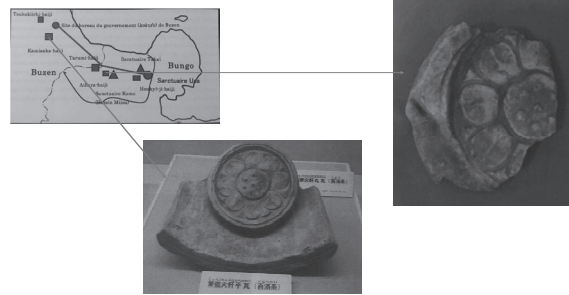
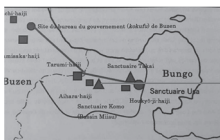


fig.13 薦神社
Sanctuaire Komo



Merci pour votre attention

ご清聴ありがとうございます。

Les temples le long de la Voie Impériale de Nakatsu à Usa, éléments de pérennisation du Jôri ?

Elisabeth Astruc
(Université de Montpellier III)

Bonjour à toutes et à tous.

C'est un plaisir d'assister à cette journée d'études qui a enfin réussi à se mettre en place après moult péripéties.

2. Cette année marque les 160 ans des relations diplomatiques franco-japonaises. Afin de célébrer dignement cet anniversaire, un événement de grande envergure, intitulé Japonismes a lieu depuis le mois de juillet et se déroulera jusqu'à février 2019. Au programme, plus d'une cinquantaine de projets, d'expositions et de spectacles autour de la culture japonaise, ses traditions et sa richesse. Le programme est disponible sur le site Japonismes 2018. Cette journée d'étude et plus précisément ce programme international autour du jori de Nakatsu, s'insèrent parfaitement au cœur de cet événement.

Monsieur Pérez m'a présenté le projet autour du jôri de Nakatsu en début d'année 2016. Je connaissais la centuriation romaine mais ne pensais pas trouver un procédé semblable ou du moins ressemblant au Japon. La route qui devient voie impériale a une influence sur la vie agricole et l'organisation du territoire mais aussi sur la vie religieuse grâce à son lien avec le temple Hachiman d'Usa.

3. J'ai eu l'opportunité de me rendre sur site en octobre 2017, ce qui m'a permis de prendre connaissance du terrain et surtout grâce au professeur Inuma de participer à une journée mémorable de récolte du riz en tenue traditionnelle.

A partir du constat mis en avant par le professeur Inuma, qui a donc montré l'influence de la voie impériale sur l'organisation du territoire dans son aspect le plus large. J'ai pensé qu'il pouvait être pertinent de réaliser un corpus recensant les temples qui longent la voie, d'autant plus que leur tracé semble dicté par celui de la route.

4. Pour réaliser cette étude, je m'appuierai sur la méthodologie développée dans le cadre de ma thèse. Thèse de doctorat en histoire de l'art médiéval que j'ai soutenue en novembre 2016 et qui traitait des églises rurales érigées entre la fin du VIIIe et le début du XIe sur le territoire de 5

anciens diocèses en Languedoc méditerranéen (Agde, Béziers, Lodève, Maguelonne et Narbonne). Cette étude a permis de recenser 235 édifices dont 75 sont toujours encore plus ou moins visibles dans le paysage monumental. A partir, de ce catalogue, de nombreux points concernant l'organisation du territoire ont été soulevés, points que l'on retrouve pour les temples situés le long de la voie impériale.

Je m'excuse mais cette communication sera brève car je vais principalement vous présenter les champs d'études que ce corpus me permettra d'aborder. Pour l'instant, je vais donc vous exposer plus de questions que de réponses.

5. Le premier travail consistera à réaliser un catalogue regroupant l'ensemble des sanctuaires édifiés le long de la route où chacun sera présenté par le biais d'une fiche détaillée. Si cela est possible, elle dévoilera l'historiographie du site avec les premières mentions dans les textes si les documents ont été conservés, sachant que les premiers édifices datent du VIIe siècle. Également, une description précise du bâti avec un plan de la structure, sera présent.

C'est à partir de ce corpus que de nombreuses pistes de recherches seront exploitées.

6. La première concerne la date de fondation des édifices. L'élaboration de la route joue un rôle important dans la compréhension et la connaissance de la chronologie, tout comme le déplacement de la divinité Hachiman de Takai à Ogurayama qui est le site actuel : la voie et la divinité étant étroitement liées. Une première carte des temples bouddhiques et shintoïstes érigés dans la province de Buzen entre le VIIe et le début du VIIIe siècle a été réalisée par le professeur Iinuma. Pour la portion de voie qui nous intéresse, elle dénombre 5 sanctuaires, 3 bouddhiques qui ont disparu et 2 shintoïstes toujours visibles.

Il semblerait qu'à partir du milieu du VIIIe siècle, les constructions de temples se multiplient. Leurs fondations seraient destinées à appeler sur le pays la protection des buddhas.

7. Un parallèle, sur le rôle de la route peut être réalisé avec le chemin de l'estrade, mis en place au début du IXe siècle entre le diocèse de Narbonne et le diocèse de Carcassonne. Son étude, réalisée par le chanoine Elie Griffe, en 1976, a permis de mettre au jour des sanctuaires oubliés, mis en relation avec un texte de 836. La voie partait de Quarante, passait par la villa Maximiana (nord du village actuel de Pépieux) puis récupérait le chemin de Romieu à l'ouest de la ville de Pezens. Dans ce cas, la route permet de localiser deux églises, la chapelle Saint-Celse qui a totalement disparu mais dont le plan a été mis au jour grâce à un chantier de fouille. Le plan était parallèle au tracé de la route. Et l'église Saint-Marcel qui est prise dans les murs de la ferme de la Mignarde. La route fait ici office de marqueur.

8. J'en reviens à la voie impériale avec le temple Takai qui fut édifié en 712. Il est le premier sanctuaire de la divinité Hachiman, construit en bord de route jusqu'à son transfert en 725 sur le site qui est dans le prolongement de la même route.

Ce changement de lieu et le fait que cette divinité devienne rapidement divinité impériale, m'amène à la deuxième piste d'étude, le syncrétisme religieux dont témoigne le temple d'Usa a-t-il eu une influence sur les fondations postérieures le long de la voie impériale ?

Le temple d'Usa réunit en un seul lieu un temple shintoïste et un temple bouddhique. D'ailleurs fait-il parti des premiers à afficher cette union entre les kamis japonais et les enseignements de Bouddha ou est-il le premier ? Les temples construits par la suite reprennent-ils ce phénomène du shinbutsu shugô ou y a-t-il une alternance de temples shintos et temples bouddhiques ? Il conviendra également de s'interroger sur leur nombre. Est-ce qu'avec le rôle notable que joue le temple d'Usa depuis son transfert, le nombre de nouvelles constructions a-t-il augmenté ?

La troisième piste de recherche concerne la position géographique des temples. Ils sont placés le long de la voie, leur tracé respectant l'axe mais qu'en est-il par rapport au jôri et aux villages alentours ? En effet, Kyushu était divisé en 5 provinces. Celle qui nous intéresse se nomme Buzen. Elle est divisée en districts qui sont eux même divisés en villages.

En Languedoc méditerranéen, un texte de la seconde moitié du IXe siècle du roi Charles le Chauve, donne des indications concernant les emplacements des nouvelles églises, en indiquant qu'elles devaient être proches d'une route et facilement accessibles aux femmes enceintes, aux enfants, aux vieillards et aux malades. Est-il possible que le gouvernement de Nara ou du moins le gouverneur de la province, ait promulgué des décrets présentant ce type d'indications concernant l'implantation de nouveaux temples ?

Leur position n'est pas due au hasard et doit répondre à un besoin précis. Est-ce que leur implantation est régulière ? Je veux dire, la distance qui les sépare est-elle régulière ? Autre point intéressant, est-ce que certains étaient liés au relais de postes qui parsemaient les différentes routes de l'Empire.

Le quatrième point s'intéressera aux commanditaires de la construction des sanctuaires mais également aux destinataires. Par qui et pour qui ces temples ont-ils été édifiés ? Chaque district possédait son temple, bâti à l'initiative des administrateurs dudit districts mais qu'en est-il des autres, étaient-ils privés ou étaient-ils destinés à la population ? Seuls les administrateurs et autres fonctionnaires pouvaient édifier des temples ou des membres de l'aristocratie pouvaient y prétendre ?

En Languedoc-méditerranéen, jusqu'au IXe siècle, la majorité des églises rurales sont bâties par les seigneurs locaux, les zones reculées intéressant peu le clergé.

Pour tenter d'éclairer ce point, l'étude pourrait s'appuyer sur *Les règlements relatifs aux relevés*, compilés à la fin du VIIIe siècle et qui contiennent 41 articles. Ce texte est revu en 868 et le nombre d'articles a doublé.

Ces règlements présentent les champs d'intervention des gouverneurs dans la vie provinciale. Ces derniers doivent rendre des comptes sur de nombreux éléments comme la gestion des magasins publics de riz et plus généralement sur les questions d'entretien de tous les édifices publics, du réseau d'irrigation ou des relais de postes mais aussi de rendre des comptes sur les finances des établissements religieux, sanctuaires et temples ainsi que sur leur entretien.

J'espère que la trace de ces comptes rendus réguliers a été conservée dans les archives, même si dans les faits, certaines provinces se contentaient de recopier les anciens registres et les transmissions n'étaient pas très régulières.

Ce type de source devrait offrir une vision de l'état et surtout du nombre de temples présents le long de la voie à un moment précis.

9. Un autre document intéressant à étudier est *Le Recueil de décrets de trois ères méthodiquement classés, livres 1 à 7*, traduit par Francine Hérial.

Son important travail s'appuie sur l'édition du Kokushi Taikei, complété par la lecture des manuscrits, Maedebon, Kanôbon et Kanchi-inbon.

Il s'agit de 7 livres dont les 3 premiers concernent l'administration du culte et les 4 autres, traitent des fonctionnaires et des employés, de l'administration locale en général.

10. [Décret du ministère des Affaires suprêmes, 776 : « Qu'un administrateur de province soit spécialement désigné pour veiller à l'entretien des sanctuaires et du maintien de la pureté à l'occasion des célébrations annuelles, qu'il en contrôle l'état et chaque année fasse rapport aux autorités supérieures. », in *Le Recueil de décrets de trois ères méthodiquement classés, livres 1 à 7*, traduit par Francine Hérial]

Les premiers décrets concernent l'entretien des sanctuaires suivant leur statut. Ils sont génériques et semblent s'adapter et s'appliquer à toutes les provinces. E revanche, ils mettent en avant de nombreuses tournées d'inspection par les administrateurs des provinces qui évoquent les visites pastorales du XVIIe siècle en Languedoc notamment et dont les textes sont précieux pour connaître certains édifices disparus.

**11. [« ● Il faut faire réparer les sanctuaires par les foyers qui y sont attachés (811)
« Selon les précédents, il y a beaucoup d'hommes adultes contribuables dans les foyers attachés aux sanctuaires des provinces. [...] Il faut les faire travailler de leur personne à l'entretien des sanctuaires, leur faire faire des réparations suivant les dégâts, de façon que ne se produisent pas de gros dommages ».**

● Il faut faire réparer les sanctuaires qui ne disposent pas de foyers par les desservants (812).

● Il faut faire réparer les sanctuaires par des foyers concédés aux grand sanctuaires. »

in Le Recueil de décrets de trois ères méthodiquement classés, livres 1 à 7, traduit par Francine Hérial

Foyer : une maison avec des membres d'une famille

Cela évoque, le système paroissial en Occident et le système des abbayes qui étaient de grandes propriétaires terriennes.

A côté, de ces textes, on retrouve des décrets plus précis, concernant des sanctuaires particuliers qui doivent faire face à la souillure ou aux impuretés, relevant d'une activité humaine.

Quelques décrets concernent la province de Buzen mais sont liés au temple d'Hachiman, situé à Usa. Ils font essentiellement référence à la vie monastique et n'abordent pas les autres temples présents le long de la voie.

Néanmoins, il serait sans doute pertinent, si de telles archives existaient, de consulter les échanges entre les administrateurs de la province et les chefs de districts concernant l'entretien des temples et des sanctuaires.

12. La dernière piste de recherche traite de l'architecture de ces temples, même si certains ont été reconstruits au fil des siècles.

Les immigrés du royaume de Corée sont nombreux dans la région et Hachiman est à l'origine leur divinité. Est-il possible d'envisager après le syncrétisme religieux, une sorte de mélange dans les techniques de constructions et dans la manière d'orner les temples ?

Les fouilles des temples antiques des VIIe-VIIIe siècles ont révélé la présence de tuiles façonnées à partir des techniques coréennes. La fusion du savoir-faire des immigrés et l'emploi des matériaux locaux est donc envisageable. Il convient également de noter que la première voie a été construite par les coréens.

13. Si la documentation est trop lacunaire pour travailler sur ces différents points, il conviendra de s'en remettre à l'archéologie avec notamment la mise en place de prospections et de chantiers de fouilles sur des sites non encore explorés afin d'obtenir de précieuses données supplémentaires.

En conclusion, la constitution d'un corpus des temples établis sur la portion de voie impériale reliant Nakatsu à Usa donne accès à de multiples champs de recherches mais surtout je l'espère, sera un bon outil qui donnera une vision globale du rôle des temples dans la fixation de la voie impériale et de ce fait de la stabilisation du jōri.

14. Merci de votre attention.

Goseisho Arigato Gozaimashta

別府大学研究GP事業成果報告書

発行日	2019年2月28日
発行	別府大学 大分県別府市北石垣82
編集	山本 晴樹・飯坂 晃治
研究代表	飯沼 賢司
印刷	株式会社クリエイツ. 大分県別府市亀川東町4番20号

